大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第4集

賀 来 西遺跡
宮苑井ノ口遺跡

県道小挟間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年

大分県教育庁埋蔵文化財センター

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第4集

賀 来 西遺跡
宮苑井ノ口遺跡

県道小挟間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年

大分県教育庁埋蔵文化財センター

宮苑井ノ口遺跡（a）と賀来西遺跡（b）の位置（東から）

宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群（北から）

序　　文

本書は、県道小挟間(おばさま)大分線道路改良工事に伴い大分県教育委員会が大分県大分土木事務所の依頼を受けて平成15年度に実施した、賀来西遺跡と宮苑井ノ口遺跡の発掘調査報告書です。

大分市の西部に位置する賀来、宮苑地区一帯は、日当たりの良好な小高い台地と豊かな平野部が展開しています。この一帯は、いにしえ人の生活に、適した環境であったと考えられ、国指定史跡の千代丸古墳、県指定史跡の丑殿古墳をはじめ、先史・原史時代から歴史時代にかけての遺跡が豊富に点在しています。

賀来西遺跡は今から約三千数百年前の縄文時代の土器、石器が出土し、宮苑井ノ口遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた複数の住居跡と、そのすぐ側に、小児用カメ棺墓群が発見されました。集落という日常生活の空間の中に、子どもだけの集団墓地が形成されていた様相が判明しています。当時の社会や集落の様子をはじめ、地域の歴史を知る上で、大変貴重で重要な発見となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに教育・学術の振興、及び地域文化の向上のために活用されることを期待いたします。

最後に、この調査に御協力をいただきました関係各位及び地元の皆様に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成17年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
伊　藤　正　行

例　　言

1．本報告書は、大分県教育委員会が平成15年度に実施した、県道小挟間(おばさま)大分線道路改良工事に伴う、賀来西遺跡と宮苑井ノ口遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、大分県大分土木事務所の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。

3．遺物の整理作業、実測・トレース・写真撮影は、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理補佐員、埋蔵文化財センター職員・嘱託職員がおこなった。

4．出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁埋蔵文化財センターで保管している。

5．本書で使用した地図等は国土地理院作成のものを利用した。

6．赤色顔料分析報告(第５章)は、大分県立歴史博物館で保存科学を担当する山田拓伸主幹研究員が行った。

7．本書の執筆･編集は、発掘調査を担当した栗田勝弘が行った。

本 文 目 次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査団の構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……2
第３章　智来西遺跡……4
　第１節　調査の概要と調査区の設定……4
　第２節　基本層序……5
　第３節　調査の成果……7
　　１．縄文時代の遺物……7
　　２．竪穴状遺構……11
　　１号竪穴……11
第４章　宮苑井ノ口遺跡……16
　第１節 調査の概要と調査区の設定……16
　第２節 基本層序……17
　第３節 調査の成果……19
　　１．竪穴状遺構……19
　　１号竪穴……19
　　２号竪穴……21
　　３号竪穴……23
　　４号竪穴……25
　　５号竪穴……26
　　６号竪穴……27
　　７号竪穴……31
　　８号竪穴……34
　　２．土坑状遺構……36
　　１号土坑……36
　　２号土坑……36
　　３号土坑……37
　　４号土坑……37
　　５号土坑……38
　　６号土坑……38
　　７号土坑……39
　　３．溝状遺構……39
　　１号溝状遺構……39
　　２号溝状遺構……39
　　３号溝状遺構……42
　　４．小児用カメ棺墓群……43
　　１号カメ棺墓……43
　　２号カメ棺墓……46

本 文 目 次

3号カメ棺墓 ……48
4号カメ棺墓 ……49
5号カメ棺墓 ……51
6号カメ棺墓 ……53
7号カメ棺墓 ……55
8号カメ棺墓 ……56
9号カメ棺墓 ……58
10号カメ棺墓 ……60
11号カメ棺墓 ……62
12号カメ棺墓 ……63
13号カメ棺墓 ……65
5．赤色顔料分布の小空間……67
6．一括取り上げ遺物……68
第5章　宮苑井ノ口遺跡出土赤色顔料の分析 ……74
第6章　総括 ……78
宮苑井ノ口遺跡の小児用カメ棺墓群について ……78

図 版 目 次

第１図　賀来西遺跡(1)、宮苑井ノ口遺跡(2)と周辺の主要遺跡
分布図（国土地理院1/25,000の地図による）……3
第２図　賀来西遺跡と周辺地形図(1/3,000)……4
第３図　賀来西遺跡の上層柱状図(1/20)……5～6
第４図　賀来西遺跡調査区の遺構配置図（1/160）……5～6
第５図　賀来西遺跡出土縄文土器実測図（1/3）……8
第６図　賀来西遺跡出土縄文土器実測図（1/3）……9
第７図　賀来西遺跡出土縄文石器実測図（1/3）……10
第８図　賀来西遺跡出土縄文石器実測図（1/3）……11
第９図　賀来西遺跡1号竪穴実測図（1/80）……12
第10図　賀来西遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1/4）……13
第11図　賀来西遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1/4）……14
第12図　賀来西遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1/4）……15
第13図　宮苑井ノ口遺跡と周辺地形図(1/3,000)……16
第14図　宮苑井ノ口遺跡の土層柱状図（1/20）……17～18
第15図　宮苑井ノ口遺跡調査区の遺構配置図（1/120）……17～18
第16図　宮苑井ノ口遺跡１号竪穴実測図（1/60）……19
第17図　宮苑井ノ口遺跡１号竪穴出土遺物実測図（1/4）……20
第18図　宮苑井ノ口遺跡2号竪穴実測図（1/60）……22
第19図　宮苑井ノ口遺跡2号竪穴出土遺物実測図（1/4）……22
第20図　宮苑井ノ口遺跡3号竪穴実測図（1/60）……23
第21図　宮苑井ノ口遺跡3号竪穴出土遺物実測図（1/4）……24
第22図　宮苑井ノ口遺跡4号竪穴実測図（1/60）……25
第23図　宮苑井ノ口遺跡4号竪穴出土遺物実測図（1/4）……26
第24図　宮苑井ノ口遺跡5号竪穴実測図（1/60）……26
第25図　宮苑井ノ口遺跡5号竪穴出土遺物実測図（1/4）……26
第26図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴実測図（1/60）……27
第27図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴出土遺物実測図（1/4）……28
第28図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴出土遺物実測図（1/4）……29
第29図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴出土遺物実測図（1/4）……29
第30図　宮苑井ノ口遺跡7号竪穴実測図（1/60）……32
第31図　宮苑井ノ口遺跡7号、8号竪穴出土遺物実測図（1/4）……32
第32図　宮苑井ノ口遺跡7号竪穴出土遺物実測図（1/4）……33
第33図　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴実測図（1/60）……34
第34図　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴出土遺物実測図（1/4）……35
第35図　宮苑井ノ口遺跡１号土坑実測図（1/40）……36
第36図　宮苑井ノ口遺跡1号土坑出土遺物実測図（1/4）……36
第37図　宮苑井ノ口遺跡２号土坑実測図（1/40）……36
第38図　宮苑井ノ口遺跡３号土坑実測図（1/40）……37

図 版 目 次

第39図　宮苑井ノ口遺跡3号土坑出土遺物実測図（1/4）……37
第40図　宮苑井ノ口遺跡4号土坑実測図（1/40）……37
第41図　宮苑井ノ口遺跡4号土坑出土遺物実測図（1/4）……37
第42図　宮苑井ノ口遺跡5号土坑実測図（1/40）……38
第43図　宮苑井ノ口遺跡5号土坑出土遺物実測図（1/4）……38
第44図　宮苑井ノ口遺跡6号土坑実測図（1/40）……38
第45図　宮苑井ノ口遺跡7号土坑実測図（1/40）……39
第46図　宮苑井ノ口遺跡1号溝状遺構実測図（1/80）……40
第47図　宮苑井ノ口遺跡1号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）……41
第48図　宮苑井ノ口遺跡2号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）……42
第49図　宮苑井ノ口遺跡3号溝状遺構実測図（1/60）……42
第50図　宮苑井ノ口遺跡3号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）……42
第51図　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓配置図(1/80)……43
第52図　宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺墓実測図（1/10）……44
第53図　宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺遺物実測図（1/4）……45
第54図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺墓実測図（1/10）……46
第55図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺遺物実測図（1/4）……47
第56図　宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺遺物実測図（1/4）……48
第57図　宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺墓実測図（1/10）……48
第58図　宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺墓実測図（1/10）……49
第59図　宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺遺物実測図（1/4）……50
第60図　宮苑井ノ口遺跡5号カメ棺墓実測図（1/10）……51
第61図　宮苑井ノ口遺跡5号カメ棺遺物実測図（1/4）……52
第62図　宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺墓実測図（1/10）……53
第63図　宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺遺物実測図（1/4）……54
第64図　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺墓実測図（1/10）……55
第65図　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺遺物実測図（1/4）……56
第66図　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺墓実測図（1/10）……57
第67図　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺遺物実測図（1/4）……57
第68図　宮苑井ノ口遺跡9号カメ棺墓実測図（1/10）……58
第69図　宮苑井ノ口遺跡9号カメ棺遺物実測図（1/4）……59
第70図　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺墓実測図（1/10）……60
第71図　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺遺物実測図（1/4）……61
第72図　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺墓実測図（1/10）……62
第73図　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺遺物実測図（1/4）……62
第74図　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺墓実測図（1/10）……63
第75図　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺遺物実測図（1/4）……64
第76図　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺墓実測図（1/10）……65
第77図　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺遺物実測図（1/4）……66

図 版 目 次

第78図　赤色顔料分布の小空間出土遺物(1/4) ……67
第79図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4) ……69
第80図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4) ……70
第81図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4) ……71
第82図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4) ……72
第83図　宮苑井ノ口遺跡出土石器実測図（1/4) ……73
第84図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺内部赤色顔料 ……75
第85図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域① ……75
第86図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域② ……75
第87図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域②の土部分 ……75
第88図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺内部赤色顔料 ……76
第89図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域① ……76
第90図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域② ……77
第91図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域②の上部分 ……77
第92図　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓配置図(1/80) ……78
第93図　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓 ……79

写真図版目次

1 貿来西遺跡空中写真(白丸) ……85
2 貿来西遺跡1号竪穴検出状態(東から) ……85
3 貿来西遺跡1号竪穴遺物出土状態(西から) ……86
4 貿来西遺跡縄文土器 ……86
5 貿来西遺跡縄文土器 ……87
6 貿来西遺跡縄文土器・石器 ……88
7 貿来西遺跡1号竪穴出土遺物 ……89
8 宮苑井ノ口遺跡空中写真(南から) ……90
9 宮苑井ノ口遺跡発掘調査風景(東から) ……90
10 宮苑井ノ口遺跡1号竪穴(東から) ……91
11 宮苑井ノ口遺跡2号竪穴(西から) ……91
12 宮苑井ノ口遺跡3号竪穴(北から) ……92
13 宮苑井ノ口遺跡4号竪穴(東から) ……92
14 宮苑井ノ口遺跡5号竪穴(北から) ……93
15 宮苑井ノ口遺跡6号竪穴(北から) ……93
16 宮苑井ノ口遺跡6号竪穴(東から) ……94
17 宮苑井ノ口遺跡7号竪穴(北から) ……94
18 宮苑井ノ口遺跡8号竪穴(東から) ……95
19 宮苑井ノ口遺跡3号、4号、5号土坑(東から) ……95
20 宮苑井ノ口遺跡1号溝状遺構(西から) ……96
21 宮苑井ノ口遺跡3号溝状遺構(西から) ……96
22 宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群(東から) ……97
23 宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群(南から) ……97
24 宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群(西から) ……97
25 宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域とカメ棺墓群(東から) ……98
26 宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺墓(南から) ……98
27 宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺 ……99
28 宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺墓(西から) ……100
29 宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺 ……100
30 宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺墓(南から) ……101
31 宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺 ……101
32 宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺墓(東から) ……102
33 宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺 ……102
34 宮苑井ノ口遺跡5号、9号カメ棺墓(西から) ……103
35 宮苑井ノ口遺跡5号カメ棺 ……103
36 宮苑井ノ口遺跡9号カメ棺 ……104
37 宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺墓(西から) ……104
38 宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺 ……105
39 宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺墓(東から) ……105

写真図版目次

40　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺 ……106
41　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺墓(西から)……106
42　宮苑井ノ口遺跡2号、8号、4号カメ棺墓(南から) ……107
43　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺 ……107
44　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺墓(北から) ……108
45　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺……108
46　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺墓(西から) ……109
47　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺……109
48　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺墓(東から) ……110
49　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺墓(南から) ……110
50　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺……111
51　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺墓(南から) ……111
52　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺……112
53　宮苑井ノ口遺跡空中写真(北から) ……112
54　宮苑井ノ口遺跡1号、3号、4号竪穴出土遺物 ……113
55　宮苑井ノ口遺跡4号、6号竪穴出土遺物……114
56　宮苑井ノ口遺跡6号、7号、8号竪穴出土遺物 ……115
57　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴、3号・4号・5号土坑、1号溝出土遺物……116
58　宮苑井ノ口遺跡2号・3号溝、赤色顔料分布域等出土遺物……117
59　宮苑井ノ口遺跡出土遺物 ……118
60　宮苑井ノ口遺跡出土遺物 ……119

表目次

第1表　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓計測表……67

第１章　はじめに

第１節 調査に至る経過

大分市大字賀来と大字宮苑に所在する賀来西遺跡と宮苑井ノ口遺跡の発掘調査は、県道小挟間(おばさま)大分線道路改良工事に伴う、平成15年の試掘調査によって発見されたものであり、同年、二つの遺跡の発掘調査が実施された。

試掘調査の対象は、県道小挟間大分線の路線内で、既に用地買収や家屋の立ち退きの完了した、道路幅約14m、長さ約1,000mの14,000㎡の面積である。路線内の中央部に、重機による試掘トレンチを入れ、遺構や遺物の発見に努めた。遺構や遺物の発見は、賀来西遺跡と宮苑井ノ口遺跡の二箇所に限られ、その他の地点は皆無に近い状況であった。

賀来西遺跡の調査は、平成15年5月12日から平成15年6月11日の約1箇月間実施した。発掘調査の結果、縄文後期の竪穴住居跡を推測させる２～３箇所の遺物の纏まり、弥生中期の円形竪穴住居跡1基等が検出されている。

一方、宮苑井ノ口遺跡は、平成15年８月５日～平成15年10月３日の約２ヶ月間実施した。発掘調査の結果、弥生後期後葉～古墳前期前葉を主体とした竪穴８基や土坑７基、溝状遺構3基、小児用カメ棺墓13基等が検出されている。その内、小児用カメ棺墓群の配置には、何らかの規則的なまとまりがあることが見て取れた。それは、赤色顔料が残る小空間を中心に、カメ棺の主軸が放射状に、かつ半円形に配置されており、この小空間は葬送の儀式が行われた場所ではないかと推量された。これまでに、大分川流域一帯の遺跡から小児用カメ棺墓の発見は数例あるが、カメ棺墓群の展開と赤色顔料の残る小空間との有機的関係が把握された遺跡の報告は他になく、宮苑井ノ口遺跡の小児用カメ棺墓群は極めて注目される発見例と言っても過言ではない。

第２節　調査団の構成

賀来西遺跡、宮苑井ノ口遺跡の調査体制 (平成15年度)は次のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会
調 査 員　今永 一成（大分県教育庁文化課課長）
麻生裕二（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）
清水宗昭（大分県教育庁文化課参事兼課長補佐）
栗田勝弘（大分県教育庁文化課主幹）　賀来西・宮苑井ノ口遺跡の調査担当
高橋信武（大分県教育庁文化課主幹）　賀来西遺跡の調査担当
山本哲也（大分県教育庁文化課嘱託）　賀来西・宮苑井ノ口遺跡の調査担当
戸田英佑（大分県教育庁文化課嘱託）　賀来西・宮苑井ノ口遺跡の調査担当

現地の発掘調査には、大分市、挟間町等在住の人々を、１日に約15人程度の割合で、発掘調査作業員として雇用した。

なお、宮苑井ノ口遺跡調査中、賀来中学校生徒約50人と地元住民の見学会をはじめ、9月23日(秋分の日)に行った現地説明会には県内外各地から300人以上の見学者があった。

第2章　遺跡の立地と環境

県道小浜岡(おばさま)大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、大分市大字賀来の賀来西遺跡(1)と大分市大字宮苑字井ノ口の宮苑井ノ口遺跡(2)で実施した。[第1図参照]

賀来西遺跡と宮苑井ノ口遺跡は、賀来川左岸の沖積地、標高約16～17mの水田面に位置している。賀来西遺跡は、縄文後期、弥生時代中期を主体とし、宮苑井ノ口遺跡は、弥生時代中期～古墳時代後期にかけての土器を少量含む複合遺跡であるが、その主体は、弥生後期後葉～古墳前期前葉を中心とする小児用カメ棺墓群を伴う集落遺跡である。ここでは、賀来西遺跡、宮苑井ノ口遺跡とその周辺遺跡群を時代ごとに俯瞰してみる。

大分川流域の丘陵上にある旧石器時代の遺跡は、野田山遺跡(27)、庄ノ原遺跡(18)、机張原遺跡(7)等で古くから表面採集や付随的に出土した資料から留意されていたが、庄ノ原遺跡では、発掘調査で豊富な資料を層位的に検出しており、大野川流域やその支流に点在するホルンフェルスを原材としたナイフ形石器文化の遺跡であることが判明している。

縄文時代の早期を代表するのは、野田山遺跡の条痕文土器・無文上器と下黒野遺跡(26)の押型文土器・無文上器である。どちらの遺跡も、蒸し焼き調理用と推察される集石炉を複数含む遺跡である。縄文前期～中期は希薄であるが、縄文後期初頭の賀来西遺跡では、凹線文土器や磨消縄文土器を主体としている。縄文後期中頃～晩期では、玉沢地区条里跡遺跡で磨消縄文土器や沈線文土器、黒色磨研土器等が検出され、下黒野遺跡、庄ノ原遺跡、植田市遺跡で縄文晩期の刻目突帯文土器が出土している。特に、下黒野遺跡の刻目突帯文土器と丹塗り研磨された壺形土器の共伴は、縄文晩期一括資料であり、初期稲作文化を検討するうえで看過できない。

弥生時代は、独立丘陵上に位置する雄城台遺跡(44)、環濠集落と推察される賀来中学校遺跡(33)と尼ヶ城遺跡(25)等で象徴される。いずれも大分川中流域の有数な遺跡であり、切り合い関係を保つ数多くの竪穴住居跡と伴に土器類が多数発見されている。尼ヶ城遺跡から中国後漢時代の方格規矩文鏡が出土し、雄城台遺跡からは、中国後漢時代の方格規矩文鏡や内行花文鏡の破片が検出されており、巴形銅器は県指定有形文化財に指定されている。

宮苑井ノ口遺跡で検出した稀有な遺構としては、小児用カメ棺墓13基がある。これらは、成人用の墓地の中に埋葬しているのではなく、竪穴住居跡のすぐ側に、乳幼児の集団墓として営まれた様相を呈する。小児用カメ棺墓の群集は、乳幼児を特別に意識し丁重に葬ったことを物語っているようでもある。カメ棺墓群は、玉沢地区条里跡遺跡の弥生中期例や賀来中学校遺跡の後期後葉の事例が報告されている。弥生後期後葉～古墳前期前葉の宮苑井ノ口例は、周辺地域の弥生時代の生活、葬送を考えるうえで貴重な追加資料となる。

古墳時代の遺跡として、賀来西遺跡や宮苑井ノ口遺跡の北西方向には、国指定史跡であり、線刻画が描かれた装飾古墳の千代丸古墳(4)、岩御堂横穴墓群(6)が位置し、北方の丘陵上には餅田古墳群(10)、餅田横穴墓群(11)があり、北東部の井出ノ上古墳(13)、井出ノ上横穴墓群(12、14)、上片面横穴墓群(15)、県指定史跡の五殿古墳(16)、逢来山古墳(19)、田崎古墳群(21)、深河内古墳(23)と続いている。この様に、丘陵の縁辺部には古式な高塚古墳や新しい時代の横穴墓などの墳墓群が集中しており、その周辺の平野部に、古墳時代の集落跡やその可耕地の展開を想像するに十分である。賀来西遺跡と宮苑井ノ口遺跡でも六世紀代の須恵器片が出土しているが、残念ながら纏まった遺構の発見には至っていない。しかし、古墳時代の集落は上述した古墳群地帯ではなく、台地の下の河岸段丘上が遺地されたと見なすことができる。宮苑井ノ口遺跡とその周辺は有望な集落跡が遺存する地域であると推察できる。

古代の遺跡としては、賀来川の対岸に展開する賀来条里跡(32)があり、大分市大字国分には古代を象徴する国指定史跡の豊後国分寺跡(40)が位置している。梵鐘の鋳造遺構の発掘をはじめ、「天長九年(832年)尼寺」の墨書土師器の発見は、国分寺西方に国分尼寺が想定できるとともに、土師器編年の指標ともなっている。

中世の遺跡としては、賀来条里跡をはじめ、賀来氏の本貫地である賀来荘の中心部を、賀来中学校遺跡とその周辺部に推察できそうである。現在の天満社境内を、賀来氏館跡とする伝承が伝わっている。また、宮苑遺跡(3)では、昭和59年度に13世紀の館跡が発掘されており、中世居館の先駆的な調査例として注目できる。

以上のように、賀来西遺跡、宮苑井ノ口遺跡の周辺部に展開する主要な遺跡を時代別に一瞥して見た。

1	賀来西遺跡	縄文・弥生	23	岸河内古墳	古墳
2	賀来井ノ口遺跡	弥生・古墳	24	岡原遺跡	弥生他
3	宮苑遺跡	中世	25	辻ヶ城遺跡	弥生他
4	千代丸古墳	古墳	26	下郡野遺跡	旧石器他
5	中村遺跡	弥生	27	野田山遺跡	旧石器他
6	石野塚横穴墓群	古墳	28	小原横穴墓	古墳
7	鶴崎原遺跡	旧石器・縄文	29	中城遺跡	古墳
8	金谷迫古墳	古墳	30	市場古墳2号墳	古墳
9	金谷迫山城跡	中世	31	中城古墳	古墳
10	熊田古墳群	古墳	32	青柳免遺跡	古代・中世
11	野田横穴墓群	古墳	33	賀来中学校遺跡	弥生・中世
12	井手ノ上横穴墓群1	古墳	34	上ノ西遺跡	縄文
13	井手ノ上古墳	古墳	35	小野鶴横穴墓群	古墳
14	井手ノ上横穴墓群2	古墳	36	野田遺跡	旧石器他
15	上井原横穴墓群	古墳	37	馬分台遺跡	縄文
16	花咲古墳	古墳	38	六郎原遺跡	縄文・古墳
17	城ノ原石棺遺跡	縄文	39	国分遺跡	古代
18	庄ノ原遺跡	旧石器他	40	豊後国分寺跡	古代
19	蓮華山古墳	古墳	41	大黄2横穴墓群	古墳
20	田崎遺跡	弥生・古墳	42	大切横穴墓群	古墳
21	田崎古墳群	古墳	43	勝ヶ丘横穴墓群	古墳
22	万寿山古墳群	古墳	44	鶴崎台遺跡	弥生

第1図　賀来西遺跡(1)、宮苑井ノ口遺跡(2)と周辺の主要遺跡分布図（国土地理院1/25,000の地図による）

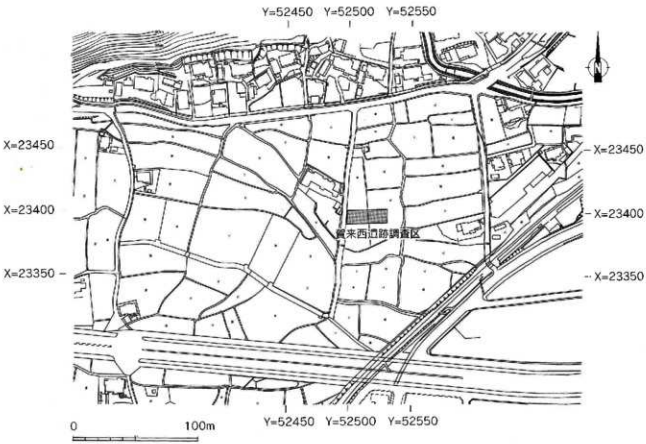
第3章　賀来西遺跡

第1節　調査の概要と調査区の設定

賀来西遺跡は、大分川支流の賀来川左岸の微丘陵上に位置している。遺跡の標高は約16.5mを呈し、遺跡の範囲は、東西約32m、南北約12mの道路敷幅である。調査面積は約384㎡である。発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて、表土を約30～40cm前後重機で剥ぎ遺構を検出する作業から行った。

発掘調査区は日本測地系座標を基にして、東西のX軸を23400、南北のY軸を52500として、これの交点を発掘調査区内に設定している。

調査の結果、遺構、遺物としては、縄文時代後期の土器が面的に出土し、弥生時代中期の焼失した竪穴住居跡を1基検出したのみであった。縄文時代の土器の分布を見ると、間隔を開けて2～3箇所に分布域があり、当時の竪穴住居跡の残映と推量できそうである。一方、弥生時代中期の竪穴は、遺構の平面プランが不明で、これに伴う柱穴も断定できるものはなかった。しかし、焼失家屋の炭化物の配置を見ると、中央の土坑に向かって垂木等が放射状に検出できることから、円形状の竪穴住居が推測できそうである。出土遺物は、竪穴の時期を象徴する弥生中期の土器、石器等が若干検出されている。



第2図　賀来西遺跡と周辺地形図(1/3,000)

第2節　基本層序（第3図）

賀来西遺跡の現状は水田面であり、層の堆積は比較的単純である。基本的な層序を柱状図で示すと次のようになる。

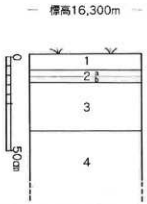
1層　表土層。灰褐色の現水田面層である。

2層a 淡灰褐色土層。鉄分、マンガンの混じる旧水田面層である。

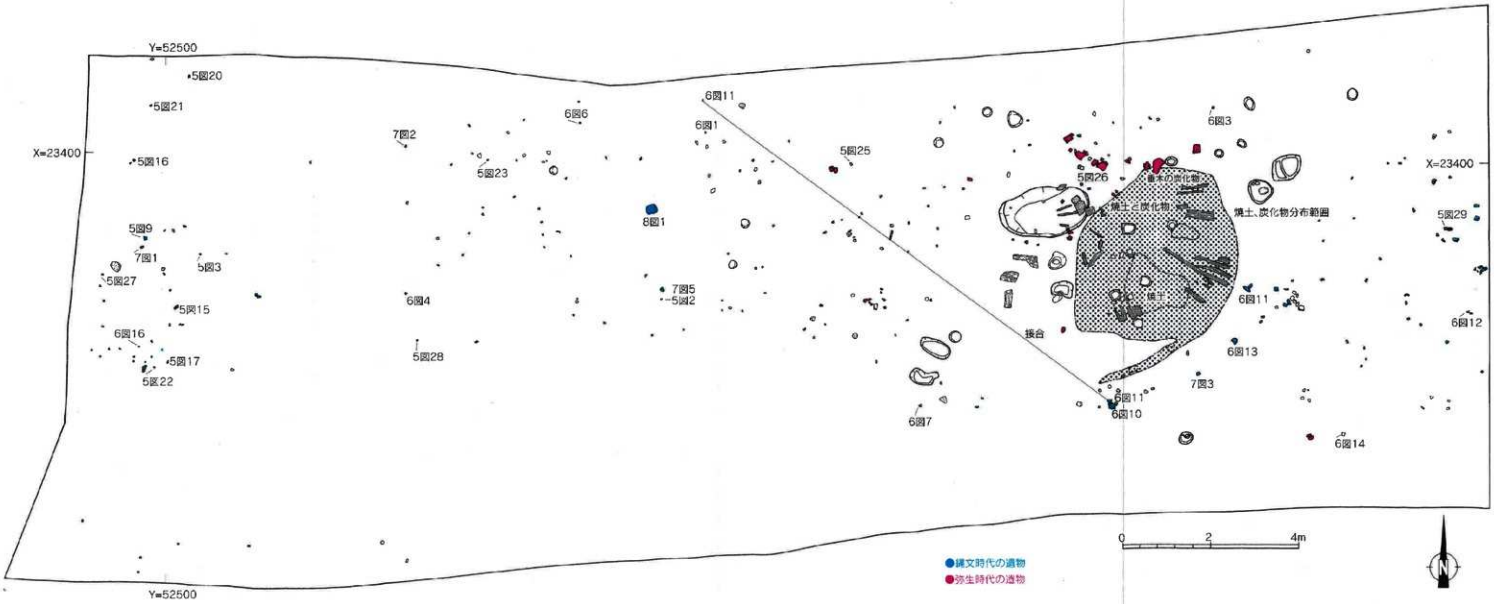
2層b 黄褐色土層。2層aの床土である。

3層　灰褐色粘質土層。鉄分、マンガンの混じる粘質のある旧水田面層である。弥生中期の竪穴住居跡はこの3層から4層に掘り込まれている。

4層　明褐色粘質土層。細かい砂質で鉄分、マンガンを含むが、柔らかい粘質土層である。この層の上面は縄文後期土器の包含層である。また、弥生中期の竪穴住居跡は3層からこの4層に掘り込まれている。



第3図　賀来西遺跡の土層柱状図(1/20)



第4図　賀来西遺跡調査区の遺構配置図（1/160）

第3節　調査の成果

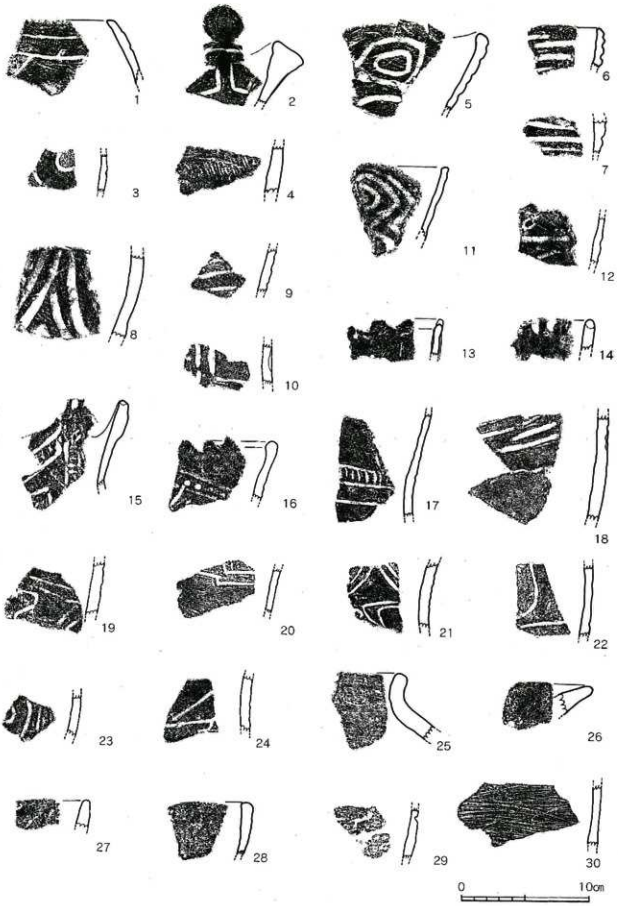
1．縄文時代の遺物(第5、6、7、8図)

第5図1～3は縄文後期初頭の中津式土器に相当する。いわゆる古相の磨消縄文土器である。二本沈線内に縄文を充填し、他は磨り消す施文方法をとる。1は口縁部内湾し、胴部が膨張する鉢形土器であり、縄文はヘナタリを転がしたような無節縄文を使用している。2は波状口縁部の波頭部が膨張されたものである。3は沈線内に縄文の痕跡を残している。4は細かな縄文上器。5～7は曲線を基調とした沈線文上器である。5は波状口縁部である。5、6、7は一見、沈線間に縄文の痕跡が認識できそうでもあるが、胎土の関係で縄文の痕跡と明言できない。5、6の器形は、心持ち内湾する口縁部で、そのまま底部に至る鉢形上器である。8は波状口縁部の波頭部に近い破片であろう。二本沈線が波頭を象徴している。9は薄い赤色顔料が塗布されている。10は押し引き文の様相である。11、12は曲線を基調とした凹線文上器である。後期初頭の西和田式上器と呼ばれる特徴的な一群である。器壁は薄く、表面文様の凹凸が裏面まで認められる。13、14は口唇部を凹凸に、あるいは大きな刻み目を入れて小波状に仕上げた小波状口縁部である。15は波頭部が肥厚した波状口縁部である。波頭からは二本沈線が縦、斜めに延び、沈線間にはアナダラ属の貝殻口唇で刻みを入れている。16は小波状口縁で、二本沈線内には円形の刺突文が施されている。区画線内列点文と呼ばれたコーゴー松式上器である。17は三本沈線で、二本沈線内にアナダラ属の貝殻口唇で刻みを入れている。これらは、福田K2式を寫わせる磨消縄文の擬似文様と把握できそうである。18～24は二本沈線を基調とした沈線文であり、綾B式上器や岩崎七層式上器の文様要素を彷彿とさせる。25～28は上述土器に伴出する土器の口縁部である。30は貝殻条痕文土器の胴部片である。

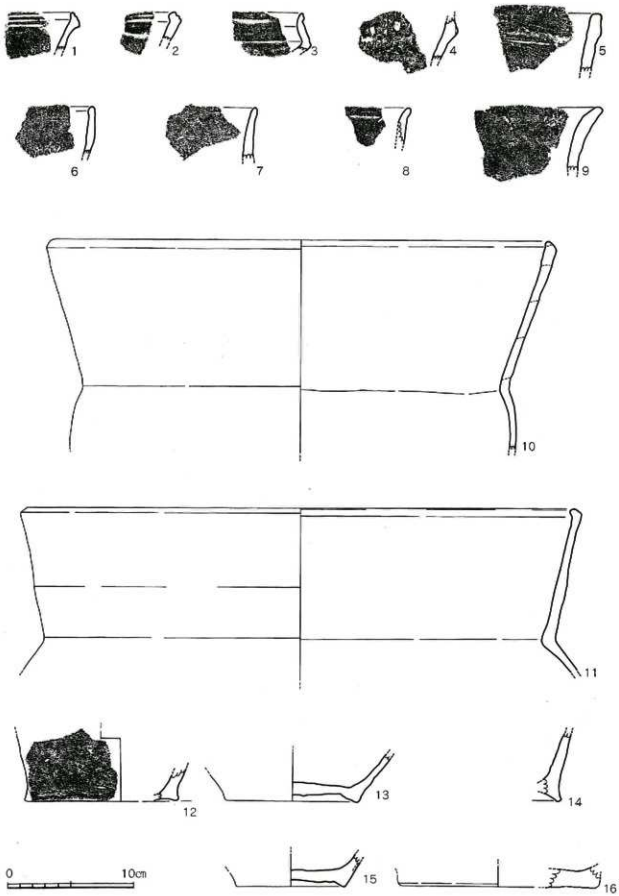
第6図1、2は縄文後期後半の深鉢形土器の口縁部である。1の大きく外に開く口縁部の端は断面三角に肥厚し、三本沈線が巡っている。2も同様な口縁部で、二本沈線が巡る。3は浅鉢形土器の口縁部である。口唇下を丸く仕上げ、浅い希薄な沈線を一条巡らせる。4は肥厚させた口縁部近くに凹点を刻む。5は肥厚させた口縁部下に希薄な細線を巡らせている。6、7は直行し、8、9は外反する口縁部である。8の口縁下には細い沈線が巡っている。10、11は深鉢形上器の口縁部である。外に開く口縁部の端は断面三角に肥厚し、内側に折れて段を形成している。10は口径39cm、頸部径34cm、胴部最大幅は上半にあり最大径は35.5cmである。胴部の張らない深鉢形上器である。表裏は粗い撫で調整で、部分的にヘラ磨きが施されている。11は口径43cm、頸部径40.7cmであり、胴部が大きく膨張された深鉢形土器である。表裏は撫で調整が施されている。12～15は上げ底の底部である。表裏は撫で調整が施されている。13は底径12cm、14は底径10.3cm、15は底径8.4cmである。16は底径15.8cmの平底である。表裏は撫で調整が施されている。

第7図1は断面楕円形をした石斧の基部付近の破片である。表裏は自然面で両側辺は研磨されている。幅4.8cm、厚さ3cmである。2は小判形の河原礫の安山岩製石鏃である。長軸両端を表裏から敲打して窪みを形成している。長さ7.1cm、幅5.4cm、厚さ2.3cmで重さは131.1gである。3～5は安山岩製の磨石と敲石の両用石器である。3は半分以上欠損した河原礫の石器であるが、表裏は磨石し、先端部に敲打痕跡を顕著に残している。幅8.8cm、厚さ6.1cmである。4はやや扁平な円礫を利用し、片面を磨石、側面を敲石として使用している。長さ8cm、幅7.2cm、厚さ3.6cmで重さは174.4gである。5は拳大の楕円形を呈し、表裏面と両側面を磨石、長軸の両端を敲石として使用している。長さ11.6cm、幅7.8cm、厚さ6cmで重さは852.7gである。

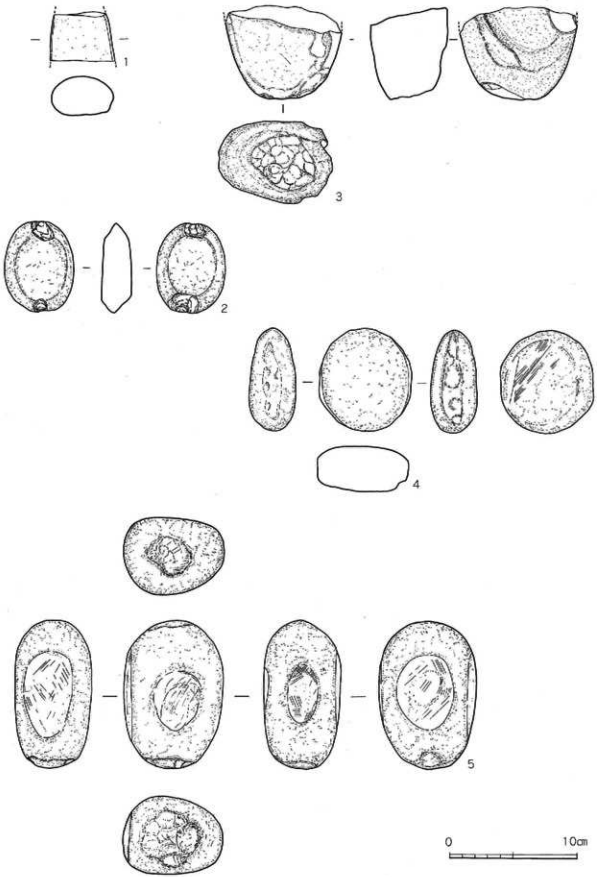
第8図1は人頭大の河原礫を利用した石皿である。表裏の中央部は心持ち窪んだ状態である。使用による研磨が顕著に認められる。長さ26.7cm、幅20cm、厚さ7.9cmで重さは6.5kgである。



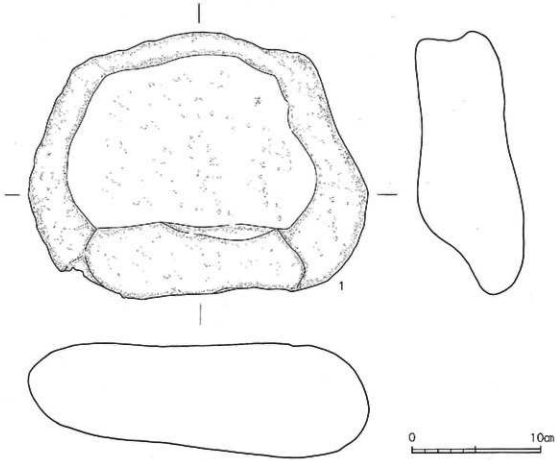
第5図　貫来西遺跡出土縄文土器実測図（1/3）



第6図　貫来西遺跡出土縄文土器実測図（1/3）



第7図 賀来西遺跡出土縄文石器実測図（1/3）



第8図　賀来西遺跡出土縄文石器実測図（1/3）

2．竪穴状遺構

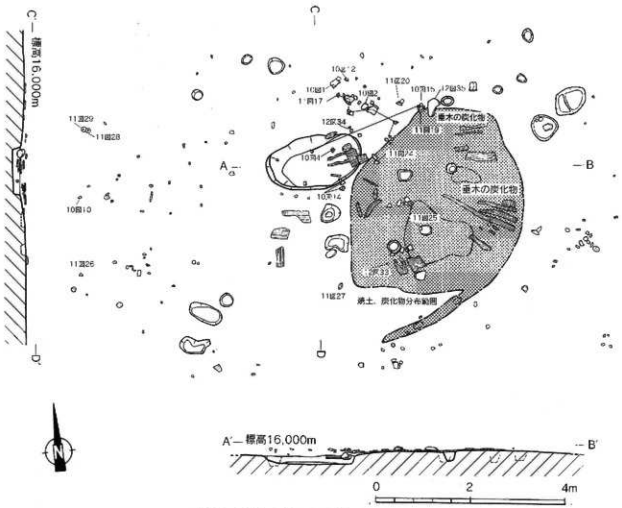
1号竪穴(第9図)

賀来西遺跡では、調査区の東寄りに弥生中期の竪穴住居跡が一基発見されている。竪穴住居跡は現地表面を約30～40cmほど掘下げた、現水田面の床土の下に堆積する砂混じりの土層中であり、検出するのが至難であった。竪穴住居跡は焼失家屋であったが、その平面プランは確認できなかった。しかし、竪穴内に分布する焼土の範囲や、乗木とみられる炭化物の方向やその分布範囲、土器片の分布範囲、炉跡と推察できる土坑の位置等から推量すると、竪穴住居跡はかなり大きく、直径約9～10mの楕円形か歪な円形の竪穴住居跡と推察できそうである。主柱穴の数も判らないが、竪穴のプランに対応する幾つかの柱穴が、竪穴住居跡に伴うものであろう。炉跡と推察できる中央部の土坑は、東西約2m、南北約1mで深さは15cm前後である。土坑中に、炭化した板材などが確認できる。

出土遺物(第10、11、12図)

1号竪穴の平面プランは明確には把握できなかったが、竪穴内と推量できる範囲内から出土した遺物を竪穴出土として図示した。

第10図1は大きく外反する壺の口縁部である。肥厚した口唇部の器壁はやや窪み、跳ね上げ状に内側に張る。頸部から丸く膨張された胴部に至るものであろう。口径30.4cmで表裏は撫で調整を施す。2は球形に膨張された壺の胴部である。胴部最大径は28.2cmで表裏は工具による撫で調整を施す。内面には指圧痕が残っている。3～7は下城式土器の甕形土器である。3、4は口縁下に一条の刻み目突帯、5は口縁下に二条の刻み目突帯、



第9図　質来西遺跡1号竪穴実測図（1/80）

6、7は突帯のみである。8の口縁部は外へ屈折し、頸部に断面三角突帯が巡る。

9～15の口縁部は外へ屈折し、肥厚した口唇部は跳ね上げ状に内側に張る。緩く締まる頸部から張りのない胴部に至る。12は口径28cm。13は口径23.6cmで胴部最大径は23.2cmである。14は口径30cmで胴部の張りは全くない。15は口径36.3cmで頸部に断面三角突帯が巡っている。胴部の張りは全くない。16は脚であろうか。

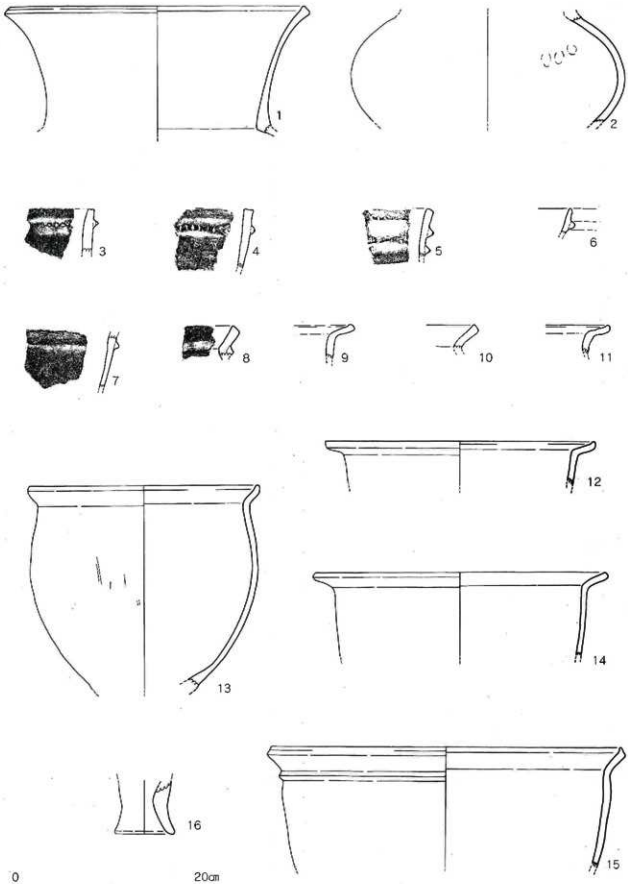
第11図17、18の口縁部は外へ屈折し、口唇部の跳ね上げは消える傾向にある。頸部から張りの全くない胴部に至る。表面は刷毛目痕、内面は撫で調整痕。17は口径28cm、胴部最大径は23.8cmである。18は口径30cmで、胴部最大径は27cmである。

19～21は高坏である。19は朝顔状口縁部を呈する。脚部が欠損している。口径約20cm。20、21は脚部である。20の表面は刷毛目痕、内面は撫で調整痕。

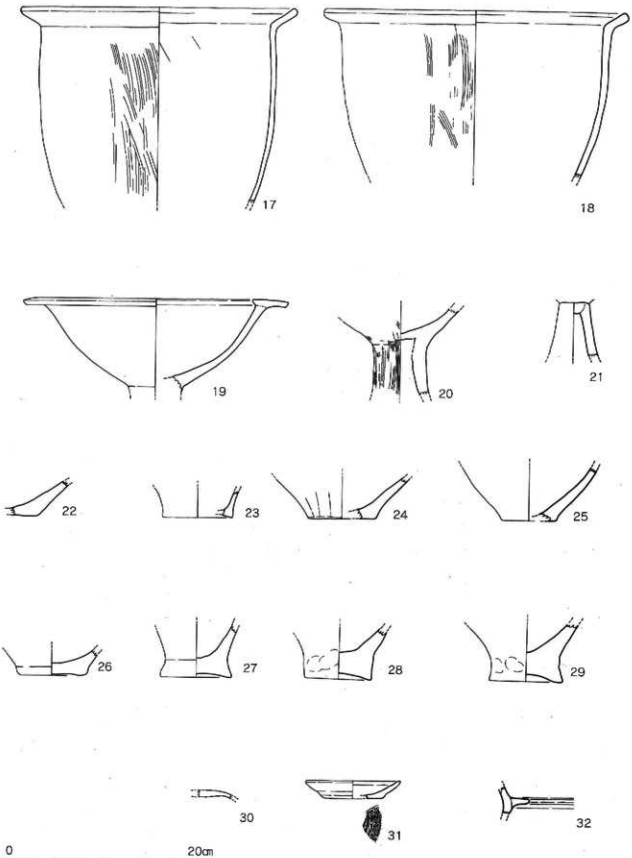
22～29は土器の底部である。22～25は平底、26～29は僅かな上げ底である。

30、31、32は後世の攪乱による遺物の混入である。30は須恵器の蓋の天井部、31は中世の土師器、32は瓦質土器の茶釜の一部であろう。

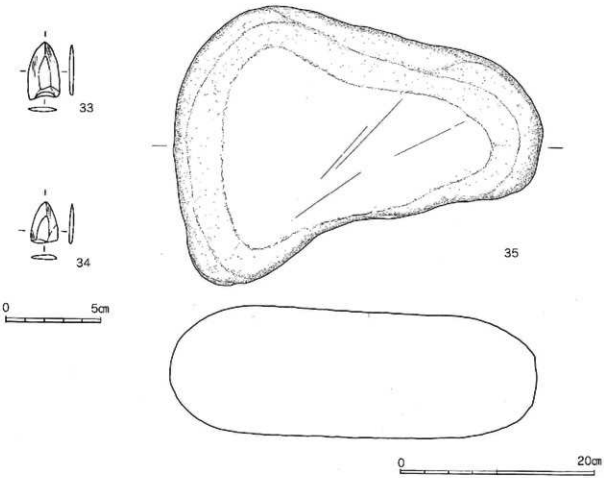
第12図33、34は粘板岩製の磨製石鏃である。33は凹基式で長さ3cm、幅1.6cm、重さ1.9g。34は平基式で長さ2.2cm、幅1.4cm、重さ0.9g。35は1号竪穴住居跡のほぼ中央部で発見されている。人頭大の河原石の安山岩製石皿である。表裏が使用され、心持ち窪んでいる。長さ38.3cm、幅28.6cm、厚さ13.1cm、重さ19.3kg。



第10図　箕来西遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1/4）



第11図　賀来西遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1/4）



第12図　貫来西遺跡1号竪穴出土遺物実測図（1/2・1/4）

第4章　宮苑井ノ口遺跡

第1節　調査の概要と調査区の設定

宮苑井ノ口遺跡は、大分川支流の賀来川左岸の微丘陵上に位置している。遺跡の標高は約17.5mを呈し、遺跡の範囲は、東西約46m、南北約12mの道路敷幅である。調査面積は約552㎡である。発掘調査は、試掘調査の結果に基づいて、表土を約30～40cm前後重機で剥ぎ遺構を検出する作業から行った。

発掘調査区は日本測地系座標を基にして、東西のX軸を23450、南北のY軸を51850として、これの交点を発掘調査区内に設定している。

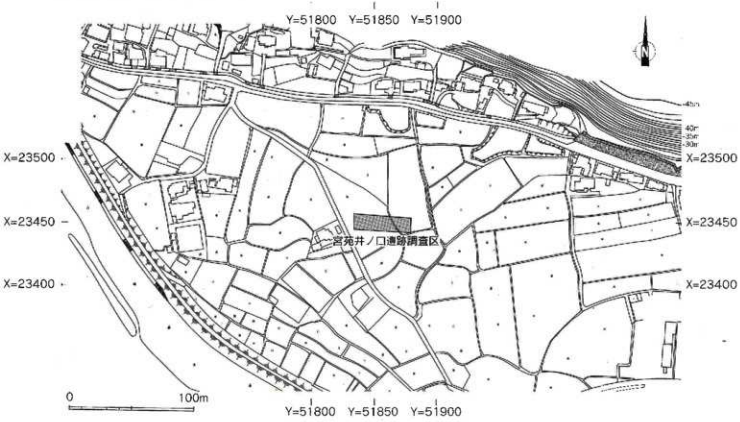
調査の結果、縄文時代後期の土器や古墳時代の須恵器等が若干量出土したが、その主体は、弥生後期後葉～古墳前期前葉の竪穴や土坑、小児用カメ棺墓、溝状遺構等であり、これ等に伴う土器、石器等が多数検出されている。

竪穴遺構は1～8号竪穴まで確認した。中でも、竪穴住居跡と想定できるものは、1～5号竪穴で、6～8号竪穴は、住居跡以外の用途を考える必要があろう。東西に長い発掘調査区の南壁に殆ど全ての竪穴がかかっている状態から推測すると、集落の展開する中心部は、ここより南の方にあり、今回の発掘調査区は、集落の北側の端近くに相当すると推察できそうである。

土坑は、1～7号まで確認している。機能や用途の判らないものである。

一方、竪穴遺構のすぐ側で検出された13基の小児用カメ棺墓は、小児の集団墓と推測される一群である。カメ棺墓群の中心部には、赤色顔料の遺存する小空間があり、集落内での、葬送儀礼にまつわる場の機能を考える上で留意される。また、調査区南の壁に沿って、約32mにもなる、弥生後期後半～終末期前後の溝状遺構が検出されており、ある時期の竪穴住居を包括した環濠集落の可能性を示唆している。

なお、宮苑井ノ口遺跡の小児用甕棺墓は、壺、甕、鉢を組み合わせて使用しており、土器棺墓と呼ぶのが相応しいが、弥生時代の成人用甕棺墓と視覚的に酷似することから「カメ棺墓」とした。この呼び方は、縄文時代のカメ棺墓を意識したものではない。



第13図　宮苑井ノ口遺跡と周辺地形図(1/3,000)

第2節　基本層序（第14図）

宮苑井ノ口 遺跡の現状は水田面であり、層の堆積は比較的単純である。基本的な層序を柱状図で示すと次のようになる。

1層　表土層。灰褐色の現水田面層である。4～5 cmの堆積。

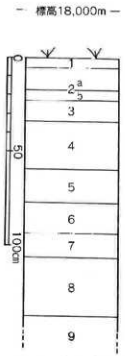
2層a 淡灰褐色土層。鉄分、マンガンの混じる旧水田面層である。10～12cmの堆積。

2層b 黄褐色土層。2層aの床土である。5～6 cmの堆積。

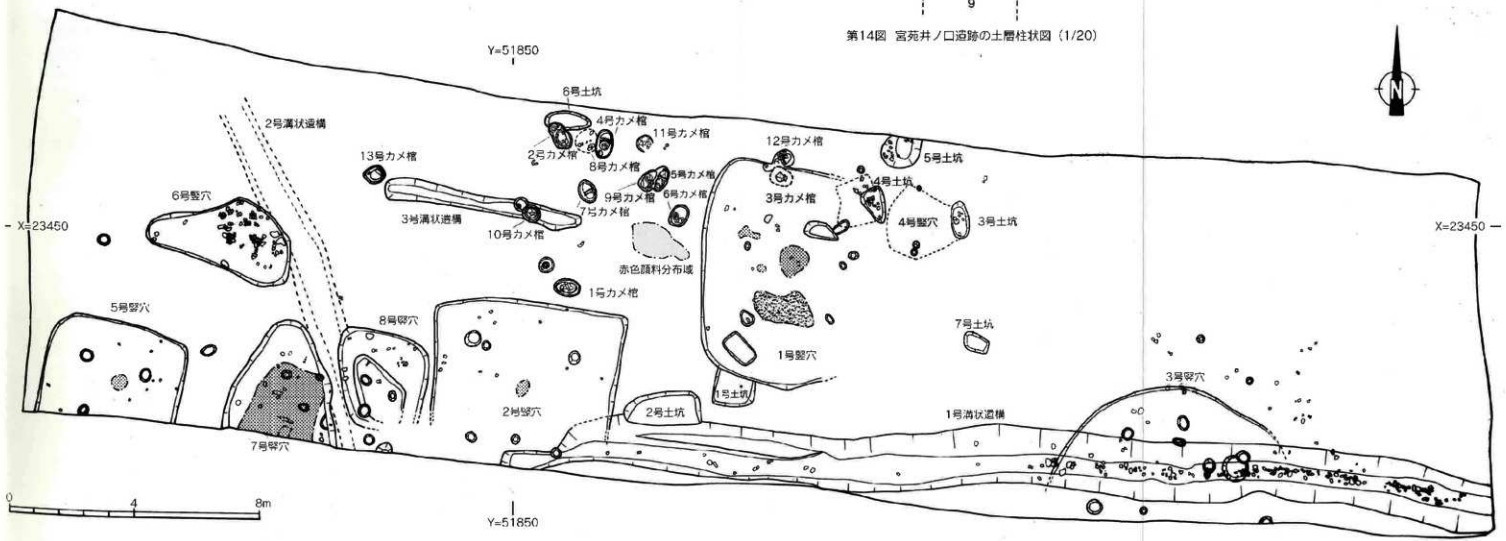
3層　灰褐色粘質土層。鉄分、マンガンの混じる旧水田面層で、弥生、古墳時代の遺物包含層である。遺構はこの3層から4～5層に掘り込まれている。10～12cmの堆積。

4層　暗茶褐色砂質土層。細かい砂質で鉄分、マンガンを含む。弥生、古墳時代の遺構の検出される土層である。弥生、古墳時代の遺構は4～5層中に掘り込まれている。24～25cmの堆積。

5層　淡茶褐色砂質土層でいわゆる地山となる。18～20cmの堆積。6層は橫褐色粘質土層で16cm前後の堆積。7層は茶褐色粘質土層で漸移層。12cm前後の堆積。8層は茶褐色粘質土層。30cm前後の堆積。9層は灰白色砂質土層である。5層以下は砂粒の混じった土層である。



第14図　宮苑井ノ口遺跡の土層柱状図（1/20）



第15図　宮苑井ノ口遺跡調査区の遺構配置図（1/120）

第3節　調査の成果

1. 竪穴状遺構

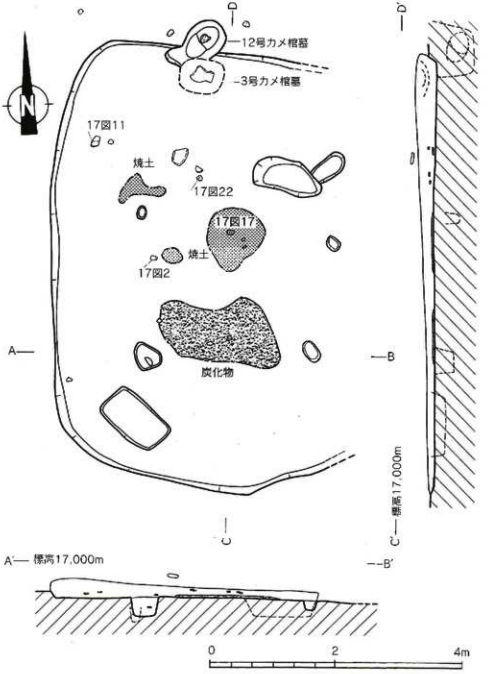
宮苑井ノ口遺跡では、弥生後期後半～古墳時代前期前葉の5基の竪穴住居跡が発見されている。竪穴住居跡は現地表面を40～50cmほど掘下げた、現水田面の床土の下に堆積する砂混じりの土層中で検出が至難であった。竪穴住居跡の平面形は方形、隅丸方形、円形などバリエーションに富んでいる。主柱穴の数は、竪穴のプランに応じて異なるが、竪穴住居跡の中心には赤く焼けた地床炉や黒い炭化物炉が遺存している。

また調査区西側の三つの竪穴は、不定形状を呈し用途も判然としない。この竪穴からは、壺・甕・小鉢等の完形に近い土器類や小さな釣錘状の特異な土器などが出土し、その出土状況から意図的に廃棄されたものと考えられる。時期はカメ棺墓群の時期とほぼ同時期とみなすことができる。

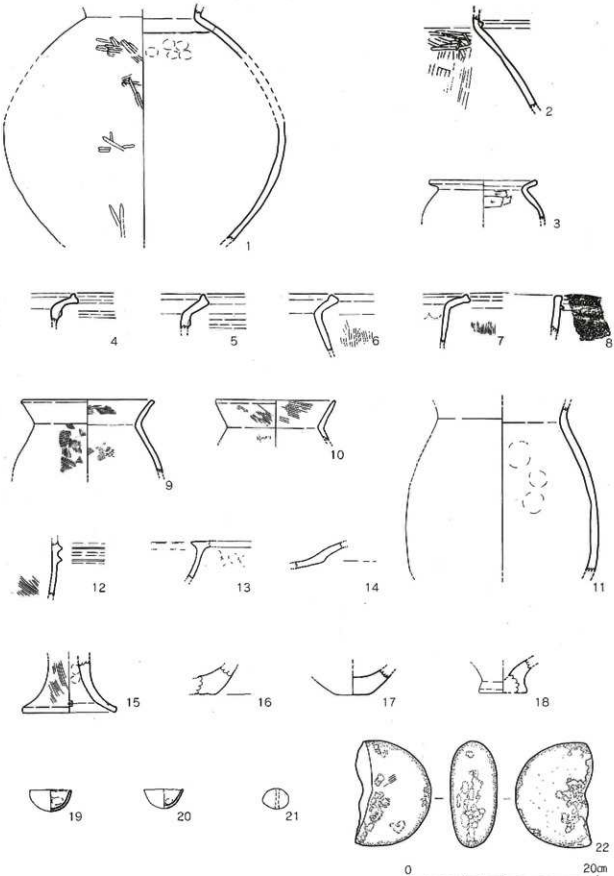
1号竪穴(第16図)

調査区の中央部に位置する隅丸長方形か小判形を呈する竪穴住居跡である。長軸を北・南にとる。砂質土の中に掘り込まれた竪穴で、平面プランの東側半分は立ち上がりが判断出来なかった。長径は約7m、短径は復元して約5.5m前後であろう。確認面から床面までは約10cmである。竪穴中心部には、赤く硬く焼けた径約1mの地床炉があり、その南側には約1.8m×1mの黒色の炭化物炉が位置している。竪穴に伴う柱穴は、炭化物炉の両端にあるように見えるが、判然としない。竪穴の南西には、機能、用途不明の長径1.05m、短径0.6m、深さ約0.2mの長方形の土坑が位置している。

竪穴出土の遺物は小片で時期の決め手に欠ける。一見、中期の土器片が多いが、竪穴中



第16図　宮苑井ノ口遺跡1号竪穴実測図（1/60）



第17図　宮苑井ノ口遺跡１号竪穴出土遺物実測図（1/4）

央部の焼土の直上近くで出土した17図17の底部をメルクマールとし、17図9～11、14、16、19、20等から総合的に判断し、弥生後期後半以降の所産と推察しておく。

1号竪穴は、南壁では1号土坑を切り、北壁では12号カメ棺と3号カメ棺に切られる関係にある。

出土遺物(第17図)

第17図1は反転復元した壺形土器である。口縁部と底部を大きく欠損している。胴部は張り、中央部の最大径で29.6cmを測る。器表面は撫で調整の後ヘラ磨き、内面は撫で調整と指押さえ痕跡を残す。2は頸部に断面三角形の突帯を施す甕形上器である。器表面は撫で調整、内面は撫で調整の後ヘラ磨き痕跡を残す。3は頸部で強く屈曲する口縁部を持つ小壺である。口径11cm。表裏面は撫で調整、内面は撫で調整の後、削り痕跡を残す。

4～7は口縁部が強く屈折する、跳ね上げ状口縁の甕形土器である。4、5の頸部には断面三角形の突帯を施す。8は下城式土器である。口唇部と口縁下の突帯には刻みが施されている。9、10は断面「く」の字に屈折する口縁部の甕形土器で、表裏は刷毛目調整痕跡を残している。9は口径13.5cm、10は口径12.6cmと小型である。11も甕形上器である。胴部の張りは弱く、胴部最大径は20.3cmを測る。表裏面は撫で調整、内面は撫で調整の後、指押さえ痕跡を残す。12は三角突帯を二条施す胴部の破片である。

13～14は高坏である。13は鍋先状口縁の表裏は撫で調整。14の口縁部は緩く外反し、頸部に段を持つものである。表裏は撫で調整。15は径9.6cmに開く脚部である。表面は刷毛目調整痕跡を残し、内面は撫で調整の後、指押さえ痕跡を残す。16、17は角の取れた丸みをもつ平底。17は径3.4cmのレンズ状の底部である。18は径4.8cmの平底底部である。19、20は手捏ねのミニチュア土器である。19は口径4.4cm、器高2.3cm。20は口径4.2cm、器高2cm。21はフットボール状の小さな粘土玉である。短軸に穿孔がある。長さ2.7cm、幅2.1cm、重さ14.4g。22は敲石である。表裏は窪み、側面は敲打痕跡が顕著である。

2号竪穴(第18図)

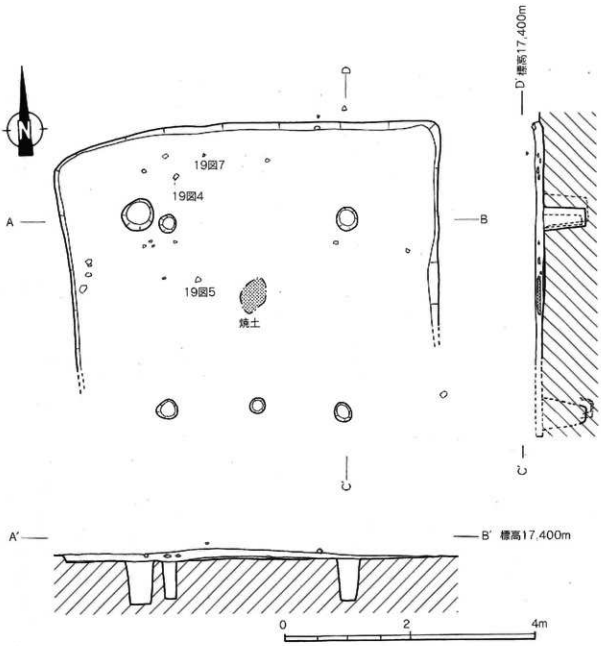
1号竪穴の南東部に隣接する方形を呈する竪穴住居跡である。長軸を北・南にとる。砂質土の中に掘り込まれた竪穴で、平面プランの南側半分は大きく欠損し、プランの検出は出来なかった。復元推測では長径は約6m、短径は約5.9mである。確認面から床面までは約10cmである。竪穴中心部には赤く焼けた径約40×60cmの地床炉がある。竪穴に伴う柱穴は、北側で2本、南側で3本が確認できる。柱穴の深さは、床面から70～80cmの深さがある。

竪穴出土の遺物は小片で時期の決め手に欠ける。古い土器片も混在しているが、19図2、7等から総合的に判断し、弥生後期以降の所産と推量しておく。

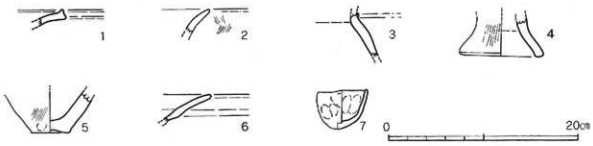
2号竪穴は、南壁では1号溝状遺構と切り合い関係にあるが新旧は判らない。

出土遺物(第19図)

第19図1は口縁部が強く屈折する、跳ね上げ状口縁の甕形土器である。2は外反口縁部の破片で表面は刷毛目調整痕跡を残し、内面は撫で調整の痕跡を残す。3は頸部に断面三角形の突帯を施す。表面は撫で調整。4は径8.8cmで「ハ」の字に広がる脚部である。表面は刷毛目調整痕跡を残し、内面は撫で調整の痕跡を残す。5は底径4cmのやや上げ底状の平底部である。表面は刷毛目調整痕跡を残し、内面は撫で調整と指押さえの痕跡を残す。6の口縁部は緩く外反し、頸部に段を持つ高坏である。表裏は撫で調整。7は手捏ねの小型の土器である。表裏に指圧痕を残している。口径5.6cm、器高4.1cm。



第18図　宮苑井ノ口遺跡2号竪穴実測図（1/60）



第19図　宮苑井ノ口遺跡2号竪穴出土遺物実測図（1/4）

3号竪穴(第20図)

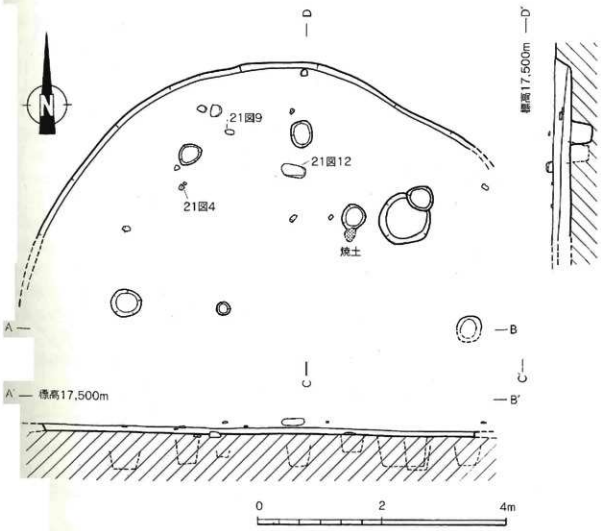
調査区の南東隅部に位置する円形の竪穴住居跡である。竪穴の南半分は調査区外に遺存している。また、竪穴南側は西・東に走る1号溝状遺構が切り合っているが、1号溝状遺構が埋まった段階で竪穴を形成していることは顕著に確認できた。竪穴規模を推定復元すると、直径は約8.4mとなる。確認面から床面までの深さは約25cmである。竪穴中心部よりやや北東には赤く焼けた径約20cmの焼土がある。竪穴に伴う主柱穴は、北側で2本、東側で2本、西側で1本が円形に巡っている。柱穴の深さは、床面から30～50cmの深さがある。竪穴の主柱穴は全部で約9本前後と推察できる。

竪穴出土の遺物は小片で時期の決め手に欠ける。古い土器片も混在しているが、21図9等から総合的に判断し、弥生後期後半～終末前後の所産と推量しておく。

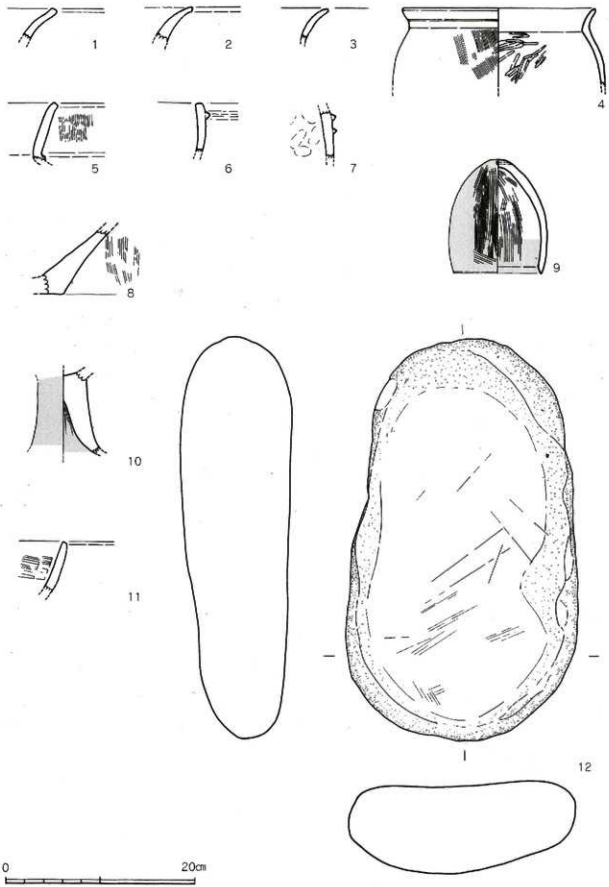
出土遺物(第21図)

第21図1～3は外反する甕の口縁部である。4は緩く外反する甕の口縁部で、頸部との間に一条の沈線が巡る。表面は刷毛目調整、内面はヘラ磨き痕跡を残す。5は断面「く」の字に屈折する口縁部で、先端は心持ち外に開き、頸部には断面三角形の突帯を施す。6はやや内湾する口縁部の下には断面三角形の突帯を施す。

7は二条の断面三角形の突帯を施す胴部の破片である。表面は撫で調整で裏面は指押さえの痕跡。8は壺の平底部である。



第20図　宮苑井ノ口遺跡3号竪穴実測図（1/60）



第21図　宮苑井ノ口遺跡3号竪穴出土遺物実測図（1/4）

9は頂上部に焼成前の細い穿孔があることから、釣鐘状の土器と推測した。口縁部はやや内湾し、口唇部は細く尖る。口径9.2cmを測る。胴部は10.2cmで頂上部は尖り気味である。表裏面は刷毛目調整。外面全面と内面の上半部には赤色顔料が施されている。器高は11.9cmを測る。

10は高坏の柱状脚部である。表裏は撫で調整で、内奥は絞り痕跡。外面と内面の中央部まで赤色顔料が施されている。11は内湾する口縁部。内面は刷毛目調整で、外面は撫で調整。

12は河原石の安山岩製の石皿である。表面は心持ち窪み、擦痕が残っている。長さ41.9cm、幅23.2cm、厚さ10.8cmで18kgである。

4号竪穴(第22図)

1号竪穴の北東部に位置する竪穴であるが、砂質土の中に掘り込まれた竪穴で、平面プランもその規模も判らない。ただ、竪穴の床面は、1号竪穴の覆土の上にある貼り床である。また、部分的に硬くしまった所もあり、竪穴の遺存した後を推察できる。4号竪穴の柱穴が5～6本検出されているが、床面からの深さは約30～40cmである。

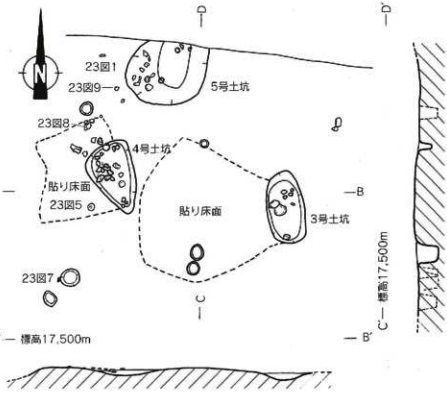
古い土器片も混在しているが、第23図7、8等から判断し、古墳時代前期初頭期の所産である。

出土遺物(第23図)

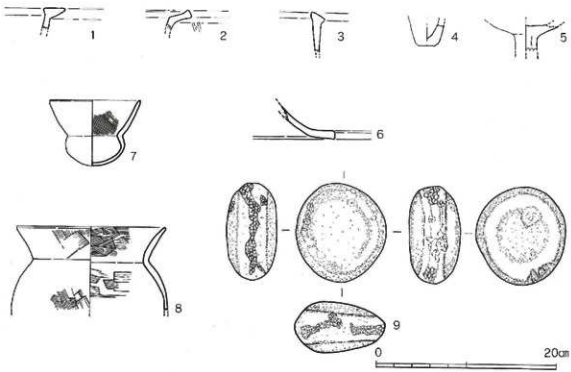
第23図1は鎚先状口縁部である。高坏であろう。2は甕の跳ね上げ口縁部。3は口唇が内外に張り出す口縁部である。4は底径1.6cmのミニチュア土器である。5は高坏の脚部、6は高坏の坏部から脚部に至る部分である。表裏は撫で調整。

7は小型丸底壺である。口径は約10cm、頸部の括れ部で6cm、胴部6.5cm、器高は7.3cmを測る。表裏とも撫で調整で、口縁部の内側には一部斜めの刷毛目痕が残っている。8の口縁部は断面「く」の字に外反し、胴部は球形に張る甕である。口径は16.6cm、胴部最大径は17.4cmを測る。口縁部の表裏は刷毛目調整痕跡を残している。器壁は比較的薄い。4号土坑の第41図の2の体部と同一個体である。

9は径10.6cmで厚さ5.6cmの丸い河原礫である。表裏面の平坦部は磨石に、側面部は敲石として使用された石器である。重さ約625g。



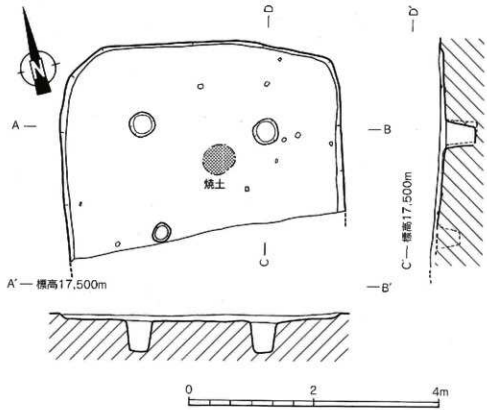
第22図 宮苑井ノ口遺跡4号竪穴実測図（1/60）

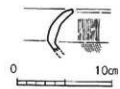


第23図　宮苑井ノ口遺跡4号竪穴出土遺物実測図（1/4）

5号竪穴(第24図)

調査区の西端で検出した隅丸方形の竪穴住居跡である。竪穴の南半分は調査区外になる。竪穴は南・北で復元推定4.5m、東・西で4.5mのほぼ正方形を呈する。確認面から床面までは約10cmである。竪穴中心部には赤く





第25図
宮苑井ノ口遺跡5号竪穴
出土遺物実測図（1/4）

第24図　宮苑井ノ口遺跡5号竪穴実測図（1/60）

焼けた径約40×50cmの地床炉がある。竪穴に伴う柱穴は、北側で２本、南側で１本が確認でき、４本主柱と推察できる。柱穴の深さは、床面から50cm前後の深さがある。

出土遺物(第25図)

５号竪穴出土の土器片は細片のみで図示できる資料は僅か１点である。第25図１は甕の口縁部である。表面は縦の刷毛目痕、内面は撫で調整している。

６号竪穴(第26図)

調査区の西方中央部で歪な隅丸の不定形をした竪穴遺構が検出されている。長軸を西・東にとり、長径約4.6m、短径約2.5m、確認面から床面までは約20cmを測る。床面は平坦であるが、焼土や柱穴が顕著でなく竪穴住居跡とは考え難い。出土遺物は、他の竪穴出土資料と比較しても圧倒的に豊富であり、完形品に近いものも数多く含まれることから、何らかの祭祀に伴う土器の廃棄土坑と推察できる。

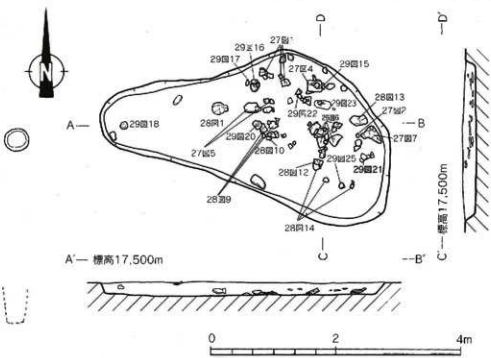
土器の出土状態をみると、周辺部から中心部へと傾斜しており、竪穴の周りから投げ捨てられたものと考えられる。出土遺物から古墳時代前期前葉に比定できる。

出土遺物(第27、28、29図)

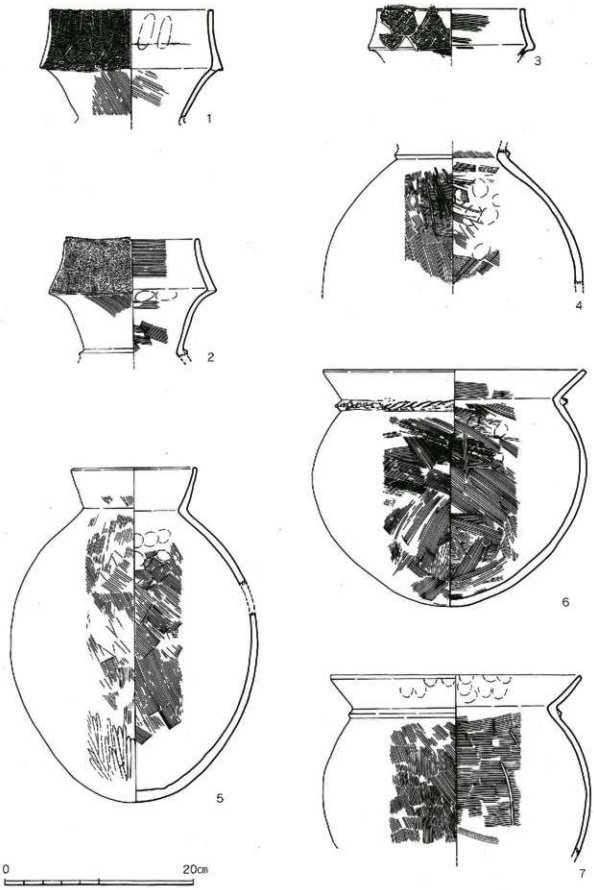
第27図１～３は断面逆「く」の字に立ち上がる二重口縁壺の口縁部である。いずれも、繊細な櫛描波状文を二～三条施す。１は口径14.1cmで、頸部に断面三角形の突帯を施す。２は口径17.1cm。３は口径14.6cmである。表裏は刷毛目調整を施す。４は頸部～胴部上半部である。頸部に断面三角形の突帯を施し、胴部は球形に膨張される。表裏は刷毛目調整され、表面に一部縦のヘラ磨き痕、内面に指圧痕を残す。胴部最大径は27.6cm。

５は口縁部やや内湾し、胴部が丸く張る壺形土器である。口径13.3cm、胴部中央で最大径26cmを測る。表裏は刷毛目調整で、表面の底部付近では縦のヘラ磨き、内面の一部に指押さえ痕跡を残す。底部は丸底で器高35.2cmを測る。

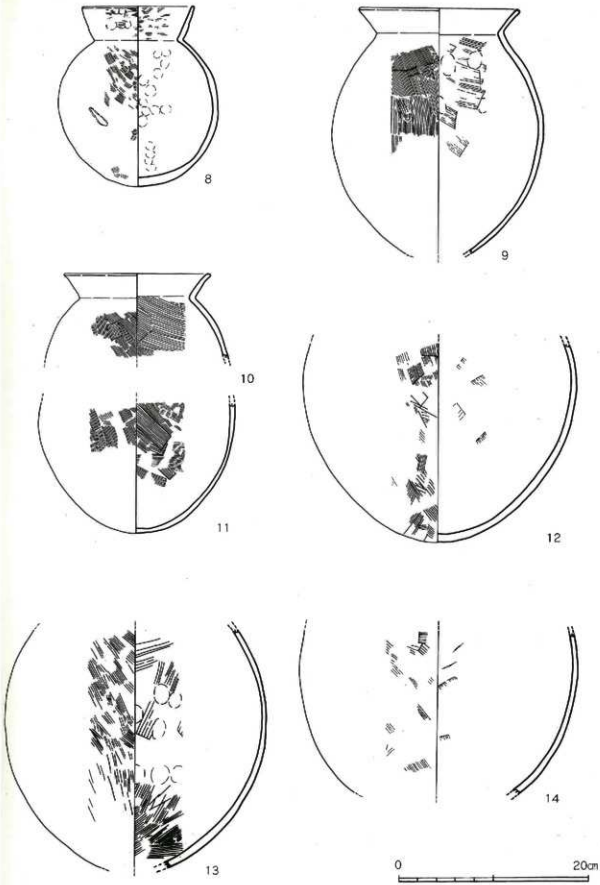
６、７の鉢の口縁部は断面「く」の字に屈折し、立ち上がりは心持ち内湾気味である。頸部には断面三角形の突帯を施し、胴部は球形に膨張され、そのまま丸底に至る。表裏は刷毛目調整され、表裏面に一部指圧痕を残す。６の頸部突帯は部分的に三角突帯、斜め刻み目、斜め格子刻み目と別れて施文されており興味深い。口径



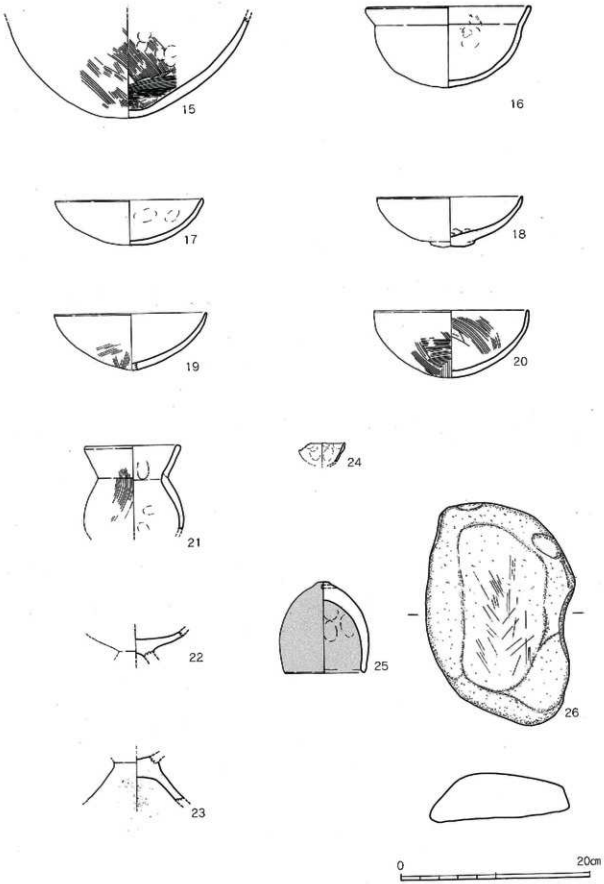
第26図 宮苑井ノ口遺跡6号竪穴実測図（1/60）



第27図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴出土遺物実測図（1/4）



第28図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴出土遺物実測図（1/4）



第29図　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴出土遺物実測図（1/4）

27.5cm、胴部最大径は28.8cm、器高は24.7cm。7は口径26.5cm、胴部最大径は28.5cmである。8号竪穴出土土器と接合した。

第28、29図の8～15は断面「く」の字に屈折する口縁部に、丸く誇張された胴部と丸底が付く甕形土器である。表裏は刷毛目調整され、内面に指圧痕を残すものも多い。8は球形体部で、口径は11.8cm、胴部最大径は16.7cm。器高19cmで胴部に打ち欠き穿孔痕がある。9は口径17cm、胴部最大径は22.4cm。10は口径15.5cmで、11の胴部最大径は20.7cmである。器壁は胴部も底部も変らない。同一個体の可能性が高い。12の胴部最大径は28.9cmである。器壁は胴部も底部も変らない。13の胴部最大径は27.2cmで、14の胴部最大径は29.4である。15は丸底で、器壁は胴部も底部も変らない。外面に煤が付着している。

16は内湾気味の口縁部を持つ丸底の鉢である。表面は横撫でに粗い削り痕を施し、内面には指押さえの圧痕を残している。口径17.4cmで器高8.8cmを測る。

17～20は口縁部からそのまま弧を描いて丸底になる鉢である。17は表裏とも撫で調整。内面には指押さえの圧痕を残している。口径15.5cmで器高4.8cmを測る。18の底部は粘土が厚く、平底状を形成し、内面に丁寧な撫でを残している。口径15.4cmで器高5.2cmを測る。19は表裏とも刷毛目調整、口径16.2cmで器高7.1cmを測る。20の表面は刷毛目調整、内面に丁寧な撫でを残している。口径16cmで器高5.9cmを測る。

21は小型の甕である。口縁部は断面「く」の字で、胴部は余り張らない。表面は刷毛目調整、内面に撫で調整痕と指押さえ痕を残している。口径9.4cm、胴部最大径は10.5cmで胴下半にある。

22、23は高坏の坏部と脚部である。表裏ともヘラ削り痕を残す。脚は大きく開く。

24は手捏ねのミニチュア土器である。口径4.8cm、器高2＋αcm。

25は頂上部に焼成前の細い穿孔があることから、釣鐘状の土器と推測した。口縁部はやや内湾し、乳房状に尖り気味な頂上部へかけて器壁は厚くなる。表裏面は撫で調整。表裏の全面には赤色顔料が施されている。口径は8.4cm、胴部は9.4cm、器高は9.8cmを測る。

26は河原石の安山岩製の石皿である。窪みはないが表面に擦痕が残っている。長さ22.5cm、幅14.4cm、3.8cm、重さ2.5kg。

7号竪穴(第30図)

2号竪穴住居跡と5号竪穴住居跡に挟まれて、7号竪穴と8号竪穴が重複している。一見、二つの竪穴は北壁を同じくする一つの竪穴と推測できそうにもあるが、竪穴内の様相が異なり、6号竪穴の例も考慮し、二つの別の遺構として把握した。

7号竪穴の南半分は調査区外に遺存している。平面プランは不明であるが、長軸を北・南にとり、西・東に比較して北側で細く窄まる三角形状を呈する。現況での北・南の径は3.7mで西・東の径は3.6mである。確認面から床面までは、約25～45cmを測る。床面は焼土と炭化物に覆われていた。

出土遺物(第31、32図)

第31図1～4は7号竪穴と8号竪穴を弁別する以前の覆土から出土した遺物である。1は内湾する鉢の口縁部である。口径13.4cmを測る。表裏は撫で調整。2は甕の頸部である。表裏は撫で調整され、頸部に指押さえの圧痕が残る。3、4は底部付近の破片である。やや平底の残る丸底であろう。

第32図1は鋤先状口縁の甕である。平坦部分はやや斜めに下がり気味である。表面はヘラ削り、内面は撫で調整。2は跳ね上げ状口縁部。表裏は横撫で調整。

3、4は二重口縁部の破片である。3の表裏は横撫で指押さえ痕。口径11cm。4は表面刷毛目、内面は撫で調整。口径14cm。

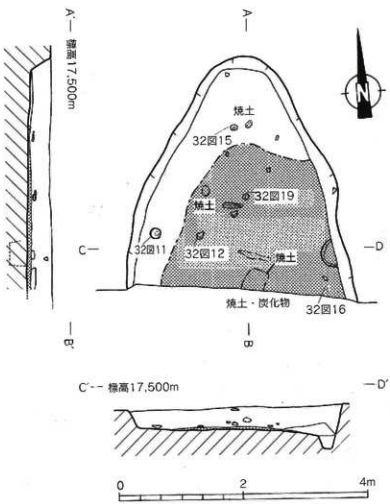
5の口縁部は表裏に赤色顔料が塗られ、口径13.4cm。6、7は外反する甕の口縁部。8、9はやや内湾気味な鉢の口縁部であろう。10は小型の鉢である。表面は刷毛目調整、内面に撫でを残している。口径9.4cmで器高は4.4＋αcm。

11～13は高台付きの鉢である。11の口縁部は心持ち外反し、弧を描いてそのまま低い高台付き底部へ至る。底部付近へかけて器壁は厚くなる。口縁部は細かく打ち欠きがあり、11縁部は殆ど元の形を留めてはいない。表裏面は撫で調整。表裏の全面には赤色顔料が施されている。口径は18.9cm、底部径は6.5cm、器高は11.9cmを測る。12、13は底部付近であるが、高台は外に踏ん張るように張り出している。表面は撫で、内面はヘラ削り。12は底部外面に煤が付着する。底径は11cm。13は底径6cm。

14～16は高坏の脚部である。14は表面と内面の一部に赤色顔料を施す。15は坏部と脚部の境に断面三角の突帯を施す。16は「ハ」の字に広がる脚部である。表裏面は撫で調整で、内面は指押さえ痕跡が残っている。

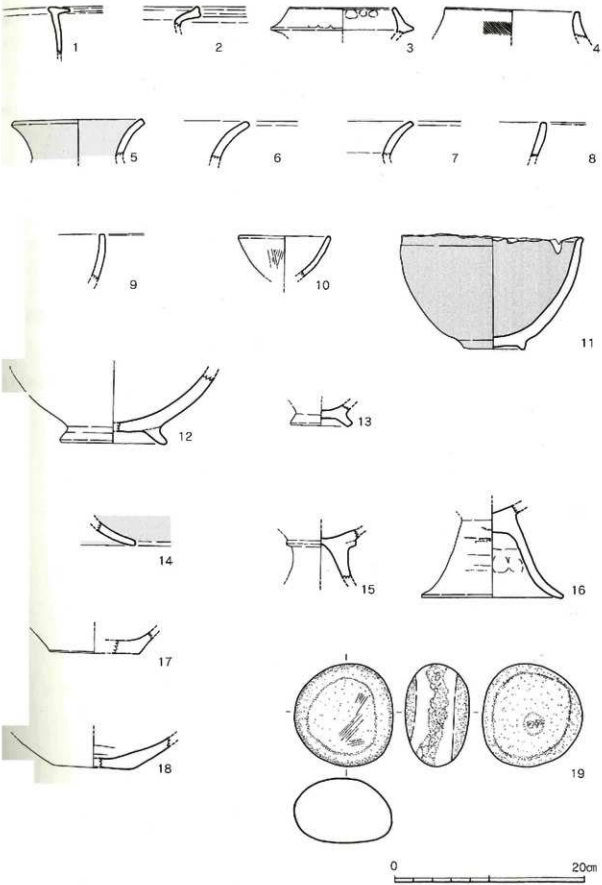
17は底径9.4cm、18は底径8cmの平底部の破片である。表裏面は撫で調整。

19は拳大の河原石を使った敲石である。長さ10.6cm、幅10.3cm、厚さ6.7cmで重さは1158g。



第30図　宮苑井ノ口遺跡7号竪穴実測図（1/60）

第31図　宮苑井ノ口遺跡7号、8号竪穴出土遺物実測図（1/4）



第32図　宮苑井ノ口遺跡7号竪穴出土遺物実測図（1/4）

8号竪穴(第33図)

7号竪穴の東に隣接する隅丸の不定形な竪穴である。南側は破損している。北・南の径は3.1m、西・東の径は2.9mを呈する。確認面から床面までは、約20～30cmを測る。竪穴の中心部には段がありやや低い部分がある。深い所で約50cmである。7号竪穴と同じで用途、機能は判らない。

出土遺物(第34図)

第34図1、2は断面「く」の字に折れた口縁部を跳ね上げた特徴的な甕である。口縁下に断面三角形の突帯を施す。表裏撫で調整。

3は二重口縁部の破片である。

4、5は胴部に断面三角形の突帯を二条施す。表面は刷毛目、裏撫で調整。

6は肩部の破片である。断面三角形の低い突帯を二条施す。表裏撫で調整。表面に赤色顔料を塗布している。

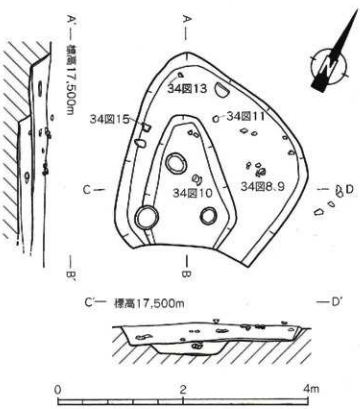
7は鉢く立ち上がる甕の口縁部。表裏撫で調整。8は断面「く」の字に折れた口縁部の器壁は薄く、表面は刷毛目、裏撫で調整。表裏に指押さえの痕跡。口径は18.2cm。9は断面「く」の字に折れた口縁部で、胴部は球形に張る。器壁は薄く、表面は刷毛目、裏は削り痕跡を残す。口径は13.2cm、胴部中央部の最大径は22.5cm。

10は脚台付き鉢である。心持ち外反する口部は尖り気味で、外面に円形浮文三個が施文されている。大きくいっぱいに開く脚部には穿孔が四箇所ある。表裏に刷毛目調整。脚部内側は磨きを施す。表裏とも赤色顔料を塗る。口径11.5cm、器高は11.5＋αcm。

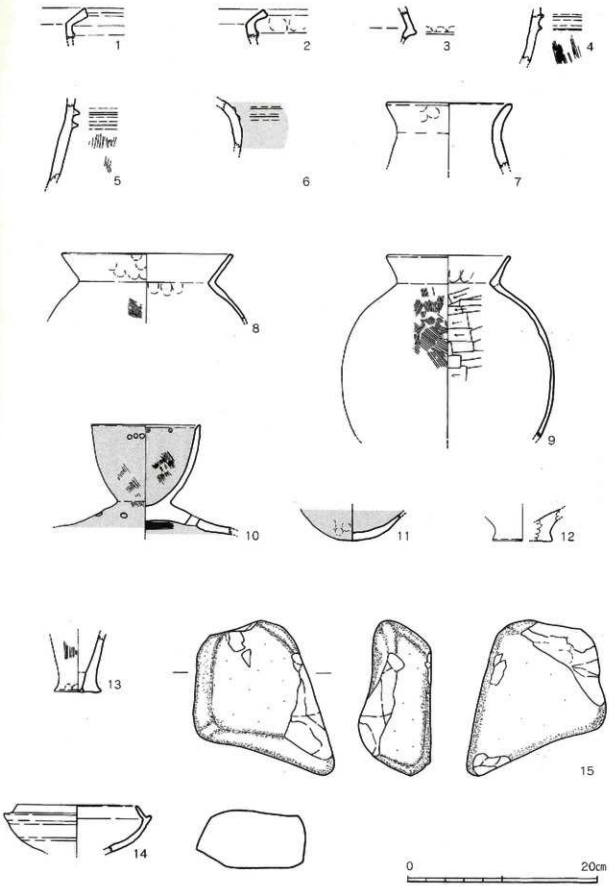
11は丸底部である。表裏とも赤色顔料を塗布している。12は底径6.2cm、13は底径5cmである。

14は須恵器の身である。表面は回転ヘラ削りの後、回転撫で調整。口縁部の立ち上がりは緩い。口径11.5cm。出土状態から推察し、後世の攪乱によって混入したものと考えられる。

15は砥石である。長さ13.9cm、幅11.5cm、厚さ6cmで重さは2000g。



第33図　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴実測図（1/60）

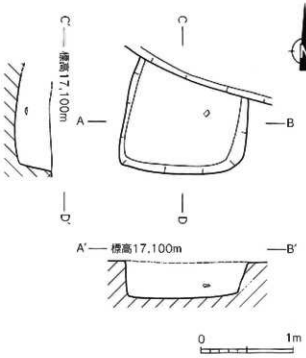


第34図　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴出土遺物実測図（1/4）

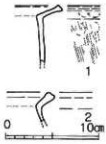
2．土坑状遺構

1号土坑(第35図)

調査区の中央部、1号竪穴の南に位置している方形の土坑である。土坑の北側は1号竪穴に切られている。土坑の規模は、西・東の径が1.3mで北・南は1.2mが確認できている。確認面から床面までは約40cmを測る。弥生時代の中期に比定できる。



第35図　宮苑井ノ口遺跡1号土坑実測図（1/40）



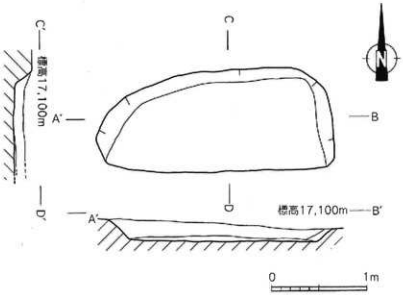
第36図
宮苑井ノ口遺跡1号土坑出土遺物実測図（1/4）

出土遺物(第36図)

第36図1、2の口縁部は断面「く」の字に屈折する。口唇部は厚く、いわゆる跳ね上げ口縁である。

2号土坑(第37図)

1号土坑の西側に位置する歪な隅丸長方形の土坑である。南側を1号溝状遺構で切られている。西・東の径は2.5m、北・南の径は原況で1.1mである。確認面から床面までは約10～20cmを測る。出土遺物は無かった。



第37図　宮苑井ノ口遺跡2号土坑実測図（1/40）

3号土坑(第38図)

調査区の北東部、4号竪穴の貼り床部の端に位置している長楕円形の土坑である。土坑の規模は北・南の径で約1.2m、西・東の径で約60cmである。確認面から床面までは約10cm前後を測る。

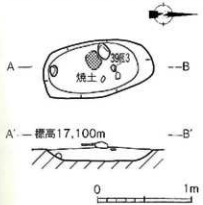
土坑の中心には径15cmの焼土が遺存していた。

出土遺物(第39図)

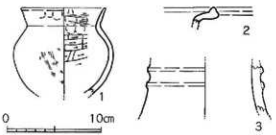
第39図1はやや小型の甕である。復元口径は8.8cm、胴部最大径は10.4cmで底部を欠損している。表面は刷毛目調整で内部は指押さえや削り痕跡を残している。

2は口唇部が厚く、いわゆる跳ね上げ口縁である。

3はいわゆる「M」字状の突帯を二条施す。



第38図 宮苑井ノ口遺跡3号土坑実測図（1/40）



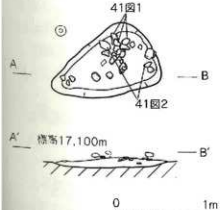
第39図 宮苑井ノ口遺跡3号土坑出土遺物実測図（1/4）

4号土坑(第40図)

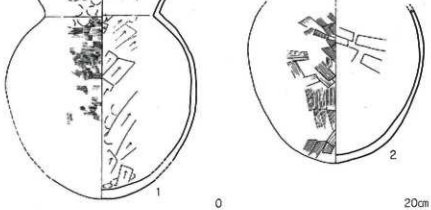
4号竪穴の東部、4号竪穴の貼り床部に挟まれた三角形状の土坑である。土坑の規模は北・南の径で約1.2m、西・東の最大径で約80cmである。確認面から床面までは約5cm前後を測り、立ち上がりは緩い。4号竪穴に伴う土坑と推察できる。古墳時代の前期前葉に比定できる。

出土遺物(第41図)

第41図1の口縁部は断面「く」の字に外反し、胴部は球形に張り、底部は丸底を呈する。口径は14.6cm、胴部最大径は19.5cmで、器高は22cmを測る。口縁部の表裏は指押え痕を残し、器表面は刷毛目調整で内部は指押えや削り痕跡を残している。器壁は比較的薄い。2は口縁部を欠くが胴部から底部は球形に張り、丸底である。



第40図 宮苑井ノ口遺跡4号土坑実測図（1/40）



第41図 宮苑井ノ口遺跡4号土坑出土遺物実測図（1/4）

胴部最大径は18cmを測る。器表面は刷毛目調整で内部は刷毛目を撫で消している。器壁は比較的薄い。4号竪穴の第23図8と同一個体である

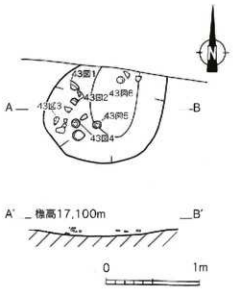
5号土坑(第42図)

調査区中央の北壁で検出された楕円状の土坑である。土坑の北側は調査区の外に遺存している。土坑の西・東の径は1.2m、現況での北・南は約1mである。確認面から床面までは約5cm前後を測り、立ち上がりは緩い。弥生中期の所産である。

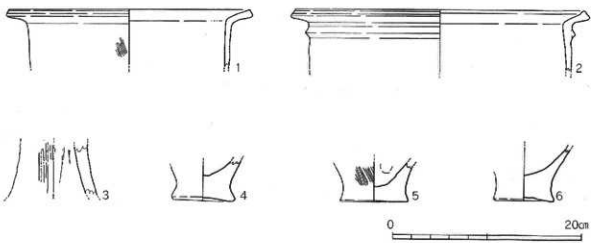
出土遺物(第43図)

第43図1の口縁部は強く折れ曲がる跳ね上げ状の口縁である。復元口縁径は25.4cmで、表裏は撫で調整である。2も1と同様な形態であるが、口縁部直下に断面三角形の突帯を施している。復元口縁径は30.6cmで、表裏は撫で調整である。

3は高坏の脚部である。内側に絞り痕跡。



第42図　宮苑井ノ口遺跡5号土坑実測図（1/40）

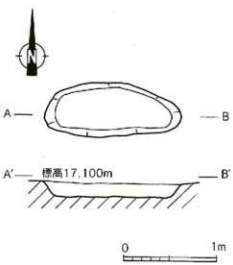


第43図　宮苑井ノ口遺跡5号土坑出土遺物実測図（1/4）

4、5、6は底部である。底部は括れてやや外に張り出し、心持ち上げ底状を呈する。表面は撫で調整。4は底径6.8cm、5は底径7.3cm、6は底径6.3cmである。

6号土坑(第44図)

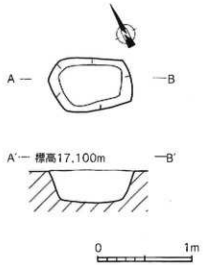
調査区中央の北壁近くの2号カメ棺墓に切られて位置している長楕円形の土坑である。土坑の規模は北・南の径で約60cm、西・東の径で約1.5cmである。確認面から床面までは約15cm前後を測る。土坑内の出土遺物はない。



第44図　宮苑井ノ口遺跡6号土坑実測図（1/40）

7号土坑(第45図)

調査区の東側の中央部に位置する歪な楕円状の土坑である。土坑の規模は北・南の径で約60cm、西・東の径で約90cmである。確認面から床面までは約35cm前後を測る。土坑内の出土遺物はない。



第45図　宮苑井ノ口遺跡7号土坑実測図(1/40)

3．溝状遺構

1号溝状遺構(第46図)

調査区南側で、調査区に沿うように東西に長く走る1号溝状遺構は幅約2mを測り、確認面からの深さは約50cmで断面は「V」や「U」字形を呈している。この溝は確認できる範囲で、長さ31.6mであり、調査区西方の中央部付近で南に曲がっていた。この溝は、調査区東方でも南に曲がる様相を呈していた。溝の中には遺物がほとんど入っていないが、現況の東半分には河原礫が床面近くに流れ込んでいた。出土遺物は弥生時代中期十層～須恵器も出土しているが、後世の撹乱や流れ込み等を考慮し、溝は弥生時代後期前葉～中葉頃とみられる。この溝が埋まった後、3号竪穴住居跡が営まれていたことが遺構の切り合い関係から推測できる。

出土遺物(第47図)

第47図1は壺の嫌先状口縁部である。口縁は外側にやや傾斜している。内法の口径は17.2cmを測る。表裏とも撫で調整を施す。2も同様な口縁部であるが、口縁部に円形貼付け浮文を施し、口唇部には山形の連続刻文が巡っている。

3は口縁部が筒張された壺である。口縁部に長さ2cm、幅5mmで断面三角形の粘土紐を7mm～1cmの間隔で周縁に配置し、厚く垂れた口唇部には山形の連続刻文が巡っている。表裏とも刷毛目調整を施す。内法の口径は24cmを測る。

4、5は外反する口縁部である。5の復元口径は15.5cmを測る。表裏とも撫で調整を施す。

6は口縁部からそのまま底部に至る特徴的な鉢形土器である。口縁部の径は12.4cmで底部は尖り気味な丸底である。器高は9.7cmを測る。

7は断面三角形の突帯を三条胴部に巡らせた壺の胴部片である。表面は撫で調整、内面は刷毛撫でに指押さえ痕を残す。

8、9は高坏の脚部である。9の復元底径は13.4cmで、脚部の上方に穿孔が認められる。表面はヘラ磨きで内面は撫で調整。

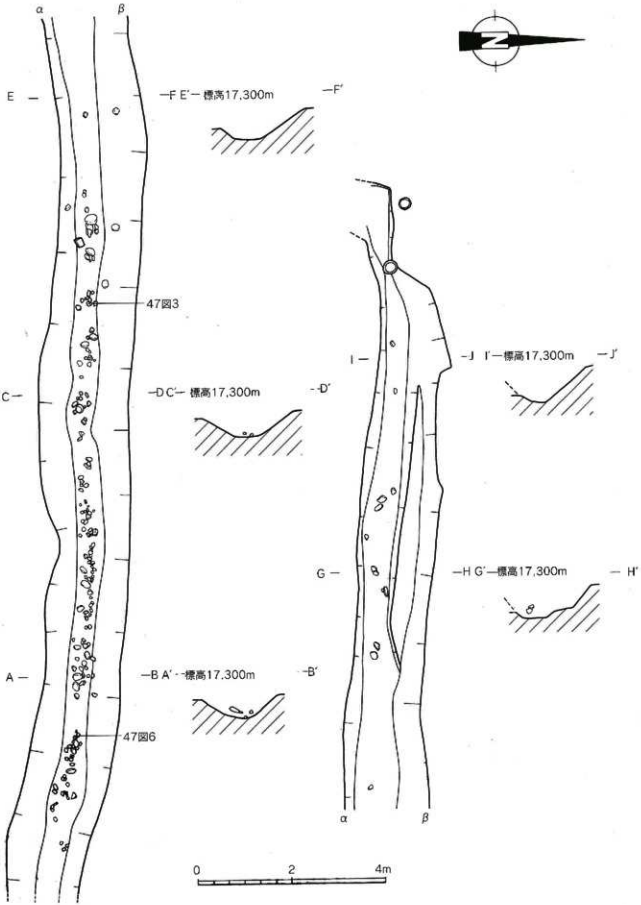
10～14は底部片である。10の底部は括れてやや外に張り出し、心持ち上げ底状を呈する。表面は刷毛目調整を施し、内面は撫で調整。底径は6.4cm。11は分厚い底部で底径5.2cm。12はやや薄く、底径6.4cmである。13は分厚く窄まった底部はやや上げ底で底径2.9cm。14は底径2.6cmの小さな底部である。

15は須恵器の蓋の破片である。復元口径は12cmで口縁部に段を持つ。天上部は回転ヘラ削り。後世の撹乱で混入したものと推測できる。

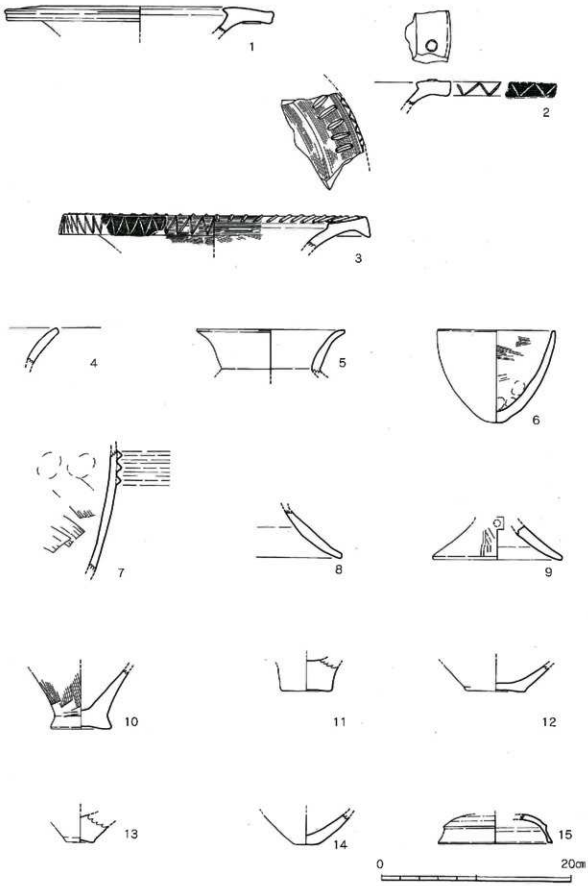
2号溝状遺構(第15、48図)

調査区の西方で確認された溝状遺構である。7号竪穴と6号竪穴に挟まれて位置し、6号竪穴の横を抜けている。実態が把握できず、破線で図示しておく。

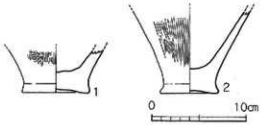
2号溝状遺構及びその周辺から出土した遺物は2点の底部である。第48図1、2は心持ち上げ底気味のしっかりした平底である。表面は刷毛目痕跡で内面は撫で調整で、弥生中期に比定できる。



第46図 宮苑井ノ口遺跡1号溝状遺構実測図（1/80）



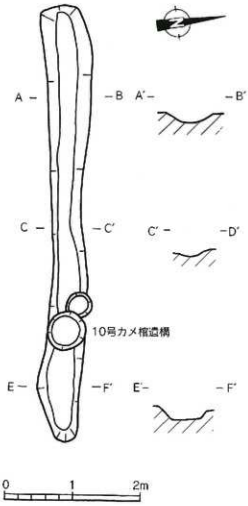
第47図　宮苑井ノ口遺跡１号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）



第48図　宮苑井ノ口遺跡2号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

3号溝状遺構(第49図)

調査区中央のやや西方、小児用カメ棺墓群の中に3号溝状遺構が西・東に位置している。溝の長さは6.5mで幅約40～70cmを測る。確認面からの深さは約20cm前後で断面は「U」字形を呈している。この遺構の西端には13号カメ棺、東側には10号カメ棺が切り合い関係を呈して検出されている。この溝状遺構の延長線上には赤色顔料を散布した場所がある。調査時はこれが当時の小道(墓道)の可能性があるのではという推察のもとに発掘を実施した。小道(墓道)の確証はないが、13号カメ棺、10号カメ棺が、他のカメ棺と異なり、埋ガメの状態を呈することから、小児墓地へと続く、当時の墓道の可能性は高いと推察できる。溝内からは、第50図7のような弥生時代後期終末～古墳時代の前期前葉の遺物が検出されている。

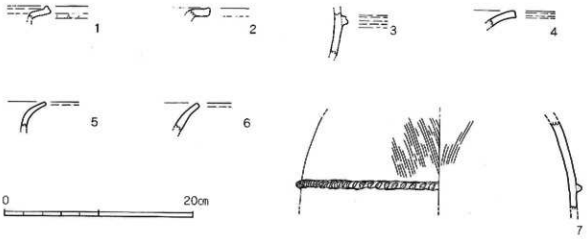


第49図　宮苑井ノ口遺跡3号溝状遺構実測図（1/60）

出土遺物(第50図)

第50図1、2の口唇部はやや肥厚し、跳ね上げ状の口縁部である。3は「M」字状突帯の胴部である。

4、5、6は外反する口縁部である。7は刻み目突帯を施す甕の胴部である。復元胴部の径は約29cmを測る。表裏面には刷毛目調整痕跡を残している。



第50図　宮苑井ノ口遺跡3号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

4．小児用カメ棺墓群(第51図)

今回注目される遺構として、13基の小児用カメ棺墓群を挙げることができる。これらは調査区中央のやや北寄りに位置し、ある一定のまとまりとして把握することができる。中には、後世の水田造成により、カメ棺の上部が削平を受けているものもあるが、13基のうち9基はほぼ現状を保った状態で検出されている。カメ棺は、日常生活で使用していた壺、甕、鉢を転用したもので、ふたつの土器を上・下もしくは左・右に対称的に組み合わせる、「合わせ口」の埋葬方法が探られている。また埋置には斜め方向にいれるもの、土器を横に寝かした状態のものに二分することができる。

カメ棺の下棺は壺を使用しており、意図的に口縁部を打ち欠いた後、鉢、甕、壺の胴部などを覆い被せている。また、打ち欠いた口縁部の破片や、打ち欠きに利用した拳大の石をカメ棺のそばに埋置しているものも多く、カメ棺埋葬のひとつの特徴といえよう。なお、13基のカメ棺内には副葬品は全くなかった。

カメ棺墓の周辺には、竪穴住居跡が位置しているが、出土遺物との比較から、これらはカメ棺墓群とほぼ同時期に営まれていたものと認識できる。

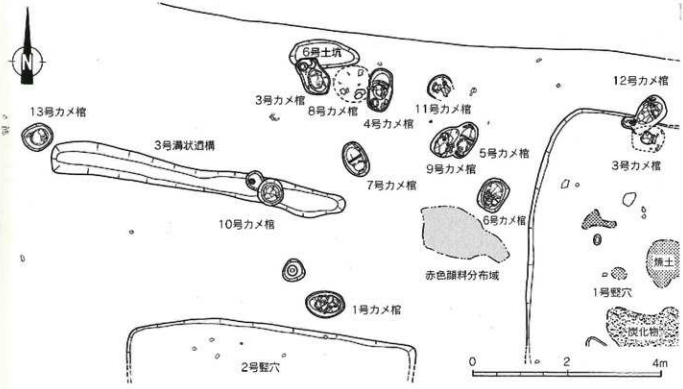
ここで注目されるのは、小児用カメ棺墓群に隣接して、赤色顔料(ベンガラ)が分布する場所である。カメ棺の長軸を各々延長してみると、大多数の長軸が、赤色顔料分布域の方向を指し示している様子であり、赤色顔料分布域を中心としてカメ棺が放射状に弧状を描いて配置されている様相として把握できそうである。赤色顔料は、葬送に伴う何らかの祭祀の痕跡を象徴しているとみなされる。なお、2号カメ棺内でベンガラと水銀が検出されており、ベンガラと水銀朱の2種類の赤色顔料が使用されたことが推察できる。

宮苑井ノ口遺跡の事例は、この時期の葬送儀礼を考える上で貴重な参考事例になるものと思われる。

1号カメ棺墓

遺構(第52図)

調査区のほぼ中央部、2号竪穴のすぐ北側に接するように位置する小児用カメ棺墓である。墓坑の平面プランは楕円状を呈し、長軸を西・東にとって位置している。墓坑の長径は80cm、短径は57cmで、ほぼ垂直に掘り



第51図 宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓配置図(1/80)

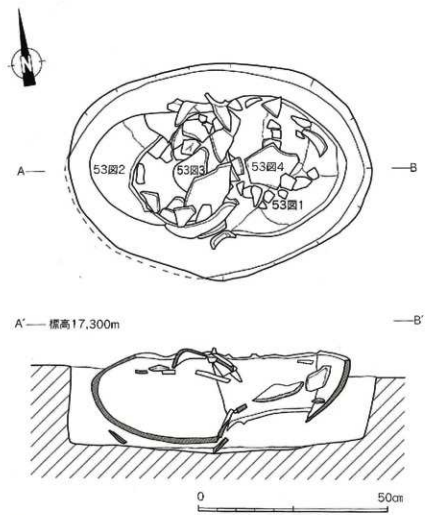
込んだ様子であり、確認面からの深さは約23cmである。墓坑内のカメ棺は上方が後世の耕作等で約1/3程度削平されている。

カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は68cm、短径は40cm、カメ棺確認面からの深さは約25cmである。カメ棺の本体は、2つの土器を横に水平に寝かした状態で「合わせ口」にしている。西側に、口縁部と頸部から胴部上半にかけて細かく打ち欠いた下棺の壺、東側には上棺の鉢がくる。下棺の壺の「合わせ口」部分の上縁と両側面は、破壊した別個体の土器破片を用いて被覆している。下棺の壺の胴径が、上棺の甕の口径よりかなり小さいため、被覆して上棺との隙間を埋めるように補ったものと推察できる。被覆用の上器は、甕3個体分と小鉢1個体である。なお、上棺である鉢の床面中央部は、土器片を一部抜き、棺の上部に被せていた。意図的に抜いたものであろう。

遺物(第53図)

第53図1は上棺の鉢である。口径38.1cmで口縁断面は大きく「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を残す断面三角形の突帯を施している。胴部は中央の上半で最大径34.5cmである。底部はやや厚く丸底を呈する。いわゆるレンズ状底部である。器表は刷毛目痕を残すが、内面は撫で消されている。口縁部の内側と底部の内外には煤が付着している。器高は34.2cmである。

2は口縁部、頸部から胴部上半にかけて打ち欠いた下棺の壺である。面取りの打ち欠きは外側から細かく丁寧に明いている。現況での口径は約20cmである。胴部の最大径はほぼ中央にあり、28.3cmである。器高は現況で35.4cmである。壺の表裏は刷毛目調整の後、撫で調整されている。底部はやや厚く、丸底であるが、いわゆるレンズ状底部の様相である。

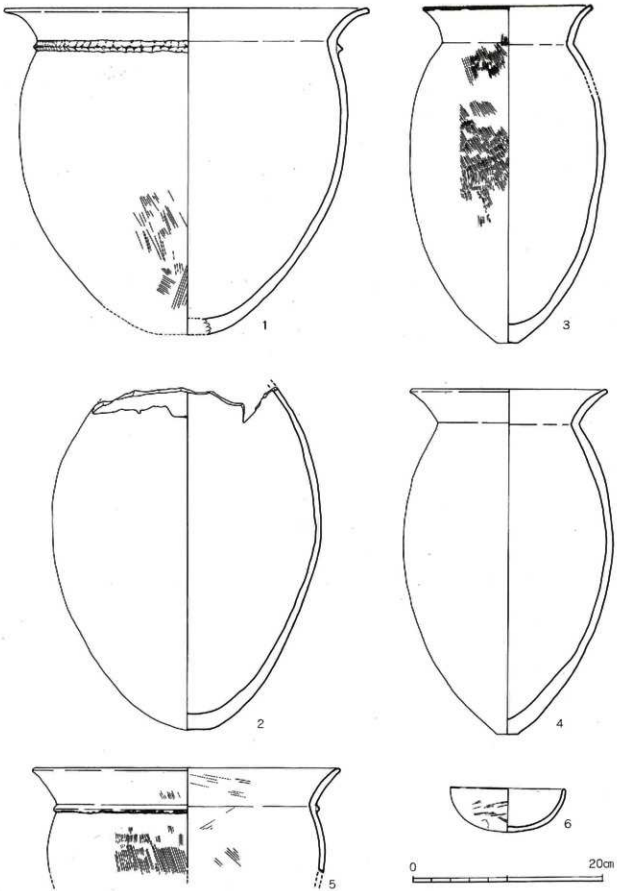


第52図 宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺墓実測図（1/10）

3は下棺の壺2の上部を被覆した甕である。口縁部は断面「く」の字に外反し、口径17.9cmである。胴部はやや長く、余り張らない甕である。胴部は中央部で最大となり、胴径は20.6cmである。底部は厚く、小さく窄まり、上げ底状の平底を呈する。底部径は2.1cmである。器表は刷毛目痕を残すが、内面は撫で消されている。器高は35.5cmである。

4は上棺の鉢1の上部を被覆した甕である。口縁部は断面「く」の字に外反し、口径20.8cmである。胴部はやや長く、余り張らない甕である。胴部は中央部で最大となり、胴径は22cmである。底部は厚く、小さく窄まり、平底を呈する。底部径は2cmである。表裏とも撫で調整されている。器高は36cmである。

5は1の鉢と同様な器形である。復元口径は32cmで、口縁断面は大きく「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を下側だけに残す断面三角形の突帯を施している。胴部



第53図　宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺遺物実測図（1/4）

は頸部のすぐ下方部で最大径があると推測できる。復元胴部径は29.2cmである。

６は丸底の小鉢の破片である。復元口径は12cmで器高は4.7cmである。表面は刷毛目痕、底近くでは指押さえ痕が残る。内面は撫で調整。

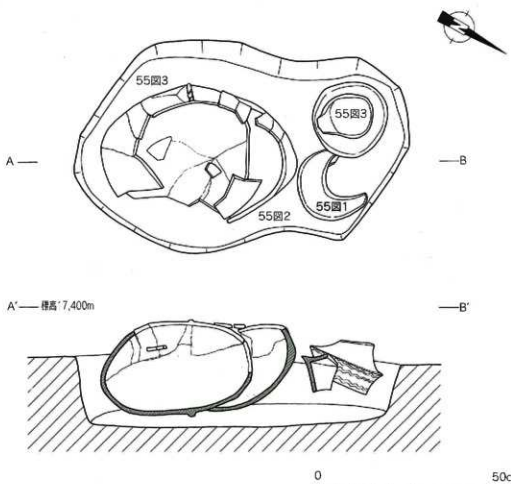
２号カメ棺墓

遺構(第54図)

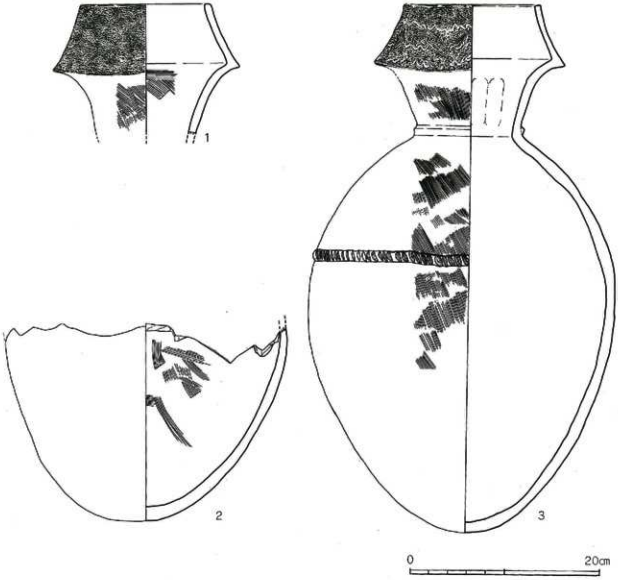
調査区のほぼ中央部の北壁近く、６号土坑の上面に接する小児用カメ棺墓である。２号カメ棺の東横には８号カメ棺があり、その東横には４号カメ棺が並置していた。墓坑の平面プランは歪な楕円状を呈し、長軸を北・南にとって位置している。墓坑の長径は90cm、短径は55cmで、ほぼ垂直に掘り込んだ様子であり、確認面からの深さは約18cmである。墓坑内のカメ棺は上方が後世の耕作等で約1/4程度削平されている。

カメ棺は上下棺とも二重口縁の壺を使用した「合わせ口」の埋葬方法で、長径は52cm、短径は約35cm、カメ棺確認面からの深さは約25cmである。カメ棺の本体は、２つの土器を横に水平に寝かした状態で、下棺の口部を上棺がしっかり覆い、覆い目が判らない鶏の卵のような形態である。南側に、頸部～胴部を打ち欠いた下棺の壺、北側には頸部～胴部上半を大きく欠損した上棺の壺がくる。上下棺の壺の二重口縁部は、カメ棺の北側に接して配置していた。いずれも、口縁部を下に頸部を上にして埋納したように並置していた。

２号カメ棺内の土壌には赤色顔料が認識できたため、科学分析を行った。その結果、赤色顔料からはベンガラと水銀が検出されている。ベンガラと水銀朱の2種類であることが判明している。



第54図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺墓実測図（1/10）



第55図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺遺物実測図（1/4）

遺物(第55図)

第55図1は上棺の壺形土器２の二重口縁部である。口縁部断面は逆「く」の字に大きく立ち上がり、細かな櫛描波状文を三条施す。口径13.6cm。

２は上棺の壺の胴部～底部である。上半を大きく欠損しているが、現況で胴部径は29.9cm、器高は19.7cmである。底部は胴部の器壁と同じ厚みを持つ丸底である。器表は刷毛目痕が甚だ消されているが、内面は刷毛目痕が残っている。打ち欠いた胴部は外側から細かく叩かれて面取りされていた。

3は下棺の壺である。頸部から打ち欠かれていたが、傍らに並置していた口縁部と接合した。口縁部断面は逆「く」の字に大きく立ち上がり、三条の櫛描波状文を施す口径15cmの二重口縁の壺形土器である。頸部に断面三角形の突帯を施し、胴部中央部よりやや上部に施文具で刻みを施すベルト状突帯文が一条巡る。胴部最大径は中央部であり33.1cmである。底部は丸底で厚みはない。胴部の中央には、内側から穿った孔が開いていた。器表は刷毛目痕を残すが、内面は撫で消されている。器高は55.2cmを測る。

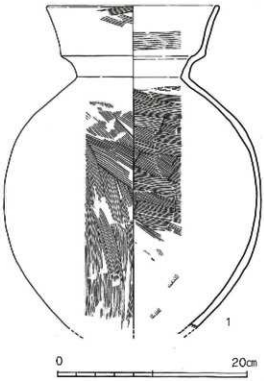
3号カメ棺墓

遺構(第57図)

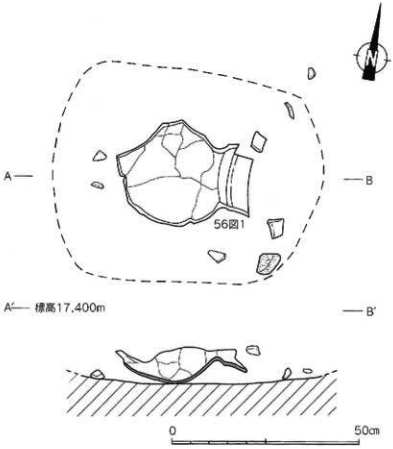
調査区のほぼ中央部の北壁近く、1号竪穴の北壁近くの覆土内に埋葬された小児用カメ棺墓である。3号カメ棺の下部には12号カメ棺が埋葬されていた。時間的には、古いほうから、1号竪穴→12号カメ棺→3号カメ棺の順に編年できる。墓坑の平面プランは判りにくいが、長軸を西・東にとって位置している。墓坑の長径は推測で約70cm、短径は推測で約55cmである。中央部にカメ棺の残存部の壺形土器が水平に遺存していた。単一棺なのかどうかは判断できない。墓坑内のカメ棺は上方が後世の耕作等で約2/3程度削平されている。

遺物(第56図)

第56図1は口縁部がやや外側に開き気味の二重口縁壺である。いわゆる山陰系とよばれる一群であろう。復元口径は17.6cmで頸部は11.8cmである。胴部は球形に張り中央部で最大径となる。胴径は26.8cmである。底部は欠損しているが、丸底と推量できる。現況での器高は33.8cmとなる。表裏は刷毛目痕で整形されている。



第56図 宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺遺物実測図(1/4)



第57図 宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺墓実測図 (1/10)

4号カメ棺墓

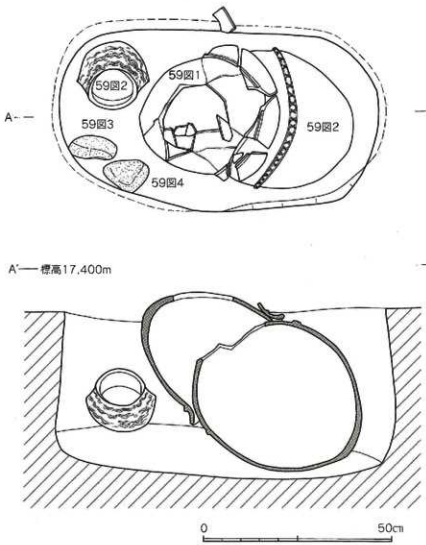
遺構(第58図)

調査区のほぼ中央部の北壁近く、8号カメ棺の東側に隣接した小児用カメ棺墓である。墓坑の平面プランは楕円形を呈し、長軸を南・北にとる。墓坑の長径は85cm、短径は48cmである。ほぼ垂直に掘り込んだ様子であり、礫認面からの深さは約45cmである。墓坑内のカメ棺は、ほぼ原状を保って発見されている。

カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は65cm、短径は39cm、カメ棺礫認面からの深さは約47cmである。カメ棺の本体は、2つの上器を斜め35°に寝かした状態で、歯のような「合わせ口」にしている。北側に、口縁部、頸部から胴部上半にかけて細かく打ち欠いた下棺の壷、南側には上棺の鉢がくる。カメ棺の南側の側には、下棺の壷から外した二重口縁部がやや斜めに置かれていた。また、興味深いことに、墓坑内には拳大の円礫が2個同じように配置されていた。カメ棺形成時に、土器を叩いて面取りし形を整える石器と推察できる。

遺物(第59図)

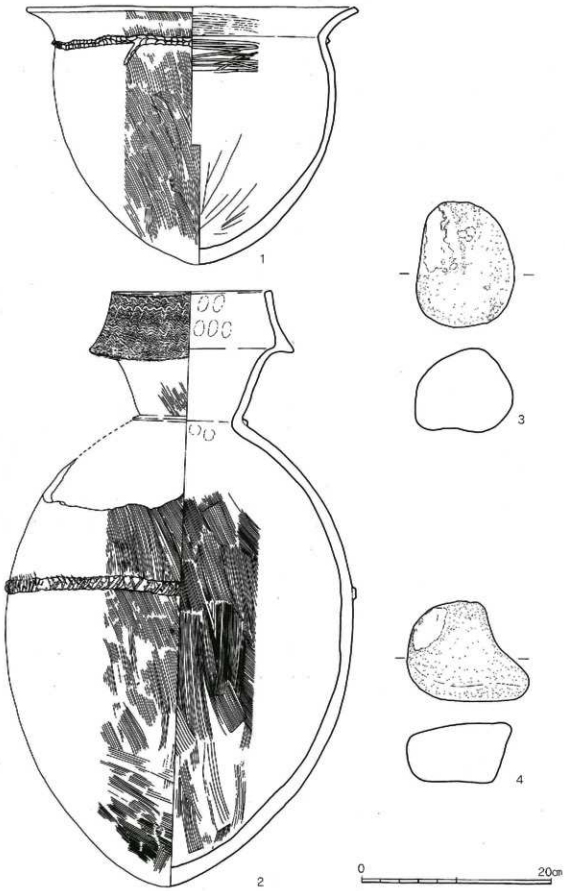
第59図1は上棺の鉢である。口径27cmで口縁断面は大きく「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を残す断面三角形の突帯を施している。一巡した突帯の端は、斜めに垂れている。胴部は中央の上半で最大径29.7cmである。底部はやや厚く、尖り気味な丸底を呈する。器表は刷毛目痕を残すが、内面は一部にヘラ磨き、底部から胴部はヘラ削り痕を残している。器高は27cmである。



第58図 宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺墓実測図（1/10）

2の口縁部断面は逆「く」の字状に立ち上がり、櫛描波状文を施す二重口縁の壺形土器である。下棺として使用され、口縁部～頸部は外されていたが、接合し復元が可能となった。胴部上半の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いている。口径は17cmである。頸部には低い断面三角形の突帯が巡っている。胴部の最大径はほぼ中央にあり、36.5cmである。胴部には斜め格子状の刻みを入れたベルト状突帯が巡る。底部は丸いがやや尖り気味である。壺の表裏は刷毛目調整。器高は63cmである。

3・4は拳大の自然礫である。3は長さ約13cm、幅約10cm、重さ1.2kgである。4は長さ約10cm、幅約10cm、重さ1.1kgである。カメ棺を形成する時、土器を叩いて割り、細かな面取りする石器と推察できる。



第59図　宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺遺物実測図（1/4）

5号カメ棺墓

遺構(第60図)

調査区のほぼ中央部の北壁近くに位置する小児用カメ棺墓である。西側に9号カメ棺が併設している。5号カメ棺と9号カメ棺の墓坑は接触し切り合う関係にあるが、俄かに先後関係を決め兼ねる。古い方から、5号カメ棺→9号カメ棺が構築されたものと推測しておく。墓坑の平面プランは楕円形を呈し、長軸を北・南にとる。墓坑の長径は82cm、短径は約45cmである。やや斜めに掘り込んだ様子であり、確認面からの深さは約26cmである。墓坑内のカメ棺は、ほぼ原状を保って発見されている。

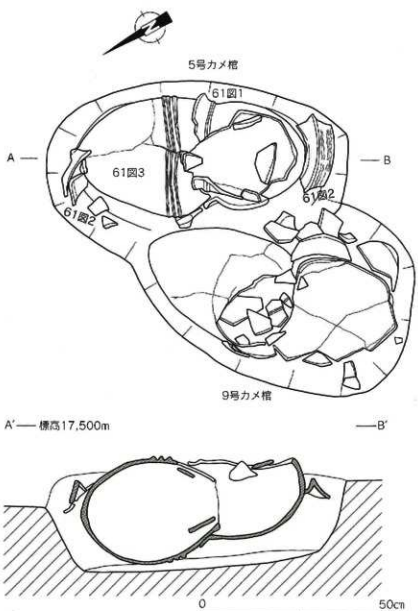
カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は60cm、短径は30cm、カメ棺確認面からの深さは約28cmである。カメ棺の本体は、2つの上器をやや斜め5°に寝かした状態で、繭のような「合わせ口」にしている。北側に、口縁部、頸部から胴部上半にかけて細かく打ち欠いた下棺の壺、南側には上棺の甕がくる。カメ棺の上棺、下棺のそれぞれの底部側には、下棺の壺から外した二重口縁部の破片がカメ棺の台のように置かれていた。

遺物(第61図)

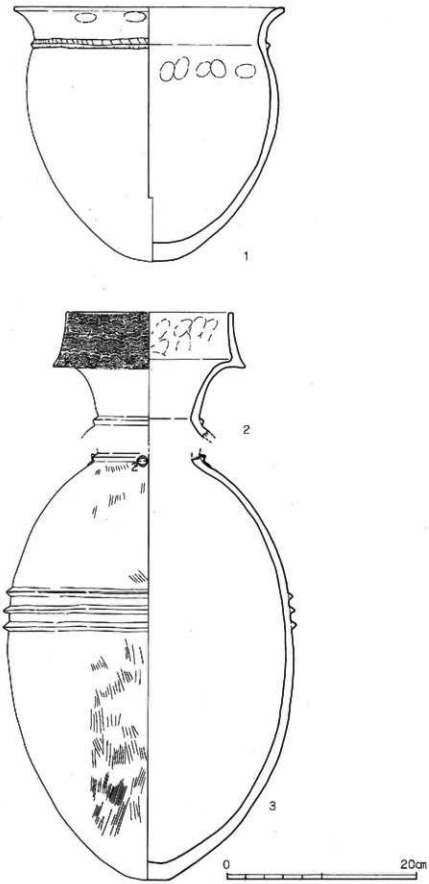
第61図1は上棺の鉢である。口径28.4cmで口縁断面は大きく「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を残す断面三角形の突帯を施している。胴部は中央の上半で最大径26.4cmである。底部はやや厚く、丸底を呈する。器表は表裏とも撫で調整である。器高は26.6cmである。

2の口縁部断面は逆「く」の字状に立ち上がり、櫛横波状文を施す二重口縁の壺形土器である。口径は17.5cmである。

3は下棺として使用され、口縁部～頸部は外されていたが、2が同一個体として復元が可能である。頸部の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いている。頸部には、4箇所に浮文が付く低い断面三角形の突帯が巡っている。胴部の最大径はほぼ中央にあり、30.1cmである。胴部には断面三角形の突帯が3条巡っている。底部はやや厚く、丸みがかった径4.4cmの平底である。壺の表は縦毛目調整、内面は撫で調整である。2と3を接合した器高は約55cmである。



第60図 宮苑井ノ口遺跡5号カメ棺墓実測図（1/10）



第61図　宮苑井ノ口遺跡5号カメ棺遺物実測図（1/4）

6号カメ棺墓

遺構(第62図)

調査区のほぼ中央部、1号竪穴の西壁に近接する小児用カメ棺墓である。すぐ南側には、赤色顔料が散布している所がある。墓坑の平面プランは楕円形を呈し、長軸を北・南にとる。墓坑の長径は72cm、短径は約56cmである。確認面からの深さは約30cmである。墓坑内のカメ棺は、単一棺のように奥深く組み合わされており、ほぼ原状を保って発見されている。

カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は58cm、短径は約30cm、カメ棺確認面からの深さは約30cmである。カメ棺本体は、壺に鉢を覆い、心持ち斜め10°に寝かした状態である。南側に、口縁部を蓋とし、頸部を細かく打ち欠き調整した下棺の壺、北側には上棺の鉢が覆っている。上棺、下棺の接合部には、もう一つ別の鉢を割った破片で何重にも覆っていた。

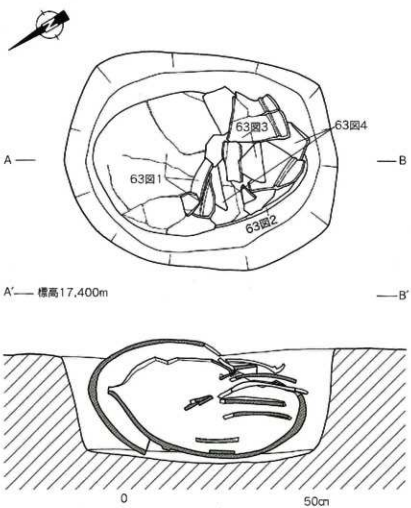
遺物(第63図)

第63図1は上棺の鉢である。復元口径は36.6cmで、口縁部断面は大きく「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を残す断面三角形の突帯を施している。胴部は中央の上半で最大径38cmである。底部は丸底を呈する。器表は表裏とも撫で調整である。器高は36.5cmである。

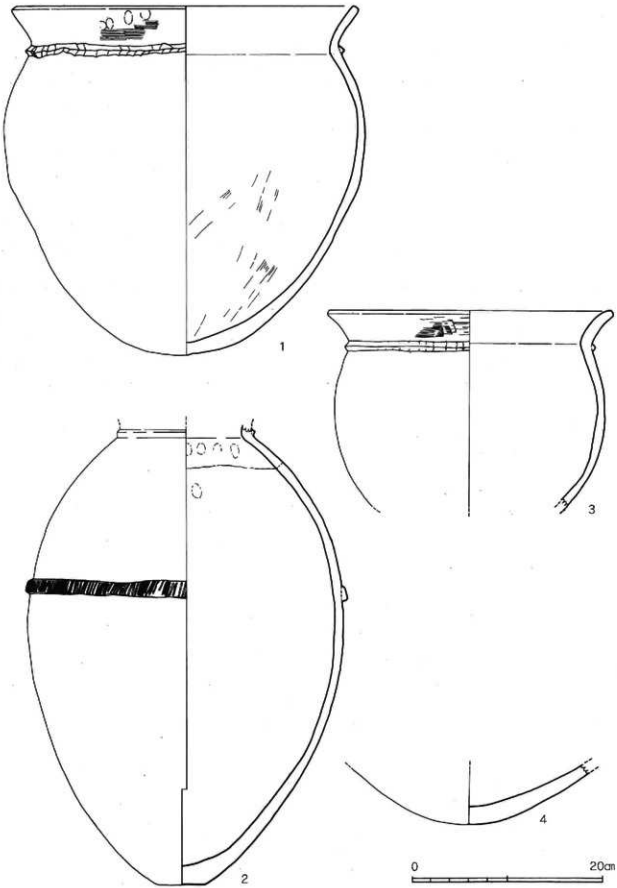
2は二重口縁の壺形土器であるが口縁部を大きく欠損している。下棺として使用される。頸部の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いて整形されている。頸部には低い断面三角形の突帯が巡っている。胴部の最大径はほぼ中央にあり、径は33.4cmである。胴部には斜めの刻み目を入れたベルト一条の突帯が一条巡っている。底部はやや厚く、径5cmの平底である。壺の表裏は撫で調整であり、内側の頸部付近には指頭痕が残っている。現況での器高は約48cmである。

3は上棺、下棺の接合部を破片で覆った鉢である。復元口径は29.7cmで、口縁部断面は「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を若干残す断面三角形の突帯を施している。胴部は中央部で最大径28.4cmである。底部は大きく欠損している。器表は表裏とも撫で調整である。現況の器高は約21cmである。

4は上棺、下棺の接合部を覆った丸底の底部の破片である。



第62図　宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺墓実測図（1/10）



第63図　宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺遺物実測図（1/4）

7号カメ棺墓

遺構(第64図)

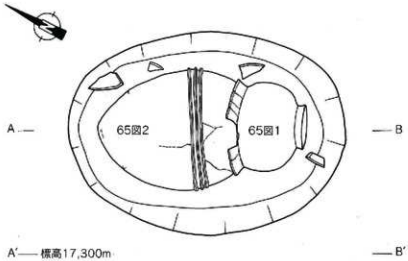
調査区のほぼ中央部、カメ棺の集中する中央付近に埋葬された小児用カメ棺墓である。長軸を北・南にとり、2号カメ棺の長軸の延長線上に位置している。また、このすぐ南東部には、赤色顔料が散布している所がある。墓坑の平面プランは楕円形を呈し、墓坑の長径は74cm、短径は約54cmである。確認面からの深さは約30cmである。墓坑内のカメ棺は「合わせ口」で、繭のような形態を呈する。ほぼ原状を保って発見されている。

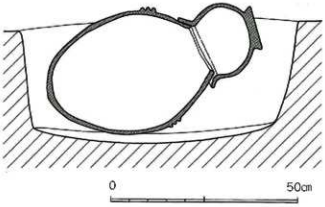
カメ棺本体は、長径は58cm、短径は約32cm、カメ棺確認面からの深さは約35cmである。カメ棺は、壺に鉢を覆い、心持ち斜め18°に寝かした状態である。北側の下棺の壺は、口縁部～頸部を欠損する。打ち欠いた部分の直径は約14～15cm程度と狭い。これを南側の上棺の鉢が覆っている。

遺物(第65図)

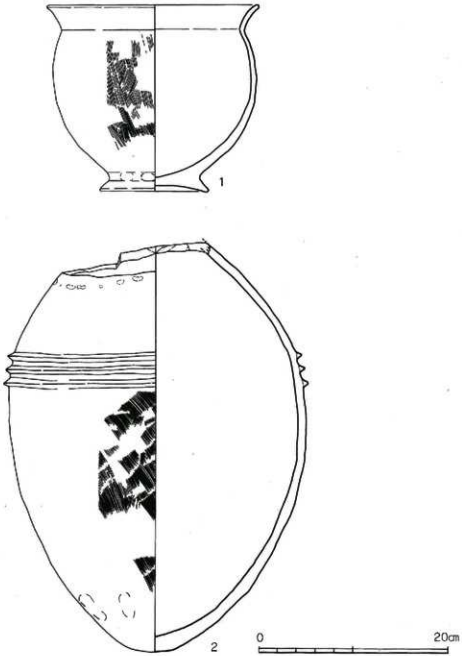
第65図1は上棺の鉢である。口径は22.3cmで、口縁部断面は大きく「く」の字に外反する。胴部は中央部で最大径21.6cmである。底部は上げ底で両横に広く張り出す。脚付きの鉢の様相を呈する。表面は刷毛目痕、裏面は撫で調整されている。器高は19.6cmである。

2は二重口縁の壺形土器であるが口縁部～頸部を大きく欠損している。下棺として使用される。頸部の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いて面取り整形されている。打ち欠いた部分の直径は約14～15cm程度である。胴部の最大径はほぼ中央にあり、径は31.3cmである。胴部中央上半には断面三角形の突帯が三条巡っている。底部はやや厚く、平底気味の丸底である。壺の表面は刷毛目痕、裏面は撫で調整されている。現況での器高は約42.1cmである。頸部付近の外側には合わせ口の痕跡を示すと思われる色調の変化痕が残っている。





第64図　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺墓実測図（1/10）



第65図　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺遺物実測図（1/4）

8号カメ棺墓

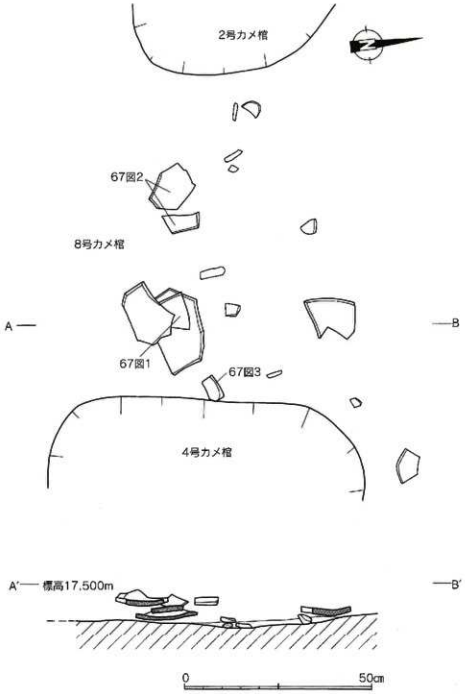
遺構(第66図)

調査区の中央部の北壁近くにある小児用カメ棺墓である。2号カメ棺と4号カメ棺に挟まれた位置にある。カメ棺本体は後世の攪乱で殆ど破壊されており、形態を留めていないが、土器片が内面を上にして数片まとまって出土したためカメ棺の破壊された残映とみなした。

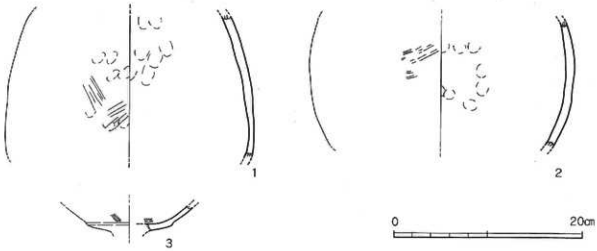
遺物(第67図)

第67図1、2は壷の胴部の破片である。同一個体と考えられ、復元した胴部の径は1で約27cm、2で約26.5cmを測る。

3は高坏の坏部の破片である。坏部付近には段を持つのが特徴である。



第66図　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺墓実測図（1/10）



第67図　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺遺物実測図（1/4）

9号カメ棺墓

遺構(第68図)

調査区のほぼ中央部の北寄近くに位置する小児用カメ棺墓である。東側に5号カメ棺が併設している。9号カメ棺と5号カメ棺の墓坑は接触し切り合う関係にあるが、俄かに先後関係を決め兼ねる。古い方から、5号カメ棺→9号カメ棺が構築されたものと推測しておく。墓坑の平面プランは楕円形を呈し、長軸を北・南にとる。墓坑の長径は約75cm、短径は約50cmである。確認面からの深さは約10cmである。墓坑内のカメ棺は、南側で大きく削平されている。

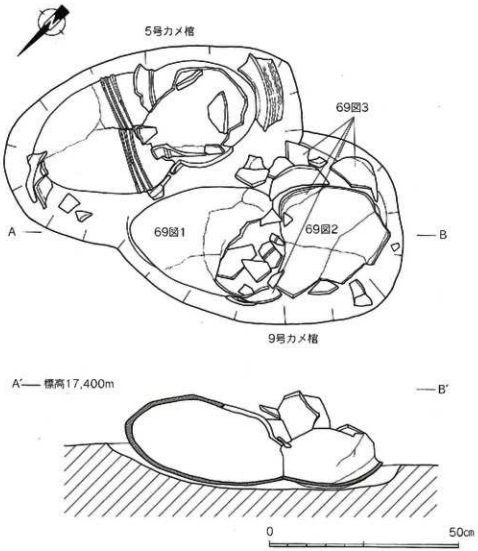
カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は70cm以上あり、短径は約21cm、カメ棺確認面からの深さは約24cmである。カメ棺の本体は、2つの土器をほぼ平行に寝かした状態で、繭のような「合わせ口」にしている。両側に、口縁部、頸部、胴部上半を欠損した下棺の壺、北側には上棺の甕がくる。上棺、下棺の接触部の上面、両側面は、二重口縁部を持つ壺の土器片で覆われていた。

遺物(第69図)

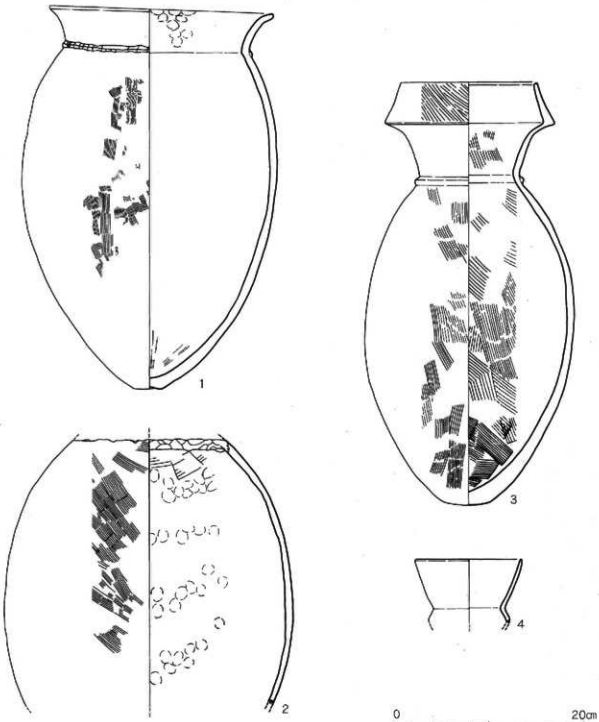
第69図1は上棺の甕である。口径23.7cmで口縁部断面は大きく「く」の字に外反し、頸部には摘み上げた痕跡を残す断面三角形の突帯を施している。胴部はやや長胴で、中央部の26.4cmが最大径となる。底部はやや窄み、上げ底状の小さな平底となる。底径2.8cmである。表は刷毛目調整、内面は撫で調整、口縁内側には指押さえの痕跡がある。器高は約40cmである。

2は南側の下棺の壺形土器である。口縁部～頸部は外されていたが、頸部付近の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩かれ面取りされている。口部の径は約16cm前後である。胴部の最大径はほぼ中央にあり、30.5cmである。底部は大きく欠損している。壺の表は刷毛目調整、内面は撫で調整と指押さえの痕跡が残っている。現況の器高は約28cmである。

3は二重口縁の壺形土器である。上棺と下棺との接合部の上や両側辺に、土器片の覆いとして使用されたもの



第68図 宮苑井ノ口遺跡9号カメ棺墓実測図（1/10）



第69図　宮苑井ノ口遺跡9号カメ棺遺物実測図（1/4）

である。口径は14.4cmである。頸部には低い断面三角形の突帯が巡っている。胴部は余り張りのない長胴で、最大径はほぼ中央にあり、21.9cmである。底部付近はやや厚く、丸みがかった径4.8cmの平丸底である。壺の表裏は刷毛目調整である。器高は44.1cmである。

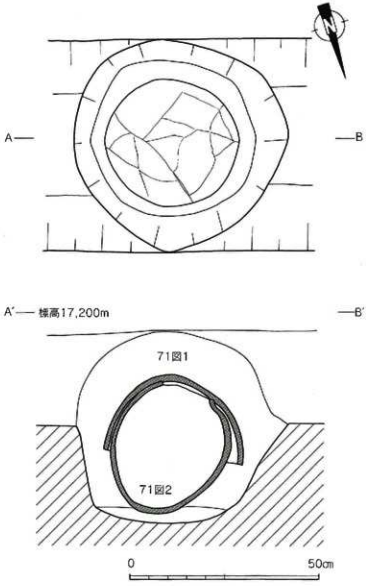
4は口径11.2cmで底部を欠損した小型丸底壺である。

10号カメ棺墓

遺構(第70図)

調査区のほぼ中央部の3号溝状遺構と切り合って発見された小児用カメ棺墓である。3号溝状遺構の延長線上には赤色顔料が散布している所がある。墓坑の平面プランはほぼ円形を呈し、直径は約56cmである。確認面からの深さは約50cmである。墓坑内のカメ棺は、丸い底部を上にした単一棺のように見えるが、断面では奥深くしっかり組み合わされており、ほぼ原状を保って発見されている。

カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は35cm、短径は約33cm、カメ棺確認面からの深さは約36cmである。カメ棺本体は、壺に鉢を覆い、斜め約70°に傾けた状態である。下棺は、口縁部を落とし、頸部を細かく打ち欠き調整した壺である。上棺は口縁部～胴部までを欠損した鉢の底部が覆っていた。下棺には2/3に土が検出されたが、中にはなにも遺存していない。3号溝状遺構を小道(墓道)とすると埋ガメの用途を彷彿とさせる。

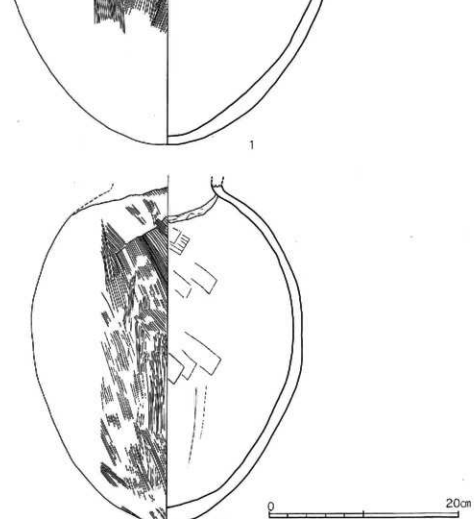


第70図 宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺墓実測図（1/10）

遺物(第71図)

第71図1は上棺の鉢である。上半部を大きく欠損している。胴部の打ち欠きは、外側から細かく丁寧に叩いて面取り整形されている。胴部最大径は34cmである。底部は丸底を呈する。器表は表裏とも刷毛目調整である。現況の器高は23.5cmである。

2は壺形上器であるが口縁部を大きく欠損し、下棺として使用されている。頸部の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いて面取り整形されている。打ち欠いて広げた口径は約15cm程度である。胴部の最大径はほぼ中央にあり、径は28.8cmである。底部はやや厚く、丸底である。壺の表面は刷毛目調整である。内側はヘラ削りの後、撫で調整をしている。現況での器高は約35.5cmである。



第71図　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺遺物実測図（1/4）

11号カメ棺墓

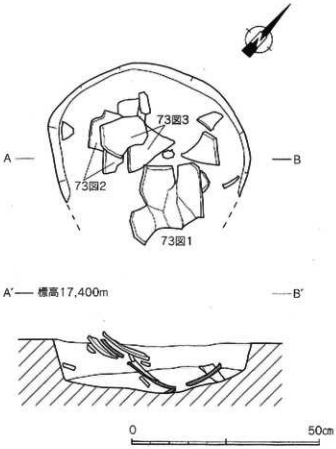
遺構(第72図)

調査区の中央部の北壁近くにある小児用カメ棺墓である。墓坑の平面プランはほぼ円形を呈し、直径は約55cm前後である。確認面からの深さは約12cmである。墓坑内のカメ棺は、大きく削平されており、カメ棺の形態を留めていない。遺存する土器片は、いずれも内面を上にして出土しており、下棺の一部と推察できる。断面図では、土器の配置状況がおぼろげながら判断できる。主軸は北・南を基軸としている様相を呈する。

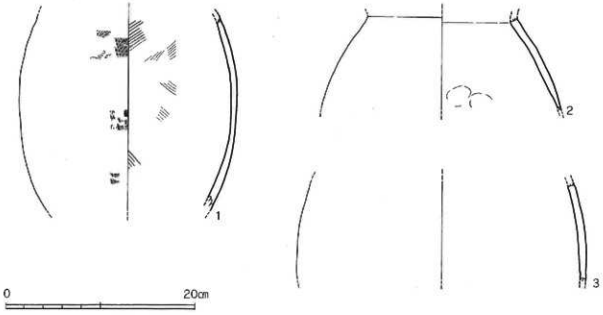
遺物(第73図)

第73図1は壺形土器であるが口縁部と底部を大きく欠損している。胴部の最大径はほぼ中央にあり、径は23cmである。表裏面は刷毛目調整である。内側はヘラ削りの後撫で調整をしている。現況での器高は約35.5cmである。

2と3は同一個体の可能性がある。2は一部頸部が残っており現況での頸部の径は15.8cmである。3の胴部最大径は30.4cmである。器表は表裏とも撫で調整である。



第72図　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺墓実測図（1/10）



第73図　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺遺物実測図（1/4）

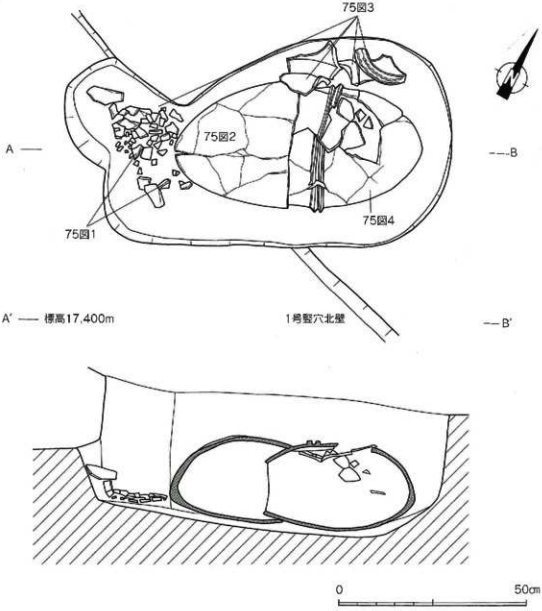
12号カメ棺墓

遺構(第74図)

調査区のほぼ中央部の北壁近く、1号竪穴の北壁を壊して埋葬された小児用カメ棺墓である。12号カメ棺の上部には3号カメ棺が配置されていた。時間的には、古いほうから、1号竪穴→12号カメ棺→3号カメ棺の順に編年できる。墓坑の平面プランは一方に拡張部を持つ歪な楕円状であり、長軸を北東・南西にとっている。

墓坑の長径は約92cm、短径は約55cmである。確認面からの深さは約35cmである。カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は65cm、短径は約33cm、カメ棺確認面からの深さは約23cmである。カメ棺の本体は、2つの土器をほぼ平行に寝かした状態で、平面的には鶏の卵のような形態である。北東側に、口縁部、頸部、胴部上半を欠損した下棺の壺、南西側には上部半分を欠損した上棺の壺がくる。上棺、下棺の接触部の片側面近くには、割れた二重口縁部をまとめて安置していた。

また、上棺の底部近くには墓坑の拡張部があり、上棺の頸部付近の小さな土器片が細かく割られて敷き詰められていた。これらの数点は、上棺と接合している。上棺の合わせ口部を面取りしたときの土器片を意図的に埋置した様相が認められた。日常土器を転用し、カメ棺用に加工製作する作業は、現地(墓地)で行われたことが確実となった。

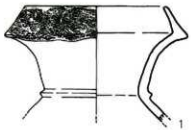


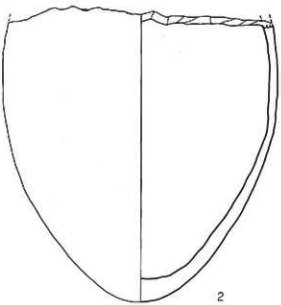
第74図 宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺墓実測図（1/10）

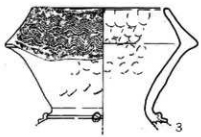
遺物(第75図)

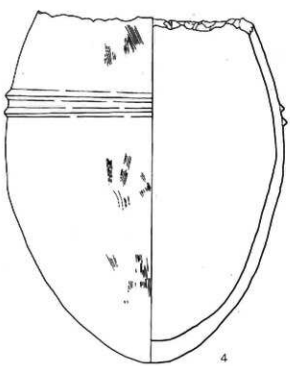
第75図1は色調等から2の口縁部～頸部と推察できる。口縁部断面は逆「く」の字状に立ち上がり、櫛描波状文を二条施す二重口縁部である。口径は14.3cmである。頸部には低い断面三角形の突帯が巡っている。この口縁部の一部は12号カメ棺墓外の周辺部で発見され、2の底部付近で細かく割られて敷き詰められていた土器片と接合した。

2は上棺である。口縁部～胴部上半を大きく欠損した壺の下半部である。胴部の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いて、面取りされている。現況での口径は27.9cmで、胴部









0　20cm

第75図　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺遺物実測図（1/4）

最大径は29cmである。底部はやや厚く、尖り気味な丸底である。現況での器高は30cmとなる。表裏面は撫で調整をしている。

3は色調等から4の二重口縁部と推察できる。カメ棺合わせ口部の北側に配置したものである。口縁部断面は逆「く」の字状に立ち上がり、櫛描波状文を二条施す二重口縁部である。頸部の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いている。口径は14.3cmである。頸部には低い断面三角形の突帯が巡っている。突帯には4箇所に勾玉状の浮文が付く。表裏とも指押さえの痕跡を残す。

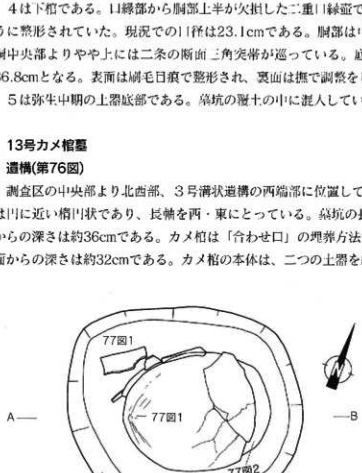
4は下棺である。口縁部から胴部上半が欠損した二重口縁壺である。胴部上半の割れ口は細かく面取りしたように整形されていた。現況での口径は23.1cmである。胴部は中央部で最大径となり、胴径は29.2cmである。胴中央部よりやや上には二条の断面三角突帯が巡っている。底部はやや厚く、丸底である。現況での器高は36.8cmとなる。表面は刷毛目痕で整形され、裏面は撫で調整をしている。

5は弥生中期の土器底部である。墓坑の覆土の中に混入していたものである。

13号カメ棺墓

遺構(第76図)

調査区の中央部より北西部、3号溝状遺構の西端部に位置している小児用カメ棺墓である。墓坑の平面プランは円に近い楕円状であり、長軸を西・東にとっている。墓坑の長径は約65cm、短径は約53cmである。確認面からの深さは約36cmである。カメ棺は「合わせ口」の埋葬方法で、長径は45cm、短径は約32cm、カメ棺確認面からの深さは約32cmである。カメ棺の本体は、二つの土器を斜め約50°に傾けた状態で、平面的には楕の卵のような形態である。下棺は口縁部～頸部を欠損した壺、上棺には上半分を欠損した鉢がくる。下棺は上棺の奥深くまで入り、しっかり組み合わされており、下棺には2/3に土が検出されたが、中にはなにも遺存していない。ほぼ原状を保って発見されている。3号溝状遺構を小道(墓道)とすると埋ガメの用途を彷彿とさせる。



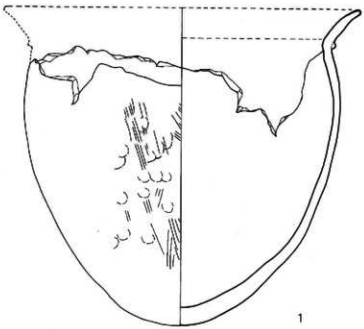
第76図　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺墓実測図（1/10）

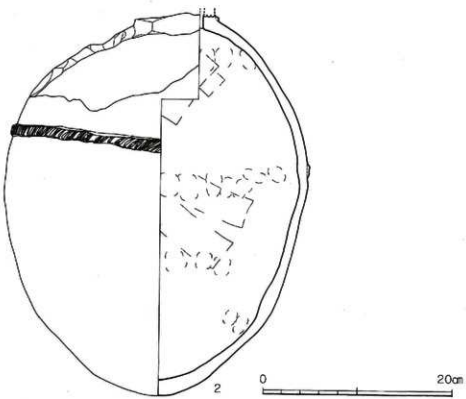
遺物(第77図)

第77図1は上棺の鉢である。口縁～胴部上半を打ち割ったものである。口縁の一部はカメ棺の横に置かれていた。胴部上半の打ち欠きは外側から細かく丁寧に叩いている。接合資料で復元すると、口縁部断面は「く」の字状に立ち上がり、頸部には低い断面三角形の突帯が巡っている。胴部最大径は上半にあり径33.4cmである。底部はやや厚い丸底である。器高は33.2cmとなる。表面は刷毛目痕で整形され、指押さえの痕跡を残す。裏面は撫で調整をしている。

2は下棺である。口縁部から頸部片半が欠損した壺である。頸部～胴部上半の割れ口は細かく面取りしたように整形されていた。胴部は中央部で最大径となり、胴径は

32.1cmである。胴中央部よりやや上に、斜め刻み目を施したベルト条突帯が一条波打ちながら巡っている。底部はやや厚く、歪な丸底である。現況での器高は39.8cmとなる。表面は撫で調整され、裏面は削りや指押さえ痕をのこしている。

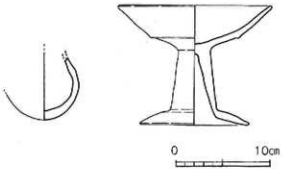




第77図　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺遺物実測図（1/4）

5．赤色顔料分布の小空間

カメ棺墓に囲まれたような小空間は、直径約3.5m程の狭い円形の空間である。この空間の北側で、東西約２m、南北約１mの範囲に赤色顔料(ベンガラ)の分布している所があり、カメ棺葬群との有機的な関係が留意された。赤色顔料の分布している場所の標高は17.380～17.390mで赤色顔料の厚さは3～5cmであった。カメ棺の検出面よりも約20～25cm程高い位置で検出している。つまりこれが当時の地表面に近いと考えて良いであろう。



第78図　赤色顔料分布の小空間出土遺物(1/4)

赤色顔料(ベンガラ)の分布する小空間の機能を考えると、埋葬用のカメ棺加工、赤色顔料の塗布、納棺、埋葬等の葬送儀式の執り行われた場所とみるのが最も自然で理解し易い解釈である。赤色顔料分析の結果、２号カメ棺内の土壙には、赤色顔料(ベンガラと水銀)が検出されており、ベンガラと水銀朱と考えて良いことから、この小空間の機能を推定する上で重要な証左となる。

なお、この空間の西には、墓道と推察できる3号溝状遺構が位置している。

出土遺物(第78図)

赤色顔料の分布している付近で出土した遺物である。第78図1は胴部径が約8cmを測り、丸底の体部を持つ。２は高坏である。口径16.2cm、器高12.6cm、底径11.6cm。葬送祭祀にまつわる土器と推察できそうである。

第１表　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓計測表

墓	墓坑の規模(cm)			カメの規模(cm)		土器の器種			長軸の方位	時期	副葬品	埋納品	備考
	長軸	短軸	深さ	長軸	短軸	上層	下層	蓋い					
1号カメ棺墓	80	57	23	68	40	鉢	壺	甕・鍋	N95° E	弥生後期終末～古墳初頭	無し		
2号カメ棺墓	90	55	18	52	35	壺	壺		N38° W	古墳前期前葉	無し	壺の口縁部	ベンガラと水銀朱を検出
3号カメ棺墓	70	55	?	?	?	?	壺		N 7° W	古墳前期前葉	無し		
4号カメ棺墓	85	48	45	65	39	鉢	壺		N 8° E	古墳前期前葉	無し	壺の口縁部、円盤2	
5号カメ棺墓	82	45	26	60	30	鉢	壺		N30° E	弥生後期後葉	無し	壺の口縁部	
6号カメ棺墓	72	56	30	58	30	鉢	壺	鉢底部片	N30° E	弥生後期終末～古墳初頭	無し		
7号カメ棺墓	74	54	30	58	32	鉢	壺		N26° W	弥生後期後葉	無し		
8号カメ棺墓	?	?	?	?	?	?	壺	高坏の坏部	?	古墳前期前葉?	無し		
9号カメ棺墓	75	50	10	70	30	甕	壺	壺・小型丸底壺	N46° E	弥生後期終末～古墳初頭	無し		
10号カメ棺墓	56	56	50	35	33	鉢	壺		N18° E	弥生後期終末～古墳初頭	無し		
11号カメ棺墓	55	55	12	?	?	?	壺		N48° E	古墳前期前葉?	無し		
12号カメ棺墓	92	55	35	65	33	鉢	壺		N58° E	弥生後期後葉	無し	壺の口縁部、意図的とした土器片、中期土器底部	
13号カメ棺墓	65	53	36	45	32	鉢	壺		N99° E	弥生後期終末～古墳初頭	無し	鉢の口縁部	

6一括取り上げ遺物(第79、80、81、82、83図)

宮苑井ノ口遺跡は現水田面下の砂質土層内に遺物が出土するが、後世の耕作等による攪乱で遺物が原位置を保っていないものが多く、遺構内の出土以外は一括して取り上げを行った。

第79図1～2は縄文式土器片である。1の口縁部は器壁の薄い凹線文系の土器である。後期初頭に位置付けられる。2の口縁部は外面に刺突文が施文されている。3～6は下城式土器に相当する。3は口唇部外側と口縁部下の断面三角形の突帯には刻み目が施されている。5、6には刻み目はない。6の口径は27cm、胴部最大径で26cmを測る。

7～13は強く屈折し、口縁部の器壁は肥厚している。胴部の張りは殆どなく、厚い平底部へ続く甕形土器である。表面は縦の刷毛目、内面は刷毛撫で調整している。7～11は摘み上げ口縁部を持つ甕である。7は口径17.8cm、8は口径29cmを測る。9は口径25.6cm、胴部最大径で24cm、12は口径23.4cm、胴部最大径で24.8cmを測る。13は口径23cm、胴部最大径で20.4cmを測る。

第80図1～3は撥先状の口縁部を持つ高坏である。表裏撫で調整されている。1は口径30.8cm、2は口径21.8cmを測る。3は口径30cmを測り、内面にはヘラ磨きの痕跡。表面には赤色顔料を塗っている。脚部の表面にも赤色顔料を塗っており、同一個体の可能性が高い。4は高坏の坏部である。

5は壺の肩部～胴部である。「M」字状の突帯を四条施している。最大径は35.2cmで表面はヘラ磨き、内面は撫で調整し、部分的に指押さえの圧痕。

6～7は蓋であろう。表面は刷毛目、内面は撫で調整し、部分的に指押さえの圧痕。6は口径31.4cmで内面に煤が付着している。7の器高はやや高く、口径24.8cmを測る。

8～19は器壁の厚い平底部である。13～19は心持ち上げ底状を呈する。表面は縦の刷毛目、内面は撫で調整しているものが多い。底径は4.4～6.6cmに納まるが、10は8.4cm、11は10cmを測る。9の表裏には赤色顔料が塗布されている。

第81図1は壺の胴部の破片である。表面に五条の断面三角形の突帯が巡っている。内面には一部に赤色顔料が塗布されている。2は三条の櫛描波状文を施す二重口縁部である。口径14.5cmを測る。

3～7は外反する甕の口縁部である。3は口径29.2cmを測り、頸部に断面三角形の突帯が巡っている。表裏は赤色顔料が塗布されている。4の小型壺は口径10.6cmで胴部最大径14cmと張りがない。5は口径16cm、6は口径16cm、7は口径14cmである。

8、9は高坏の坏部、10～13は脚部である。12の脚部径は8.4cm、13の脚部径は12cm。

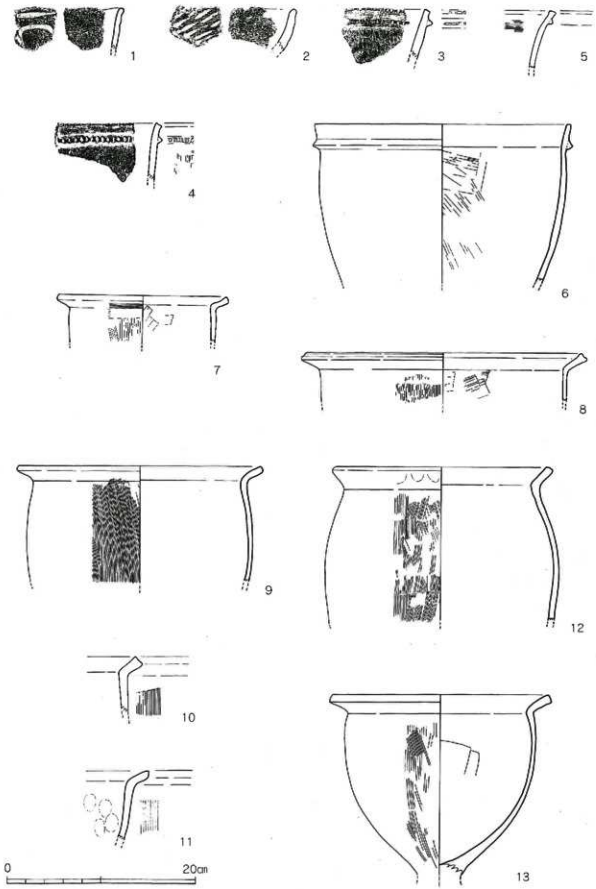
14～16は高台付鉢の脚部である。15の脚部径は11.2cm、16の脚部径は11.2cmを測る。

17は壺の胴部～丸底部にかけての破片である。やや長胴であり、胴部最大径は27cmで胴中央部上半には斜め刻目を施す突帯が巡っている。底部の器壁はやや厚い。表面は刷毛目、内面は撫で調整している。

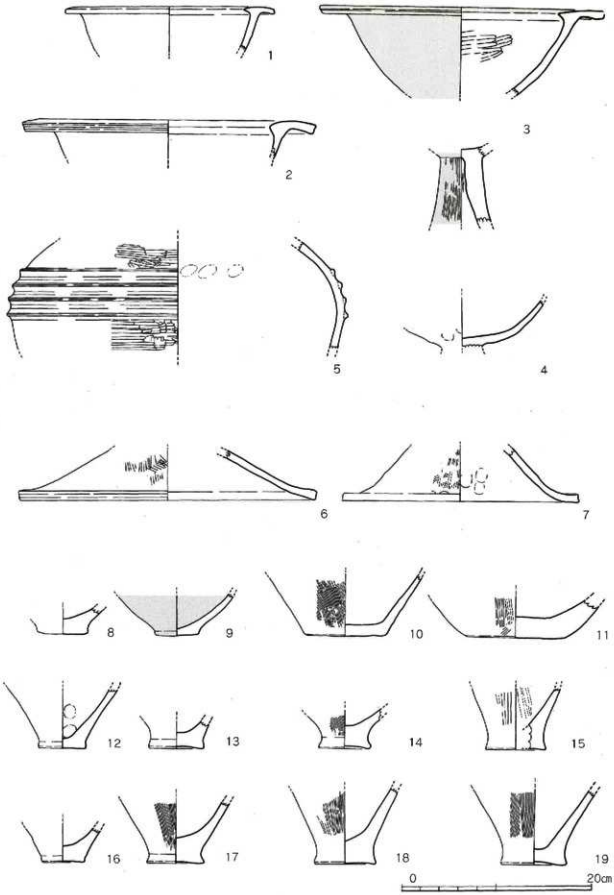
第82図1～2は心持ち内湾する鉢の口縁部の破片である。1は口径15.2cmで頸部に一条の摘み上げ痕の付く断面三角形の突帯が巡っている。2は口径10cm。3は心持ち内湾する口径12cmの口縁部で、胴部上半の最大径は13.5cmである。表面は刷毛目、内面は撫で調整し、口縁内側に指押さえの痕跡。4は口縁部を欠損した小型で丸底の壺である。胴部中央で胴径9cm、表面は刷毛目、内面は撫で調整。

5～7は表裏に赤色顔料が塗布された土器である。5は高坏の脚部のようで、脚端に「c」の字状の刺突文が施文されている。6は鉢の口縁部で、口縁直下に豆粒状の粘土粒を貼付け、その中央部を櫛に押さえて意匠化している。7は断面三角形の突帯文を巡らし、突帯下に6と同様の粘土粒を貼付けている。胎土は灰白色を呈する洗練されたものである。

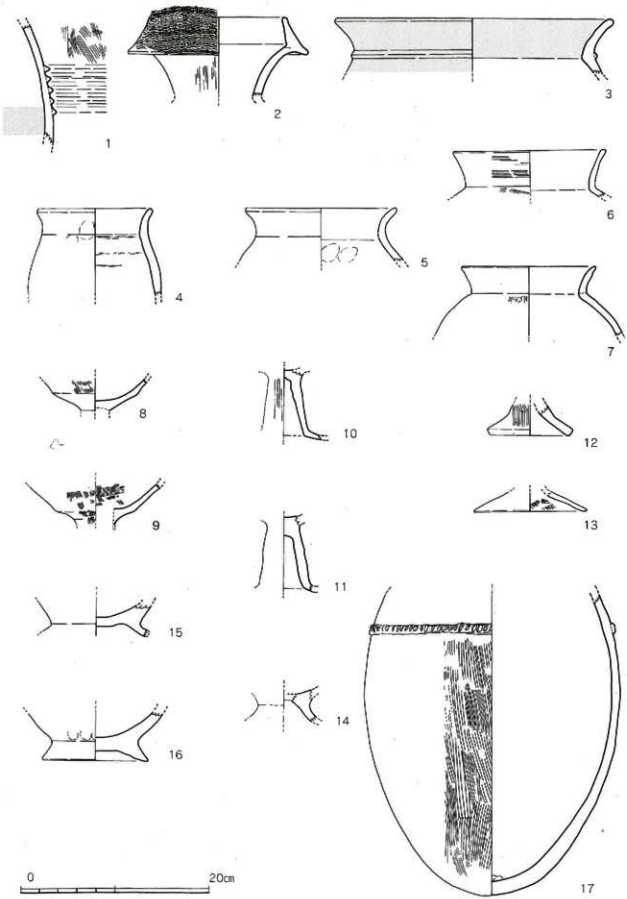
8～11は口縁部から丸く緩やかな丸底にいたる鉢である。8は口径12cmで全面に赤色顔料を塗布している。9は口径11.6cmで器高5.6cm。10は口径13cmで器高5.4cm。11は口径11.1cmで器高4.2＋αcm。表面は刷毛目を一部残すものもあるが、表裏とも撫で調整され、底部外側や口縁内側に指押さえの痕跡を残すものもある。



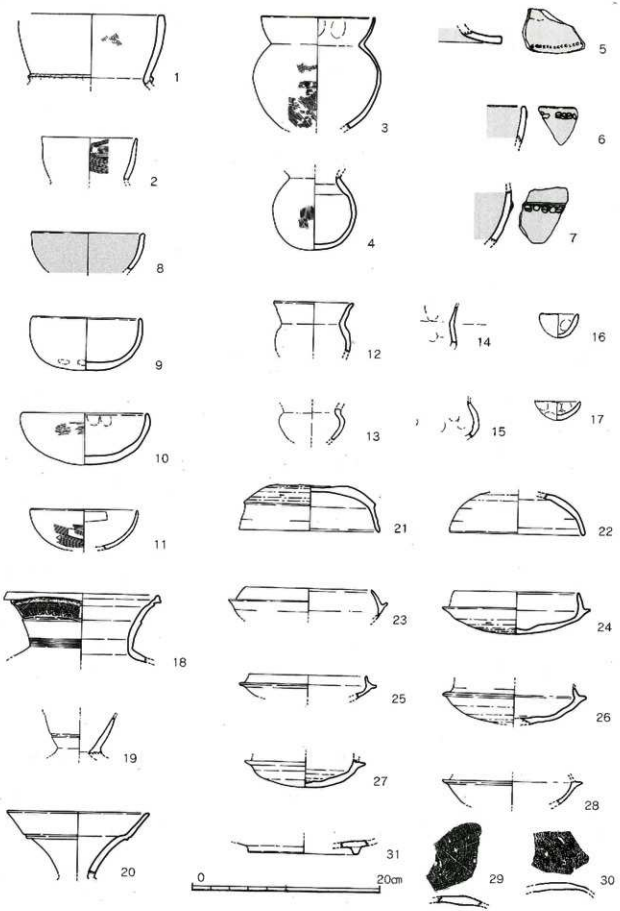
第79図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4）



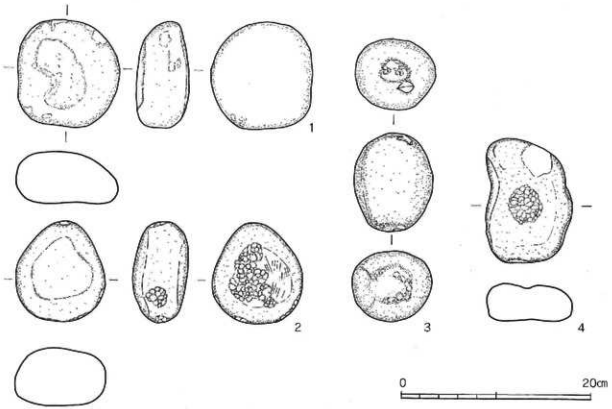
第80図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4）



第81図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4）



第82図　宮苑井ノ口遺跡出土土器実測図（1/4）



第83図　宮苑井ノ口遺跡出土石器実測図（1/4）

12～15は小型丸底壺であろう。12は口径8.4cmで胴部最大径は8cm。13は胴部上半で最大径7cm。14、15の内側には指押さえの痕跡を残す。

16、17は手捏ねのミニチュア土器である。16は口径3.8cm、器高は2.5cm。17は口径4.8cm、器高は2cm。

18～31は須恵器である。18は外反する甕の口縁部である。口唇部は三角状に肥厚し、口縁下に二条の沈線を巡らしている。沈線間には櫛描波状文を施す。口径15.8cmを測る。19は提瓶の口縁部である。口縁下に一条の沈線が巡る。20は鏡の口縁部である。口縁部は段を持って二重に外に大きく開き、口縁下の変化点に一条の沈線が巡っている。口径14.8cm。21、22は須恵器の坏蓋で、21の口唇は段状に尖り、回転横撫での口縁部と回転ヘラ削りの天井部の境にも段が付く。口径14.8cm、器高4.9cm。22は丸い天井部付近は回転ヘラ削りで口径14cmを測る。23～28は坏身である。23は口径13.2cmで口唇部の内側に段を持って尖る。24は丸い底部付近は回転ヘラ削りで口径13cm、器高4.5cmを測る。29、30は回転ヘラ削りの坏にヘラ記号を施している。31は断面「コ」の字状の高台を付けた須恵器である。底径は11.6cm。

第83図1～4は拳大の河原石を利用した安山岩製の磨石と敲石の類である。1、2は表裏面、側面にもに磨り跡や敲打痕を残している。1は長さ11cm、幅10.8cm、厚さ5.2cmで重さは1012.5gである。2は長さ10.4cm、幅9.4cm、厚さ5.9cmで重さは829.4gである。3は卵形をした河原石の敲石である。両端に敲打した跡が顕著に残る。長さ10.2cm、幅8.2cm、厚さ7.3cmで重さは892.5gである。4は河原石の窪み石である。表裏面に敲打した跡が顕著に残る。長さ12.9cm、幅8.8cm、厚さ3.3cmで重さは5719gである。

第５章　宮苑井ノ口遺跡出土赤色顔料の分析

宮苑井ノ口遺跡（弥生時代後期～古墳時代前期）より分析のために持ち込まれた赤色顔料は次の３点である。

○２号カメ棺内部採取

○カメ棺付近の赤色顔料分布域①

○カメ棺付近の赤色顔料分布域②

２号カメ棺内部の赤色顔料には多量の落ち込み土が混じっており、その中の赤色の発色が強い部分を採取し分析した。分布域①及び②は、付近の遺構検出面で赤色の発色が認められる部分を手スコで表土ごと採取したものである。それぞれ赤色の発色が強い部分を採取し分析した。なお、比較のために分布域②の赤色の発色がない部分も採取し分析した。従って、分析試料は４点である。

試料と分析

分析試料は次のとおりである。

No.1－２号カメ棺内部採取試料

No.2－カメ棺付近赤色顔料分布域①

No.3－カメ棺付近赤色顔料分布域②

No.4－カメ棺付近赤色顔料分布域②の上部分

各試料はメノウ乳鉢で摺り潰し、粉末として蛍光X線分析とX線回折分析を行った。各装置と分析条件は次のとおりである。

蛍光X線分析

フィリップス製：PW2400LSII

管　　球：Sc管球

出　　力：60KV、40mA

検 出 器：シンチレーション検出器、ガスフロー検出器

X線回折分析

島 津 製：XRD-6000

管　　球：Cu管球

出　　力：40KV、30mA

検 出 器：シンチレーション検出器

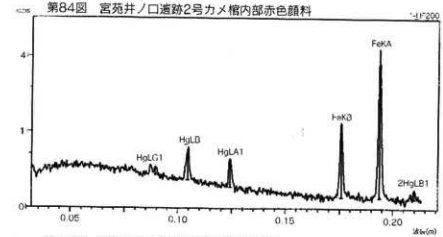
結果

弥生時代後期頃に使用されていた赤色顔料としては、ベンガラ（Fe_2O_3）と水銀朱（HgS）の２種類が考えられる。蛍光X線分析では、いずれの試料からも鉄が検出され、No.1からは他に水銀が検出された。また、いずれからも鉛は検出されなかった。X線回折分析では、No.1～No.3でベンガラ（ヘマタイト：Fe_2O_3）を同定でき、No.4ではできなかった。また、No.1からは水銀朱の同定はできなかった。

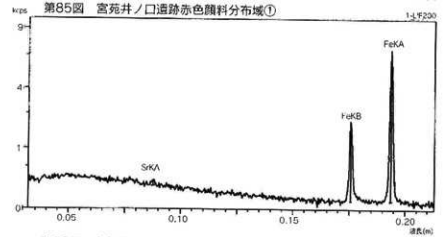
結論として、No.1～No.3にはベンガラが含まれている。No.1では水銀朱の同定はできなかったが、X線回折装置の分解能が低く、蛍光X線分析で水銀が検出されていることなどを勘案すると水銀朱の存在の可能性を否定できない。

蛍光X線分析チャート図

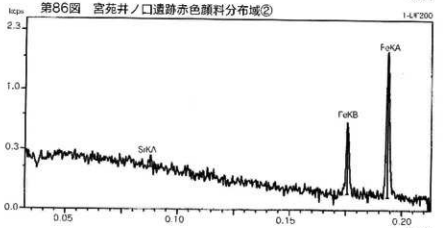
第84図　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺内部赤色顔料



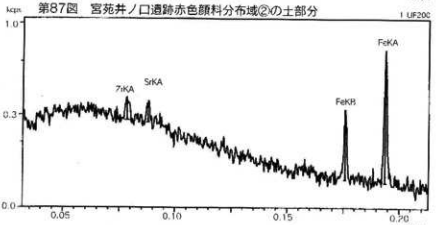
第85図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域①



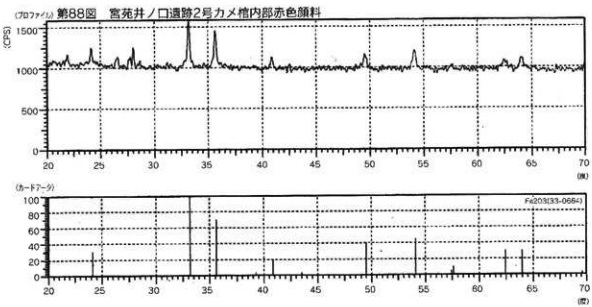
第86図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域②

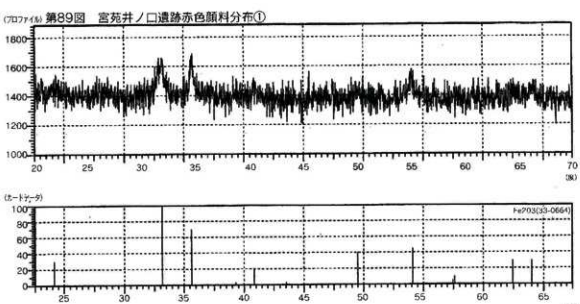


第87図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域②の土部分

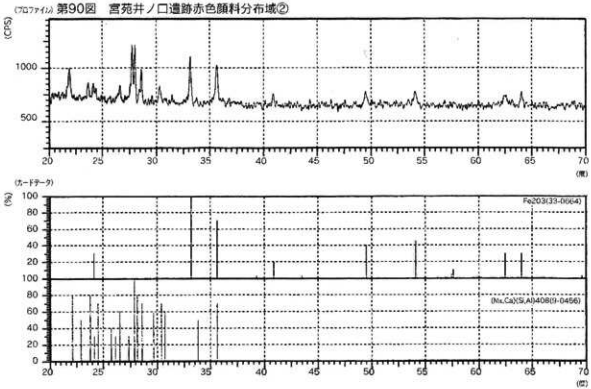


X線回析分析チャート図

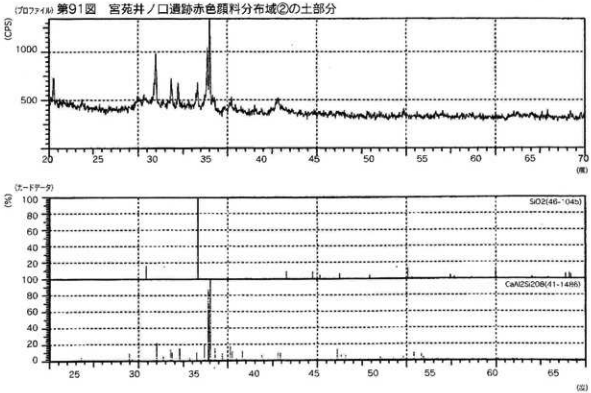




(プロファイル) 第90図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域②



(プロファイル) 第91図　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域②の土部分



第6章　総　　括

宮苑井ノ口遺跡の小児用カメ棺墓群について

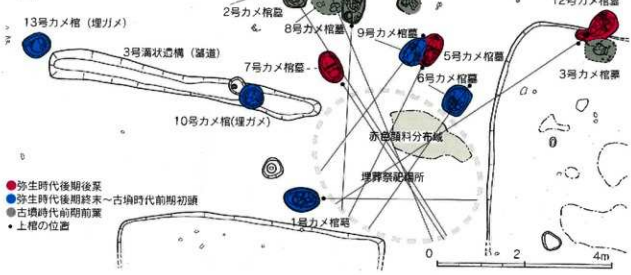
宮苑井ノ口遺跡の弥生後期～古墳時代前期の集落展開範囲を推察してみると、当該調査区を中心として、東方は地形がやや低くなっており、試掘調査でも遺物の出土が皆無であることから、集落の東方への展開は考え難い。また同様に、試掘調査の結果から推察して、西方への延びも殆どないと見なしても良い。つまり、遺跡は調査区をほぼ中心として、南方、北方に展開していくものと推察できそうである。遺跡の展開が予想される一帯は、周辺部よりも心持ち標高が高く、北側の丘陵から南方に派生した舌状の微高地を形成していることが判る。

小児用カメ棺墓の位置と構造

調査区は県道建設予定地の範囲内に限られたものであるが、調査区の南東には、今回発見された竪穴住居跡の殆ど全てがかかっており、この付近が竪穴住居の展開する集落跡の北の限界である可能性が高いと言えそうである。この推測が当を得たものであれば、東西14m、南北6mの範囲内で検出された13基の小児用カメ棺墓地は、集落跡の北端部に形成されたものと考えられる。

これらのカメ棺は、全て亜、甕、鉢等の合わせ口である。カメ棺の長軸をみると、最も長いもので9号カメ棺の70cm、最も短いもので10号カメ棺の35cmを測り、測定可能な10基のカメ棺長を平均すると57.6cmを測る。また、埋ガメ状の10号、13号を除いてみると、最も長いもので9号カメ棺の70cm、最も短いもので2号カメ棺の52cmであり、8基の平均長は62cmを測る。

ところで、栄養状態の良い現代人の乳幼児の平均身長とカメ棺長を単純に比較することはできないが、参考にすることは可能である。現在、新生児の平均身長は、生後0才児で約50cm、3ヶ月児で約65cm、6ヶ月児で約70cmである。10基のカメ棺及び8基のカメ棺の平均長である57.6～62cmの長さを考慮すると、少なくても、カメ棺墓は現代人の生後0才児～3ヶ月児を目安とし、弥生～古墳時代人はもう少し時間幅を持たせたところの小児用である確率は極めて高いと推察できそうである。弥生～古墳時代の間引きはさておき、現在でも、生後1年未満の乳幼児の死亡確率が最も高いことは比較検討の傍証となるであろう。



第92図　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓配置図(1/80)

竪穴住居跡のすぐ側に、成人用の墓地を伴うことなく、小児用のカメ棺だけで形成された集団墓地は、死亡した小児の特殊な取扱いを考える上で示唆に富むものがある。

今回発見された13基の小児用のカメ棺墓群は、より古い12号カメ棺→新しい3号カメ棺という、遺構が上・下に位置し、切り合い関係が明瞭に認識できるものもあるが、例えば、2号カメ棺・8号カメ棺・4号カメ棺のように等間隔に並んだような出土状態をはじめ、5号カメ棺→9号カメ棺のように、遺構の切り合い関係が不明瞭ではあるが、隣のカメ棺を侵食しない、カメ棺遺構の構築が認識できた。これらは、隣接するカメ棺が壊されていないことから判断して、殆ど同時に埋葬されたものか、先例の記憶に新しい頃か、先に埋めたカメ棺墓の位置が、マウンド等により認識できたものか、カメ棺墓に何らかの墓標があり、その位置が明瞭であったか、の何れかであることを暗示している。

さて、13基の小児用のカメ棺墓群は、弥生後期後葉～古墳時代前期前葉の時期に納まる。これらは、殆ど全てが合わせ口のカメ棺であり、壺形土器の二重口縁部を打ち欠いて落とし、胴部を互いに合わせたものや、二重口縁部を打ち欠いて落とした壺の胴部に、鉢形土器を被せたものなどバリエーションに富み、上棺・下棺がやや斜めに位置して埋葬されているものもあるが、大部分がほぼ水平に近く、上棺・下棺をその重なり具合でしか指摘できないものが殆どであった。

カメ棺墓の配置と赤色顔料の分布する小空間

カメ棺墓は東西14m、南北6mの範囲内に分布しているが、個々の明確な企画性は把握できない。そこで、合わせ口カメ棺の主軸、つまり長軸方向をみると、1号カメ棺は東―西、2号・7号カメ棺は北西―南東、4号・6号カメ棺は北―南、5号・9号・12号カメ棺は北東―南西と向いており、そこには何らかの共通性を指摘できる様相である。因みに、上記したカメ棺主軸を延長してみると、1号、7号、9号、5号、6号カメ棺で囲まれた直径約3.5mの円形の小空間に、カメ棺主軸の延長線が集約される傾向があり、この小空間がカメ棺墓群の中心部と推察できそうである。

第93図　宮苑井ノ口遺跡小児用カメ棺墓

ちなみに、カメ棺の上棺と下棺が明瞭でカメ棺主軸を延長した8基の内、5基が上棺を赤色顔料が分布した円形の小空間に向けていた。埋葬と頭位との関係が引渡されていると見なすことができる。

視点を変えると、カメ棺墓はこの小空間から放射状に、かつ半円状に分布した状態とも把握でき、また別の見方によると、小空間を中心にして、これに近い一群と、遠い一群との二重に配置された様相と見ることもできそうである。これについては、後述するように、カメ棺の編年も考慮してみる必要がある。

ところで、葬送の一環としての、カメ棺への加工製作や死者を納棺する場所はどこで行われていたのであろうか。カメ棺は二重口縁の壷、鉢、甕などが使用されているが、上器には炭化物の付着したものもあり、日常生活に使用していた土器を転用したものと考えてよい。

2号カメ棺は二重口縁の壷の胴部を二つ合わせた棺であるが、中の土壌にはベンガラと水銀朱の2種類の赤色顔料が少量遺存していた。不用な口縁部は、二つとも打ち欠いて取り除き、上棺の底部の傍に二つ並べて安置していた。4号カメ棺は、二重口縁部を打ち欠いて取り外し、上棺の底部の傍に安置し、打ち欠きに使われたと思われる拳大の二つの円礫も並べて安置していた。5号カメ棺も二重口縁部を打ち欠いて取り外し、上棺と下棺の底部にそれぞれ破片を台のように安置していた。12号カメ棺の下棺は、二重口縁部を打ち欠いて取り外し、口縁部の破片を下棺の側辺に安置していた。また、上棺の底部近くには墓坑の拡張部があり、頸部付近の土器片が細かく割られて敷き詰められていた。興味深いことに、これらの中の4点は、面取りされた上棺と接合している。上棺の合わせ部を細かく打ち割り、面取りしたときの土器片を意図的に埋置したものである。また、上棺の二重口縁部は12号カメ棺墓の外の周辺部で発見され、頸部付近の破片と接合している。一方、1号カメ棺は壷と鉢との合わせ口であるが、合わせ口付近は、別の二つの壷を割り、その破片で被覆していた。9号カメ棺も壷と甕との合わせ口であるが、合わせ口付近は、別の二重口縁壷を割り、その破片で被覆していた。

ところで、弥生後期後様～古墳時代前期前葉の小児用カメ棺葬に関する類例として、大分市の貞来中学校遺跡[8]を上げることができる。貞来中学校遺跡の2号棺、3号棺は弥生後期後様の所産であるが、打ち欠いた口縁部をカメ棺の下の押さえに使用し、河原礫も数点同じように配置されており、宮苑井ノ口遺跡の4号・5号カメ棺と出土状態が酷似していた。

以上のことから次のように解釈できそうである。宮苑井ノ口遺跡では、小児用カメ棺葬の場合、現地、つまり小児用の集団墓地で墓穴を掘り、2号・4号・5号・12号で顕著な様に、日常生活で使用した壷、甕、鉢を合わせ口カメ棺用に転用加工し、2号で顕著なようにベンガラや水銀朱を塗布し、納棺の後に、不要な口縁部や加工具とした拳大の石をカメ棺の傍に一緒に埋納安置し、1号・9号のように、合わせ口部を別の土器片で被覆する行為が行われたことになる。この様な一連の葬送行為は現地、つまり墓地で行われていたことが認識できるのである。

さて上述したように、カメ棺墓の中心部は、何もない狭い小空間である。小空間は直径約3.5m程の狭い円形の空間であるが、東西約2m、南北約1mの範囲に赤色顔料(ベンガラ)の分布している所があり、カメ棺墓葬との有機的な関係が留意された。赤色顔料(ベンガラ)の分布する小空間の機能を考えると、埋葬用にカメ棺を加工し、納棺し、何らかの葬送儀礼の執り行われた場所とみるのが最も自然で理解し易い解釈である。赤色顔料分析の結果、2号カメ棺内の土壌には、同じような赤色顔料(ベンガラと水銀朱の2種類)が検出されており、この小空間で、赤色顔料を死者に塗布する儀式が行われたことを傍証している。赤色顔料の分布する小空間から出土したカメ棺と同じ時代の小型丸底壷と高坏も葬送祭祀にまつわる土器と推察できそうである。

換言すると、小児のカメ棺埋葬に伴う何らかの葬送儀式がこの場所で施行されたと推察されるのである。

墓道と廃棄竪穴

さて一方、この赤色顔料の分布する小空間の西側から、用途不明の3号溝状遺構が西方へ直線的に延び、10号カメ棺と切り合い13号カメ棺に接触している。3号溝状遺構は、溝の長さが6.5m で幅約40～70cmを測る。確認面からの深さは約20cm前後で断面は「U」字形を呈している。色調は不明瞭であり溝の機能ではなさそうである。この溝状遺構から出土した上器は、胴部に太い斜め刻目で断面「コ」の字状突帯が施文された丸底の壷

ちなみに、カメ棺の上棺と下棺が明瞭でカメ棺主軸を延長した8基の内、5基が上棺を赤色顔料が分布した円形の小空間に向けていた。埋葬と頭位との関係が明瞭されていると見なすことができる。

視点を変えると、カメ棺墓はこの小空間から放射状に、かつ半円状に分布した状態とも把握でき、また別の見方によると、小空間を中心にして、これに近い一群と、遠い一群との二重に配置された様相と見ることもできそうである。これについては、後述するように、カメ棺の編年も考慮してみる必要がある。

ところで、葬送の一環としての、カメ棺への加工製作や死者を納棺する場所はどこで行われていたのであろうか。カメ棺は二重口縁の壷、鉢、甕などが使用されているが、上器には炭化物の付着したものもあり、日常生活に使用していた土器を転用したものと考えてよい。

2号カメ棺は二重口縁の壷の胴部を二つ合わせた棺であるが、中の土壌にはベンガラと水銀朱の2種類の赤色顔料が少量遺存していた。不用な口縁部は、二つとも打ち欠いて取り除き、上棺の底部の傍に二つ並べて安置していた。4号カメ棺は、二重口縁部を打ち欠いて取り外し、上棺の底部の傍に安置し、打ち欠きに使われたと思われる拳大の二つの円礫も並べて安置していた。5号カメ棺も二重口縁部を打ち欠いて取り外し、上棺と下棺の底部にそれぞれ破片を台のように安置していた。12号カメ棺の下棺は、二重口縁部を打ち欠いて取り外し、口縁部の破片を下棺の側辺に安置していた。また、上棺の底部近くには墓坑の拡張部があり、頸部付近の土器片が細かく割られて敷き詰められていた。興味深いことに、これらの中の4点は、面取りされた上棺と接合している。上棺の合わせ部を細かく打ち割り、面取りしたときの土器片を意図的に埋置したものである。また、上棺の二重口縁部は12号カメ棺墓の外の周辺部で発見され、頸部付近の破片と接合している。一方、1号カメ棺は壷と鉢との合わせ口であるが、合わせ口付近は、別の二つの壷を割り、その破片で被覆していた。9号カメ棺も壷と甕との合わせ口であるが、合わせ口付近は、別の二重口縁壷を割り、その破片で被覆していた。

ところで、弥生後期後様～古墳時代前期前葉の小児用カメ棺葬に関する類例として、大分市の貞来中学校遺跡[8]を上げることができる。貞来中学校遺跡の2号棺、3号棺は弥生後期後様の所産であるが、打ち欠いた口縁部をカメ棺の下の押さえに使用し、河原礫も数点同じように配置されており、宮苑井ノ口遺跡の4号・5号カメ棺と出土状態が酷似していた。

以上のことから次のように解釈できそうである。宮苑井ノ口遺跡では、小児用カメ棺葬の場合、現地、つまり小児用の集団墓地で墓穴を掘り、2号・4号・5号・12号で顕著な様に、日常生活で使用した壷、甕、鉢を合わせ口カメ棺用に転用加工し、2号で顕著なようにベンガラや水銀朱を塗布し、納棺の後に、不要な口縁部や加工具とした拳大の石をカメ棺の傍に一緒に埋納安置し、1号・9号のように、合わせ口部を別の土器片で被覆する行為が行われたことになる。この様な一連の葬送行為は現地、つまり墓地で行われていたことが認識できるのである。

さて上述したように、カメ棺墓の中心部は、何もない狭い小空間である。小空間は直径約3.5m程の狭い円形の空間であるが、東西約2m、南北約1mの範囲に赤色顔料(ベンガラ)の分布している所があり、カメ棺墓葬との有機的な関係が留意された。赤色顔料(ベンガラ)の分布する小空間の機能を考えると、埋葬用にカメ棺を加工し、納棺し、何らかの葬送儀礼の執り行われた場所とみるのが最も自然で理解し易い解釈である。赤色顔料分析の結果、2号カメ棺内の土壌には、同じような赤色顔料(ベンガラと水銀朱の2種類)が検出されており、この小空間で、赤色顔料を死者に塗布する儀式が行われたことを傍証している。赤色顔料の分布する小空間から出土したカメ棺と同じ時代の小型丸底壷と高坏も葬送祭祀にまつわる土器と推察できそうである。

換言すると、小児のカメ棺埋葬に伴う何らかの葬送儀式がこの場所で施行されたと推察されるのである。

墓道と廃棄竪穴

さて一方、この赤色顔料の分布する小空間の西側から、用途不明の3号溝状遺構が西方へ直線的に延び、10号カメ棺と切り合い13号カメ棺に接触している。3号溝状遺構は、溝の長さが6.5m で幅約40～70cmを測る。確認面からの深さは約20cm前後で断面は「U」字形を呈している。色調は不明瞭であり溝の機能ではなさそうである。この溝状遺構から出土した土器は、胴部に太い斜め刻目で断面「コ」の字状突帯が施文された丸底の壷

形土器であり、カメ棺群と時期を同じくしている。

この3号溝状遺構の西端には13号カメ棺、東側には10号カメ棺が検出されている。この二つのカメ棺は、その他の11基のカメ棺と埋葬方法が異なっており、合わせ口カメ棺は、本体をすっぽりと覆う形態であり、縦に立った埋ガメの様相を呈していた。図みに、計測可能な8基の合わせ口カメ棺の平均長は62cmであるが、10号カメ棺は35cm、13号カメ棺は45cmと極端に短い。

言い換えれば、西方から3号溝状遺構を通過した、東の行止りが赤色顔料の分布する円形の小空間であり、溝状遺構は当時の小道の可能性を示唆している様相である。これが当を得たものであれば、赤色顔料の分布する小空間へ続く小道は、小児用カメ棺墓群の葬送祭祀を行う場所へと続く墓道を意味している。狭い墓道と円形空間という、柄鏡状の形態からなる葬送祭祀の空間を意識するように、墓道の中央に縦に埋められた10号カメ棺、13号カメ棺は、人が跨り、踏み付ける場所に意図的に埋置された埋ガメの様相を彷彿とさせるものがある。10号、13号カメ棺が、その形態や埋納の位置から埋ガメであるとすると、他の11基のカメ棺との相対的な棺長比較を考慮して、埋ガメ内には胎盤(エナ)を納めたものと推量することもできそうである。

民俗事例では、埋めた胎盤やこれを納めたエナ壺を、人が跨ぎ踏む踏むほど、その子は良く育つと言われており、家の戸口や土間の上がり口、便所の入り口、道の辻など、人の往来する場所が選地されている。胎盤(エナ)の上を最初に横切り、踏んだものをその子が一生恐れるため、エナを埋めた父親が最初に踏つけるという事例が多い。

ところで、3号溝状遺構の様な機能が不明な遺構が、総合的な検討結果、道の可能性として把握できた事例として、千歳村の鹿道原遺跡を掲げることができる。鹿道原遺跡では弓なりの溝状遺構の両側辺に沿って竪穴住居跡が、切り合い関係を重ねつつ、整然と並んで検出されており、単なる溝状遺構ではなく、集落内で侵すことの許されない、認知された公の道の可能性が極めて高いと推察できたのである。宮尾井ノ口遺跡の発掘状態を相対的に比較検討すると、鹿道原遺跡の道に似ている様相が窺えて興味深い。

さて次に、3号溝状遺構をさらに西方へ延長すると、6号竪穴に近づく。歪な隅丸の不定形をした竪穴遺構であり、長軸を西・東にとり、長径約4.6m、短径約2.5m、確認面から床面までは約20cmを測る。焼土や柱穴が顕著でなく竪穴住居跡とは考え難い。出土遺物は、他の竪穴出土資料と比較しても圧倒的に豊富であり、完形品に近いものも数多く投げ捨てられている。このことから、カメ棺群に伴う何らかの葬送祭祀の行事に使った土器の廃棄土坑と推察できる。出土土器はカメ棺の新しい時期に比定できそうである。6号竪穴(3号竪穴からも出土しているが)から出土した赤色顔料の塗布された釣鐘状の土器は何らかの祭祀を窺わせるものであり留意される。

カメ棺墓群の時期と分布

さて次に、カメ棺墓群の時期と分布について詳細に検討してみる。カメ棺は基本的には二重口縁の壺、甕、鉢が合わせ口棺として組み合わされているが、壺や甕の口縁部は入り口が狭いため、カメ棺用に加工されるときに意図的に打ち欠かれている。この様な一連の儀式は、墓地で行われるため、打ち欠いた口縁部がカメ棺墓内に安置される場合が多いが、中には全く欠損したままのものもあり、土器編年を考慮する際に、同じ要素で相対的に比較検討することが不可能であった。ここでは、二重口縁壺や甕の①口縁部の文様と形態、②頸部の浮文、③胴部突帯、④胴部の張り具合、⑤底部形態に注目し比較して先後関係を考えてみた。

古相の要素を残す壺形土器としては、5号カメ棺、7号カメ棺、12号カメ棺の壺がある。5号カメ棺は櫛描波状文を施文し、胴部に断面三角形の突帯を三条施文しており、頸部の一条突帯には勾玉状の浮文が付く。底部は丸底気味であるが平底を僅かに残す。また、7号カメ棺は胴部上半に断面三角形の突帯を三条施文しており、12号カメ棺は内側に倒れた口縁部に櫛描波状文を二条施文し、頸部のやや長い古相の様相を呈し、頸部一条突帯には勾玉状の浮文が付く。胴部上半に断面三角形の突帯を二条施文している。7号、12号カメ棺の底部は丸底気味のレンズ状を呈する。5号カメ棺、7号カメ棺、12号カメ棺を弥生後期後葉に編年できる。

次ぎに、6号カメ棺の壺は胴部に斜刻み目文を入れた「コ」の字状突帯を施文しているが、底部形態は丸底気味の平底を僅かに残すもので古相の要素を残している。1号カメ棺の壺は丸底気味であるが底部の器壁が厚い。

1号カメ棺の壷に伴出した甕の底部をみると、心持ち揚げ底例や小さな平底例がある。一方、埋ガメとした10号カメ棺、13号カメ棺の壷の口縁部は不明であるが、底部はやや厚みのある丸底気味であり、13号カメ棺の胴部には6号カメ棺と類似した斜刻み口文を入れた「コ」の字状突帯を施文している。9号カメ棺の二重口縁壷は櫛描波状文もなく、やや細く長胴である。底部は丸底気味のレンズ状を呈する。これに伴出する甕は長胴であり、頸部には上下撮み痕を残す突帯が巡っている。甕の底部は心持ち揚げ底である。9号カメ棺には小型丸底壷の破片が伴っていた。遺構の微妙な切り合い関係から、より古い5号カメ棺→新しい9号カメ棺という編年が成立している。6号カメ棺、1号カメ棺、10号カメ棺、13号カメ棺、9号カメ棺は弥生後期終末～古墳時代前期初頭に編年できる。

4号カメ棺の二重口縁壷は、櫛描波状文を三重に施文し、胴部には斜格子刻み口文を入れた「コ」の字状突帯を施し、底部は尖り気味の丸底である。2号カメ棺の2つの二重口縁壷は、櫛描波状文を三条施文している。片方の胴部は完形近く、太い斜刻み口文を入れた「コ」の字状突帯を施し、底部は器壁の薄い丸底である。2号カメ棺のもう一つの底部も器壁の薄い丸底である。底部は胴部の器壁と同じ厚さであり、新しい要素として把握できる。8号カメ棺には高杯の杯部が伴出しているが、この時期に納めることが出来そうである。3号カメ棺の二重口縁壷は、口縁部が外に開き、胴部が球形に張る特徴的なもので、いわゆる山陰系の壷形土器である。遺構の切り合い関係から、より古い12号カメ棺→新しい3号カメ棺という編年が成立している。8号カメ棺、4号カメ棺、2号カメ棺、3号カメ棺は古墳時代前期前葉に編年できる。

以上のように、新・旧のメルクマールとなる個々の要素を勘案し、伴出する資料を総合的に検討してみると、胴部のみで時期不詳な、11号を除いて、弥生時代後期後葉の5号・7号・12号→弥生後期終末～古墳時代初頭の6号・1号・10号・13号・9号→古墳時代前期前葉の8号・4号・2号・3号という遺構の編年が想定できる。

ところで、もう1度カメ棺墓の分布図をみて見よう。カメ棺の長軸は、赤色顔料が分布する円形の小空間に向けて配置されており、見方によっては、小空間から、放射状に弧状に一重～二重に分布している様相がある。この配置をカメ棺の編年に基づいて見ると次ぎの様になる。

古相のものから、時計回りにカメ棺の分布を見ると、赤色顔料の小空間を中心に、まず、弥生時代後期後葉の7号・5号・12号が分布する。次に、弥生後期終末～古墳時代初頭の1号・10号・13号・9号・6号を加えると、赤色顔料の小空間を、半円形状にあるいは「コ」の字状に囲むような、1号・10号・7号・9号・5号・6号という偶然とは言い難い弧状の配置が指摘できる。そして、古墳時代前期前葉の8号・2号・4号・3号という遺構がその外側に配列された様相となっている。時期不詳の11号も位置的には前期前葉の集団の中に入るのであろう。

カメ棺墓を時期毎に区分して見ると、それぞれは無計画に配置されているようにみえるが、時間を凝縮し、その推移を結果的に俯瞰すると、赤色顔料の分布する円形の小空間を中心にして、半円状とも馬蹄形状とも言えそうな全体的な配列が浮かび上がってくるのである。葬送祭祀の中心部を意識した、埋葬行為の結果の所産であると推察できよう。

以上のように、宮苑井ノ口遺跡の発掘調査で最も注目された、小児用カメ棺墓群の展開と深い係わりを持つと推察された赤色顔料の分布する小空間の機能について考察してみた。

(註)

1．坪根伸也編『賀来中学校遺跡』大分市賀来中学校プール移設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分市教育委員会　1992年
2．栗田勝弘編『鹿道原遺跡』発掘調査報告書　千歳村文化財調査報告書第Ⅶ集　千歳村教育委員会　2001年

写 真 図 版

1　賀来西遺跡空中写真(白丸)

2　賀来西遺跡1号竪穴検出状態(東から)

3　賀来西遺跡1号竪穴遺物出土状態(西から)

賀来西(5図1)

賀来西(5図2)

賀来西(5図4)

賀来西(5図5)

賀来西(5図6)

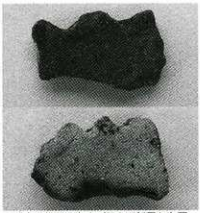
賀来西(5図7)

4　賀来西遺跡縄文土器

賀来西(5図8)

賀来西(5図11)

賀来西(5図12)


賀来西(5図13) 上／賀来西(5図14) 下

賀来西(5図15)

賀来西(5図16)

賀来西(5図17)

賀来西(5図18)

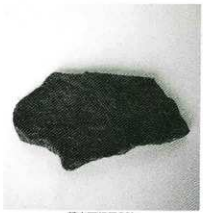
賀来西(5図19)

賀来西(5図21)

賀来西(5図22)

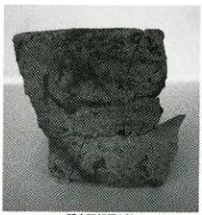
賀来西(5図24)

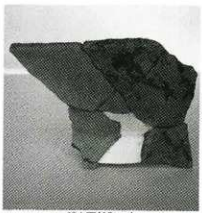
5　賀来西遺跡縄文土器


賀来西(5図30)

賀来西(6図1)

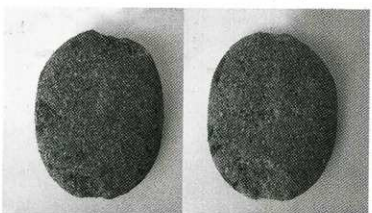
賀来西(6図3)


賀来西(6図10)

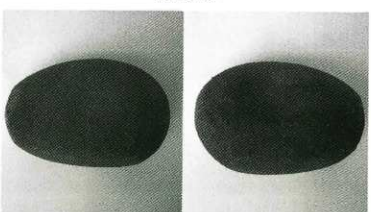

賀来西(6図11)

賀来西(6図13)

賀来西(6図15)


賀来西(7図2)

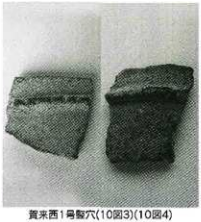
賀来西(8図1)


賀来西(7図5)

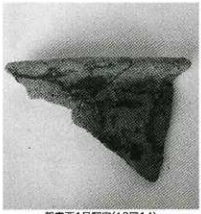
6　賀来西遺跡縄文土器・石器

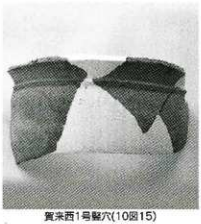
賀来西1号竪穴(10図1)

賀来西1号竪穴(10図2)


賀来西1号竪穴(10図3)(10図4)

賀来西1号竪穴(10図13)


賀来西1号竪穴(10図14)

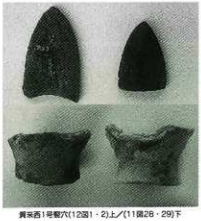

賀来西1号竪穴(10図15)

賀来西1号竪穴(11図17)

賀来西1号竪穴(11図18)

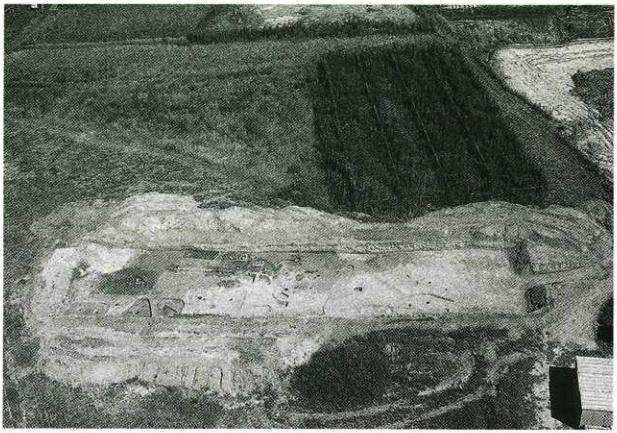
賀来西1号竪穴(11図19)

賀来西1号竪穴(11図20)


賀来西1号竪穴(12図1・2)上/(11図28・29)下

賀来西1号竪穴(12図35)

7　賀来西遺跡1号竪穴出土遺物

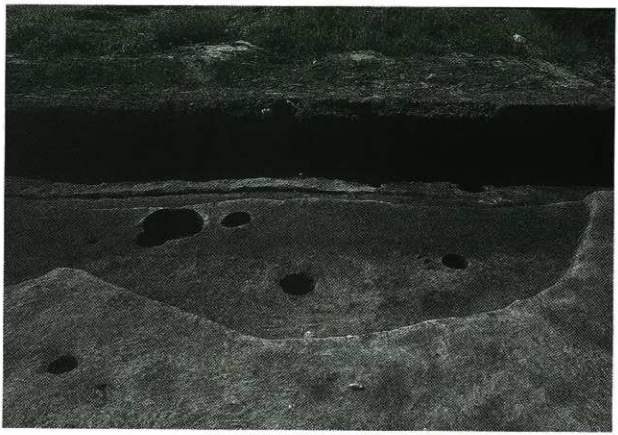


8　宮苑井ノ口遺跡空中写真(南から)

9　宮苑井ノ口遺跡発掘調査風景(東から)

10　宮苑井ノ口遺跡1号竪穴(東から)

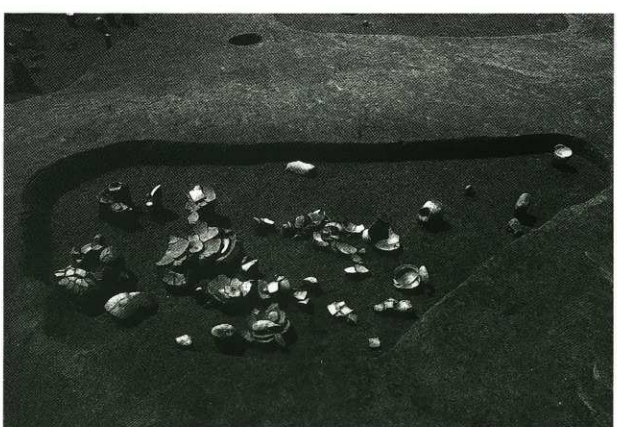
11　宮苑井ノ口遺跡2号竪穴(西から)



12　宮苑井ノ口遺跡3号竪穴(北から)

13　宮苑井ノ口遺跡4号竪穴(東から)

14　宮苑井ノ口遺跡5号竪穴(北から)



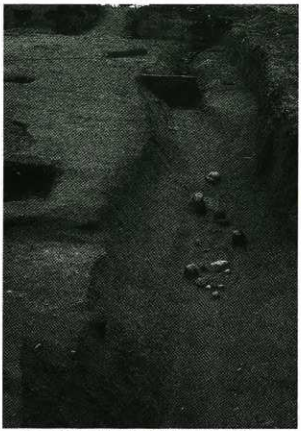
15　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴(北から)

16　宮苑井ノ口遺跡6号竪穴(東から)

17　宮苑井ノ口遺跡7号竪穴(北から)

18　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴(東から)

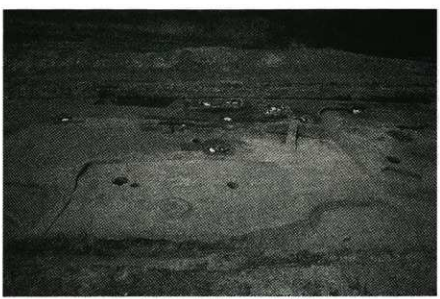
19　宮苑井ノ口遺跡3号、4号、5号土坑(東から)



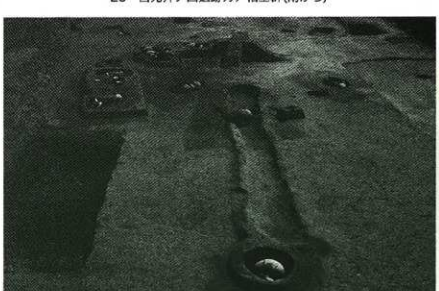
20　宮苑井ノ口遺跡1号溝状遺構(西から)

21　宮苑井ノ口遺跡3号溝状遺構(西から)

22　宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群(東から)



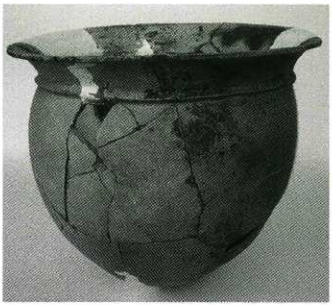
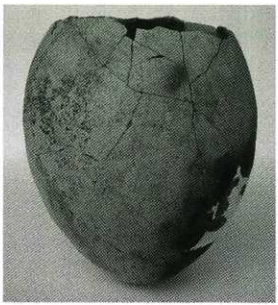
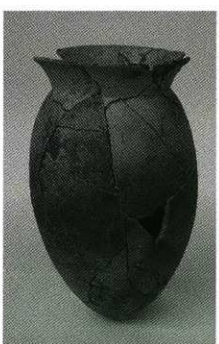
23　宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群(南から)



24　宮苑井ノ口遺跡カメ棺墓群(西から)

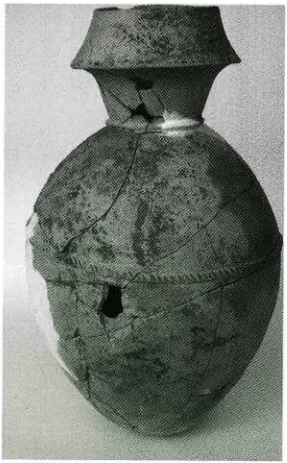
25　宮苑井ノ口遺跡赤色顔料分布域とカメ棺墓群(東から)

26　宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺墓(南から)

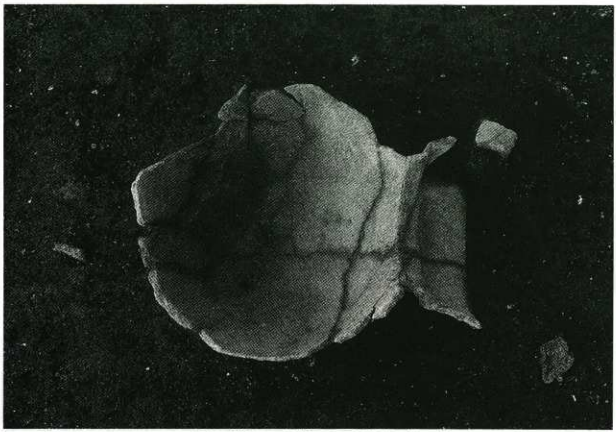




27　宮苑井ノ口遺跡1号カメ棺

28　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺墓(西から)



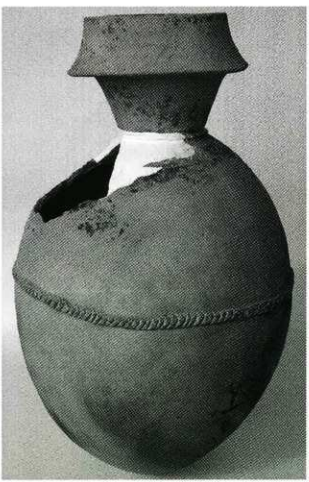
29　宮苑井ノ口遺跡2号カメ棺



30　宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺墓(南から)

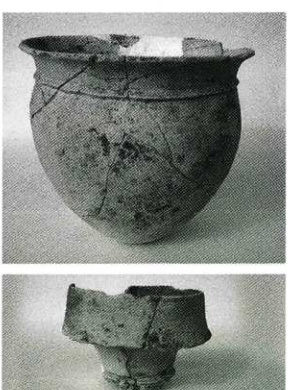
31　宮苑井ノ口遺跡3号カメ棺

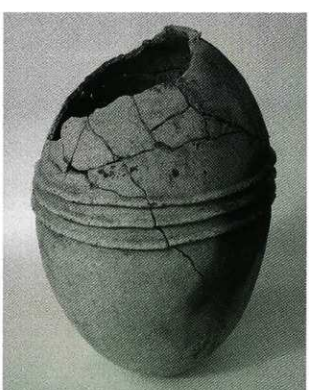
32　宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺墓(東から)



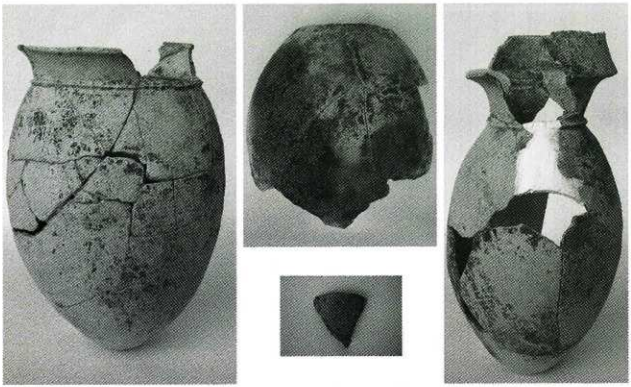
33　宮苑井ノ口遺跡4号カメ棺

34　宮苑井ノ口遺跡5号、9号カメ棺墓(西から)



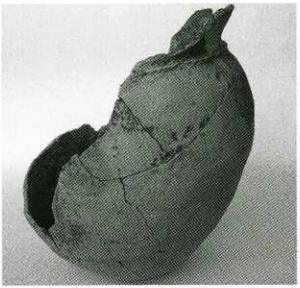


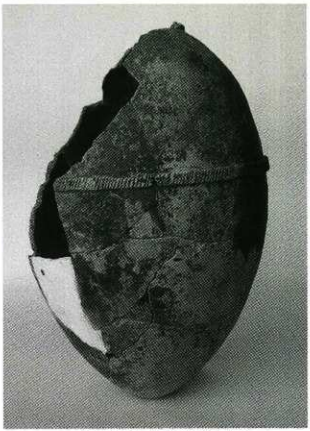
35　宮苑井ノ口遺跡5号カメ棺



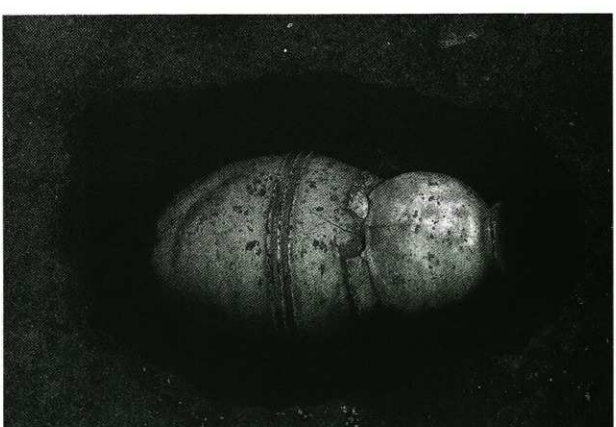
36　宮苑井ノ口遺跡9号カメ棺

37　宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺墓(西から)





38　宮苑井ノ口遺跡6号カメ棺



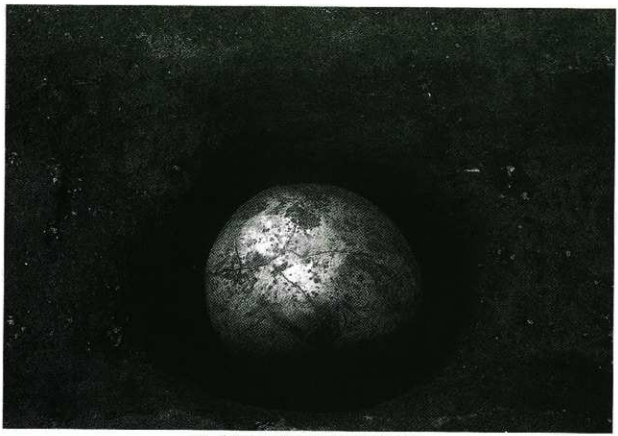
39　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺蓋(東から)

40　宮苑井ノ口遺跡7号カメ棺

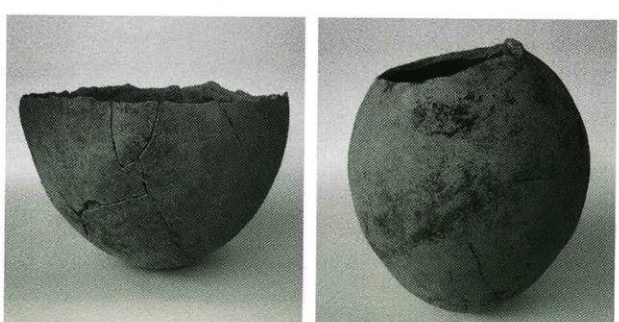
41　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺墓(西から)

42　宮苑井ノ口遺跡2号、8号、4号カメ棺墓(南から)

43　宮苑井ノ口遺跡8号カメ棺

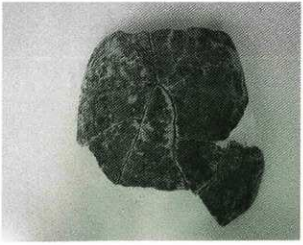


44　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺墓(北から)



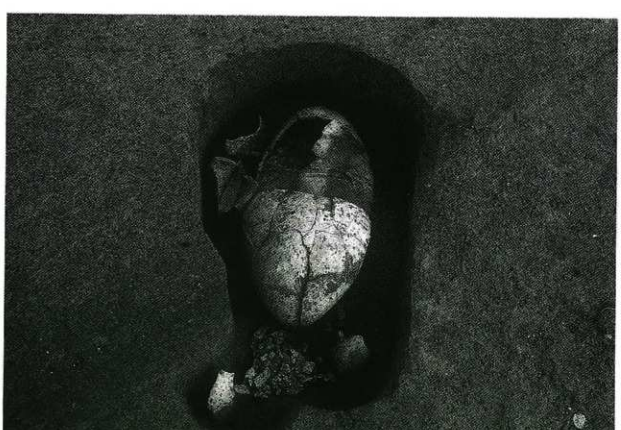
45　宮苑井ノ口遺跡10号カメ棺

46　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺墓(西から)

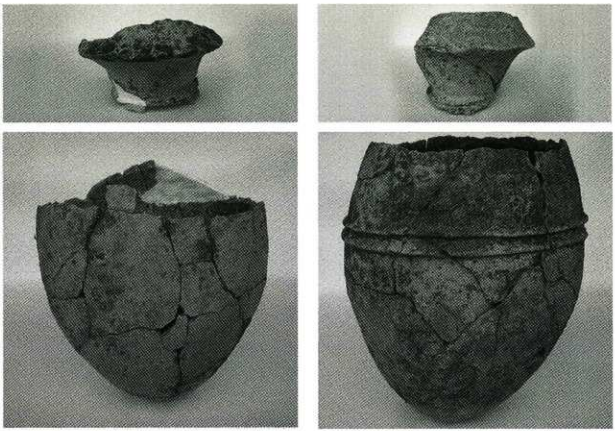


47　宮苑井ノ口遺跡11号カメ棺

48　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺墓(東から)

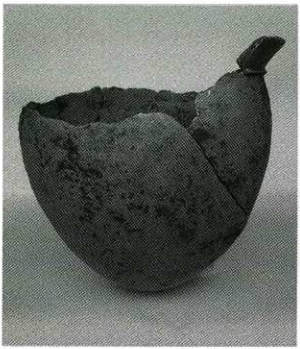
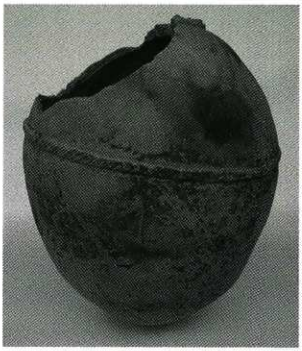


49　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺墓(南から)



50　宮苑井ノ口遺跡12号カメ棺

51　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺墓(南から)

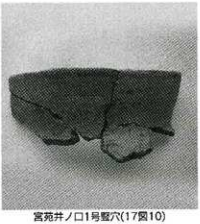
52　宮苑井ノ口遺跡13号カメ棺

53　宮苑井ノ口遺跡空中写真(北から)

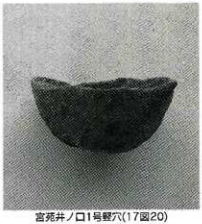
宮苑井ノ口1号竪穴(17図1)

宮苑井ノ口1号竪穴(17図2)

宮苑井ノ口1号竪穴(17図3)


宮苑井ノ口1号竪穴(17図10)

宮苑井ノ口1号竪穴(17図19)


宮苑井ノ口1号竪穴(17図20)

宮苑井ノ口1号竪穴(17図21)

宮苑井ノ口3号竪穴(21図9)

宮苑井ノ口3号竪穴(21図9-2)

宮苑井ノ口2号竪穴(19図7)

宮苑井ノ口3号竪穴(21図12)

宮苑井ノ口4号竪穴(23図7)

54　宮苑井ノ口遺跡1号、3号、4号竪穴出土遺物

宮苑井ノ口4号竪穴(23図8)

宮苑井ノ口6号竪穴(27図1)

宮苑井ノ口6号竪穴(27図2)

宮苑井ノ口6号竪穴(27図3)

宮苑井ノ口6号竪穴(27図5)

宮苑井ノ口6号竪穴(27図6)

宮苑井ノ口6号竪穴(27図7)

宮苑井ノ口6号竪穴(28図8)

宮苑井ノ口6号竪穴(28図9)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図16)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図17)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図18)

55　宮苑井ノ口遺跡4号、6号竪穴出土遺物

宮苑井ノ口6号竪穴(29図20)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図21)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図22)

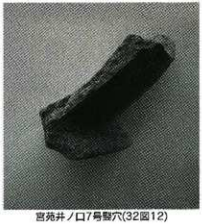
宮苑井ノ口6号竪穴(29図24)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図25)

宮苑井ノ口6号竪穴(29図25-2)

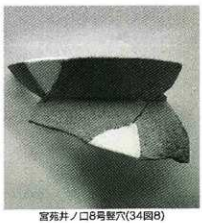
宮苑井ノ口6号竪穴(29図26)

宮苑井ノ口7号竪穴(32図11)

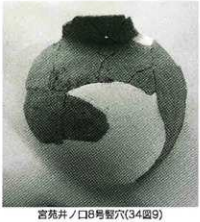

宮苑井ノ口7号竪穴(32図12)

宮苑井ノ口7号竪穴(32図15)

宮苑井ノ口7号竪穴(32図16)

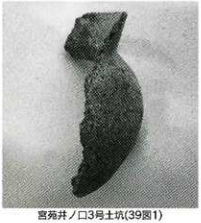

宮苑井ノ口8号竪穴(34図8)

56　宮苑井ノ口遺跡6号、7号、8号竪穴出土遺物


宮苑井ノ口8号竪穴(34図9)

宮苑井ノ口8号竪穴(34図10)

宮苑井ノ口8号竪穴(34図15)


宮苑井ノ口3号土坑(39図1)

宮苑井ノ口3号土坑(39図2)

宮苑井ノ口4号土坑(41図1)

宮苑井ノ口4号土坑(41図2)

宮苑井ノ口5号土坑(43図4)

宮苑井ノ口5号土坑(43図5)

宮苑井ノ口5号土坑(43図6)

宮苑井ノ口1号溝(47図3)

宮苑井ノ口1号溝(47図6)

57　宮苑井ノ口遺跡8号竪穴、3号・4号・5号土坑、1号溝　出土遺物

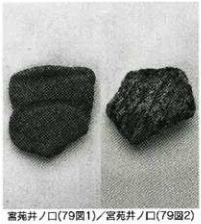
宮苑井ノ口2号溝(48図1)

宮苑井ノ口2号溝(48図2)

宮苑井ノ口3号溝(50図7)

宮苑井ノ口赤色顔料分布域(78図1)

宮苑井ノ口赤色顔料分布域(78図2)


宮苑井ノ口(79図1)／宮苑井ノ口(79図2)

宮苑井ノ口(79図4)

宮苑井ノ口(79図6)

宮苑井ノ口(79図9)

宮苑井ノ口(79図13)

宮苑井ノ口(80図2)

宮苑井ノ口(80図5)

58　宮苑井ノ口遺跡2号・3号溝、赤色顔料分布域等出土遺物

宮苑井ノ口(80図4)

宮苑井ノ口(80図7)

宮苑井ノ口(80図19)

宮苑井ノ口(81図1)

宮苑井ノ口(81図3)

宮苑井ノ口(81図10)

宮苑井ノ口(81図16)

宮苑井ノ口(81図17)

宮苑井ノ口(82図1)

宮苑井ノ口(82図3)

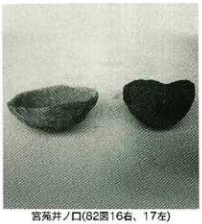
宮苑井ノ口(82図4)

宮苑井ノ口(82図6、7、5)

59　宮苑井ノ口遺跡出土遺物

宮苑井ノ口(82図9)

宮苑井ノ口(82図10)


宮苑井ノ口(82図16右、17左)

宮苑井ノ口(82図21)

宮苑井ノ口(82図24)

宮苑井ノ口(82図29)

宮苑井ノ口(82図30)

宮苑井ノ口(82図18)

宮苑井ノ口(82図20)

宮苑井ノ口(83図2)

宮苑井ノ口(83図4)

宮苑井ノ口(83図3)

60　宮苑井ノ口遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かくにしいせき・みやぞのいのくちいせき
書名	賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡
副書名	県道小扶間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	藤田勝弘・山田拓伸
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分県大分市大字中判田1977番地　TEL (097)-597-5675
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
賀来西遺跡	大分市大字賀来	44201	322348	33°12'35"	131°33'47"	2003 0512～2003 0610	384㎡	県道小扶間大分線道路改良工事
宮苑井ノ口遺跡	大分市大字宮苑	44201	322349	33°12'36"	131°33'23"	2003 0805～2003 1003	552㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
賀来西遺跡	包含層	縄文時代 弥生時代	竪穴1基	縄文土器 弥生土器	
宮苑井ノ口遺跡	集落、小児用カメ棺墓地	弥生～古墳時代	竪穴8基・土坑7基・溝3条・小児用カメ棺墓13基	弥生～古墳時代の土器・石器	小児用カメ棺墓が13基出土

要約	宮苑井ノ口遺跡の発掘調査で、弥生～古墳時代に営む竪穴8基、土坑7基、溝状遺構3基、合わせ口の小児用カメ棺墓13基が検出されている。その内、弥生後期後葉～古墳前期前葉小児用カメ棺墓群の配置には、規則的なまとまりがあることが見て取れた。それは、赤色顔料の分布する円形の小空間を中心に、カメ棺の長軸が放射状に、かつ半円形に配置されており、この小空間は、カメ棺に埋葬する小児を弔う、一連の葬送の儀式が執り行なわれた場所ではないかと推察された。これまでに、大分川流域一帯の遺跡から小児用カメ棺墓の発見は数例あるが、カメ棺墓群と墓道との有機的関係が把握された遺跡の報告はなく、宮苑井ノ口遺跡の小児用カメ棺墓群は極めて注目される発見例といっても過言ではない。

賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡

県道小挟岡大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第4集

平成17年3月31日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分県大分市大字中判田1977番地
TEL (097)-597-5675

印　　刷　丸德印刷株式会社
〒870-0911
大分県大分市新川4-50
TEL 097-558-7737